

鶴翔会

令和4年10月1日発行 2022年 133号

岡山医学同窓会報



武田俊光



実習風景

表紙の写真



たけだ としみつ
武田 俊光 (1899~1972)

明治32年鹿児島県生まれ。大正11年岡山医科大学附属医学専門部卒業。昭和6年、医学博士の学位を授与された。卒業後、岡山医科大学助手として物理療法科に勤務し、大正14年3月、文部省海外留学生として、レントゲン学研究のため欧米に留学した。ドイツ、オーストリア、アメリカのレントゲン学を学んで帰国後の昭和2年8月、岡山医科大学助教授に就任、レントゲン科主任を命ぜられた。同21年3月、岡山医科大学放射線科初代教授に就任、同27年4月、岡山大学医学部教授に就任し、同39年3月、定年により退官、岡山大学名誉教授の称号を授与された。退官後は、公立共済組合中国中央病院長に就任し、地域医療の発展に貢献した。

学内では、昭和32年4月、岡山大学医学部に診療エックス線技師学校を設立し、初代校長として学校教育としての技師養成の礎を築いた。また、同32年6月から2年間、岡山大学医学部附属病院長に就任し、病院の管理・運営に大きく貢献した。

学会活動においては、昭和17年4月、第7回日本医学放射線学会総会、同29年には第13回の同総会が岡山大で開催され、同総会の会長として大会を成功に導いた。

武田教授の時代から、放射線医学教室における研究は、(A)放射線生物学 1. 作用機序、2. 時間因子、3. 習慣性、4. 放射線障害、5. 感受性、6. XO物質、(B)放射線化学、物理学、(C)放射線診断学であったが、主な研究は、2. 時間因子や3. 習慣性に関する研究であった。

こうした放射線障害と脂質代謝に注目した系統的研究は、当教室の独創的研究のひとつである。また、放射線治療に関しては、時間因子の研究を重ね、第15回日本医学会総会において「放射線の時間因子と治療法の変遷」と題した総会講演を行い、大きな反響を得た。実験的にもこれについて幾多の研究を行い、その結果、放射線感受性の最も高い分裂前期をねらって照射を続けていけば、障害も少なくよりよい効果をもたらすものと考え、照射間隔を推定72時間とする照射法を確立した。また、放射線診断においても、消化器系統の早期がんに関するレ線像の解析やその際用いられる造影剤の研究を進めた。また、外来部門のX線診断に係る多くの設備の充実に尽力した。

(参考：岡山大学医学部百年史 岡山大学医学部放射線医学教室開講50周年記念誌)



巻頭言	1
大学院医歯薬学総合研究科長 学術研究院医歯薬学域長 伊達 勲	
ご挨拶	2
岡山大学学術研究院医歯薬学域人体構成学分野教授就任 川口綾乃 岡山大学学術研究院医歯薬学域肝・腎疾患連携推進講座教授就任 高木章乃夫 岡山大学学術研究院医歯薬学域むくみを科学する先進リンパ学講座特任教授就任 品岡 玲 川崎医科大学形成外科学主任教授就任 山下修二 国際医療福祉大学医学部教授就任 濱田利久 川崎医科大学乳腺甲状腺外科学主任教授就任 平 成人 川崎医科大学免疫学教室教授就任 向井知之 鳥取大学医学部統合生理学教授就任 檜山武史	
会員動向	8
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 令和4年度岡山大学医学部医学科入学者 令和3年度岡山医学会賞受賞者 会員訃報	
クラブ報告	11
岡山大学ピアノ部.SPF 部長 宮里佳奈 医学部ソフトテニス部 キャプテン 山下瑞生	
会員のこえ	13
ルネッサンス基金について 坪井修平 鶴翔会・鶴翔会報・医学部へ再度のお願い 坪井修平	
会員の近況	19
「法医は死者の代理人一期一会の対話と法医学者という仕事」を読んで 坪井修平	
支部だより	21
令和4年度 鶴翔会高知県支部総会報告 武田明雄	
関連病院だより	22
日本赤十字社 多可赤十字病院 梶本和宏 児島聖康病院 山崎泰源	
随 想	24
父の殉職の碑を訪ねて 藤田 譲 文部科学省医学教育課 難波正義 目医者をつぶやき「Okayama Field Station, University of Michigan」 松尾俊彦	
新聞より	28
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2022.2.1～2022.8.31）	
学会・研究会だより	32
第86回日本循環器学会学術集会 伊藤 浩	

海外への留学生一覧

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会（書面総会）の報告
医学部医学資料室がリニューアルオープン
ご寄贈いただきました
会費納入について（お知らせ）
事務局からのお知らせ
鶴翔会のホームページをご存じでしょうか
学生編集委員と意見交換を行いました
令和4年度卒年次別会費納入状況
鶴翔会会員名簿（2022年版）の発行について
（公財）岡山医学振興会より「教育研究を進めるもの2」 山田雅夫
岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧
鶴翔会会報 投稿内規

今号の格言・名言（選者：読み人知らず）

You can only be young once. But you can always be immature.

Dave Barry (1947-)

巻 頭 言

大学院医歯薬学総合研究科長 伊 達 勲
学術研究院医歯薬学域長

2022年もCOVID-19に振り回され、特に第7波では多くの医療関係者自身が感染したり、濃厚接触者になったりして、医療業務に大きな影響を及ぼしています。鶴翔会の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。前号の鶴翔会会報は、岡山大学医学部150周年特集号でしたので、巻頭言は1年ぶりとなります。

2022年4月に岡山大学全体で大学院の名称の変更があり、大学院を学術研究院、それぞれの研究科を学域、と呼ぶようになりました。大学院医歯薬学総合研究科の新しい名称は、学術研究院医歯薬学域です。とはいえ、業績の記載や教員の所属に関しては大学院医歯薬学総合研究科の名称も記載が認められており、この巻頭言の私の職位も両者併記としております。

2023年4月には大学院の改組を予定しています。これまで医歯薬学総合研究科は4つの専攻から構成されてきました（生体制御科学専攻、病態制御科学専攻、機能再生・再建科学専攻、社会環境生命科学専攻）。これを学修者主体の学位プログラム、という考え方から、大括りの1専攻（医歯薬学専攻）とするのが改組の主旨で、学びやすく教えやすいシステムになると期待しています。魅力的な3つの学位プログラム（医学・歯学・薬学）と特色ある選択プログラム・コースを用意しました。これまで通り、多くの皆様が大学院で学び、研究成果を世界に向けて発信されることを期待しています。

2022年度の医歯薬学総合研究科博士課程・修士課程の大学院入学者は定員を超える数となり、大変うれしく思っています。各教育研究分野の研究内容や大学院入試などの情報は多くの方がホームページから得るので、より読みやすいホームページにリニューアルし、スマホでも読みやすい形態に対応しています。外国からの大学院入学希望者も多いので、英語版を充実させること、また、SNSでの情報発信を視野に入れることなどを考える必要があります。

岡山大学は研究大学を目指す、という目標を打ち出しています。目に見える指標としては、科研費の獲得状況があげられ、毎年、学内の科学研究費補助事業部会による分析が発表されます。採択件数、獲得総額とも学内の研究科の中では医歯薬学総合研究科が最も多く、その中でも医学系が稼ぎ頭です。しかしながら、両隣の広島大学、神戸大学の医学系の情報を見ると本学とはほぼ拮抗した状況にあり、本学には科研費の採択件数増加のためのさらなる努力が望まれます。学内に常勤として在職していなくても客員研究員として届ければ科研費の申請ができるので、その仕組みも利用していくよう働きかけたいと思います。

研究大学としての評価には、発表論文の数や質が大きく影響します。皆さんがよくご存じなのはインパクトファクターで、少しでも高いインパクトファクターの雑誌に投稿することを誰しもが心がけていると思います。最近よく評価に使われる指標がh-index, Top 10%論文数（あるいはTop 1%論文数）、Q1ジャーナル論文数、国際共著論文数などです。それぞれの正確な定義はインターネット上で調べていただければと存じますが、多くの論文から引用される質の高い論文がpublishされているか、国際共同研究を進めているか、というところに評価の大きな重点が置かれていることを認識する必要があります。

岡山大学はがんゲノム医療中核拠点病院であり、臨床研究中核病院でもあります。また革新的医療技術創出拠点および橋渡し研究プログラムの拠点です。加えて研究大学強化促進事業、スーパーグローバル大学創成支援事業にも採択されています。医歯薬学総合研究科では、大学病院、医学部医学科・保健学科、保健学研究科と共同してこれらの事業を推し進めて参ります。鶴翔会の皆様のご健勝を祈念申し上げますとともに、今後ともご支援ご指導のほど、よろしく申し上げます。

ご挨拶

岡山大学学術研究院医歯薬学域人体構成学分野教授に 川口綾乃氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年6月1日付けで、岡山大学学術研究院医歯薬学域人体構成学分野教授を拜命いたしました川口綾乃と申します。長い歴史をもつ教育機関である岡山大学で、教育と

研究に携わらせていただくことの責任の重さに身の引き締まる思いです。どうぞよろしくお願いいたします。

私は平成7年に大阪大学医学部を卒業、眼科臨床医として3年間勤務したのち博士課程へ進学、神経解剖学教室で基礎医学研究を行い学位を取得しました。以来継続して、哺乳類の中樞神経系発生の研究を行っております。理化学研究所勤務を経て名古屋大学医学部へ異動後は、准教授として学部生の発生学・解剖学教育と大学院生の研究指導も行っていました。

本学の解剖学教育は医学科学生を対象とするのみならず保健学科・歯学・薬学、大学院教育とも連携して実施されており、解剖させていただくご献体数は全国的にもトップクラスにあります。これもひとえに先代の教授であられた大塚愛二先生をはじめ歴代の教授先生方のご尽力と担当職員の勤勉さ、そしてともしび会の関係者の皆様の深いご理解とご高配によるものであり、この場を借りてお礼申し上げます。学生を対象にした解剖学教育に加え、治療法開発にもつながる解剖学研究や卒後教育としての臨床応用解剖がより求められる時代になっておりますが、その点でも本学は日本を牽引する立場にあります。この良い伝統を臨床の先生方のご協力を得ながら更に展開し、医学の発展へつながる教育・研究環境を作ることが解剖学教室の主宰者としての使命であると考えております。

鶴翔会の先生方におかれましては、何卒、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

略歴

- 1995年 大阪大学医学部医学科 卒業
- 1995年 大阪大学医学部附属病院眼科 研修医
- 1996年 国立大阪南病院眼科 医員
- 1998年 大阪大学大学院医学系研究科博士課程 入学
- 2002年 理化学研究所発生再生科学総合研究センター 研究員
- 2008年 名古屋大学大学院医学系研究科 准教授
- 2022年 岡山大学学術研究院医歯薬学域人体構成学分野 教授

岡山大学学術研究院医歯薬学域 肝・腎疾患連携推進講座教授に 高木章乃夫氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび令和4年4月1日付けで学術研究院医歯薬学域肝・腎疾患連携推進講座教授を拜命致しましたので、ご挨拶申し上げます。

本講座は肝・腎疾患の対策を統合的に行っていくことを目的に医療法人創和会（しげい病院・重井医学研究所附属病院）の協力により設立されました。近年高齢化が進み併存疾患が複数となることもしばしばで臓器をまたいだ対策・管理が必要です。一方で高度の治療技術提供のためには臓器別の専門性も大切です。この溝を埋めるべく、疾患が重なることも多い肝臓と腎臓の啓発教育活動、難病の実態調査など統合的医療体制を提案していきたいと考えております。

私は平成2年に岡山大学を卒業し、辻孝夫先生主宰でありました第一内科に入局、同時に大学院に入学し、自己抗体の肝疾患病態との関連につき検討し学位を取得致しました。その後ドイツハノーファー医科大学に留学し、C型肝炎の免疫動態と臨床経過に関する研究を行い帰国致しました。最初に赴任した赤磐郡医師会病院で透析医療に携わるようになり、重井医学研究所附属病院での研修を経て、心臓病センター榊原病院透析室、倉敷中央病院腎臓内科に勤務し、腎疾患診療に取り組みました。平成12年に大学帰局後、白鳥康史教授のご指導もあり、腎不全対策も必要になる肝不全・

移植医療に携わるようになりました。山本和秀教授、岡田裕之教授の下でも、臨床免疫・生体ストレス反応などの研究と肝・胆・膵外科八木孝仁教授のご指導もいただきながら肝不全診療を継続して参りました。

近年、高齢化に加え肝硬変・肝癌の原因として脂肪性肝疾患の影響が大きくなり腎疾患とリスクが近接してきました。このような医療環境も鑑みて、肝疾患と腎疾患の予防・受診・受療の啓発推進活動と実態調査を行っていく所存です。

肝疾患と腎疾患を一網打尽に発見、改善していくことに邁進して参ります所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

略 歴

1990年3月	岡山大学医学部医学科 卒業
1990年4月	岡山大学医学部第一内科学講座 入局 岡山大学大学院医学研究科(第一内科学) 入学
1994年3月	岡山大学大学院医学研究科(第一内科学) 修了
1995年10月	ドイツ ハノーファー医科大学 ポストドク研究員 (1997年10月まで)
2002年9月	岡山大学医学部附属病院第一内科助手
2010年12月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器肝臓内科学講師
2012年6月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器肝臓内科学准教授
2022年4月	岡山大学学術研究院医歯薬学域肝・腎疾患連携推進講座 教授 (特任)

岡山大学学術研究院医歯薬学域むくみを科学する先進リンパ学講座特任教授に 品岡玲氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび2022年4月1日付けで、学術研究院医歯薬学域むくみを科学する先進リンパ学講座特任教授を拝命いたしました。

これもひとえに同窓の先生方の多大なるご支援のおかげと心より感謝申し上げます。

私は2010年に岡山大学を卒業後、岡山大学病院・岡山市市民病院で初期研修に従事すると同時にARTプログラムを用いて大塚愛二教授(前人体構成学教授)のご指導の下、血管系の構造(特に弾性線維)の基礎研究を行い、大学院を修了させていただきました。初期研修終了後は木股敬裕教授が主宰されております形成再建外科に入局しました。岡山大学病院・香川県立中央病院で形成外科医として研鑽を積ませていただきました。2015年4月より大塚愛二教授の主宰する人体構成学でリンパ系の解剖研究を開始させていただくと同時に、木股敬裕教授のもとでリンパ浮腫の臨床を学ばせていただきました。

リンパ浮腫はリンパ系の異常により生じるリンパの組織鬱滞で、がん治療後の四肢に多く生じます。近年の癌サバイバーの増加とともに患者は増える一方で、がん対策推進基本計画内でも支持療法として対応が強く求められているものでございます。しかし、リンパ系の解剖生理は不明な点が多く、リンパ系の画像検査も十分なものが存在しないため、リンパ浮腫の診断・治療は整っていないのが現状です。今回、我々が保持するリンパ解剖学的知財を用いて、新しいリンパ画像診断装置を浜松ホトニクス株式会社が、新しい空気圧式リンパ流促進装置を株式会社テクノ高槻が研究開発するに際し、当講座を新しく立ち上げることになりました。当講座の大きな目的は医療機器の開発でございますが、癌サバイバーを悩ますリンパ浮腫の診療体系を構築し、岡山大学病院のみならず、全国のリンパ浮腫患者へ福音が届けられますよう微力ながら努めてまいります。

末筆となりましたが、これまで教え導いて下さいました恩師の先生方に感謝申し上げるとともに、同窓の先生方には、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

2010年3月	岡山大学医学部卒業
2010年4月	岡山大学病院 (初期研修)
2010年8月	岡山市市民病院 (初期研修)
2012年4月	岡山大学病院 形成外科 (後期研修)
2013年4月	香川県立中央病院 形成外科
2013年9月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科(人体構成学分野) 博士課程修了
2015年4月	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 人体構成学分野 助教

2021年4月 岡山大学病院 形成外科 助教
 2022年4月 岡山大学学術研究院医歯薬学域 むくみを科学する先進リンパ学講座 特任教授

川崎医科大学形成外科学主任教授に山下修二氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年5月1日付で川崎医科大学形成外科学主任教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は平成13年に岡山大学を卒業し、光嶋勲先生（現広島大学形成外科・国際リンパ浮腫センター教授）の主宰する岡山大学形成外科に入局しました。その後も木股敬裕教授のご指導の下、学位を取得し、またMD Anderson Cancer Center (Texas, USA) に留学する機会を得ました。平成26年からは東京大学形成外科において各種再建手術に取り組み研鑽を積んできました。現在の自分があるのは皆様の多大なご指導の賜物で、改めて感謝申し上げます。

マイクロサージャリー（微小血管吻合術）の魅力は、従来の方法では治療できなかった疾患に対し、この技術を導入することで飛躍的に治療効果を向上させることができることにあります。代表的なものに、リンパ浮腫に対して行うリンパ管吻合術やリンパ節移植術があります。この方法は国内外でもトピックであり、当教室は本治療法を行っている国内でも数少ない施設となっています。また、糖尿病性足壊疽や重症虚血肢などの難治性潰瘍に対して、従来法では大切断を余儀なくされていた症例であってもマイクロサージャリーにより救肢できるようになり治療効果が飛躍的に向上しています。

また、マイクロサージャリーを駆使した再建手術は、がん患者のQOLを機能的にも整容的にも向上するために行われてきました。乳癌に対する乳房再建では、主に自家組織による再建を行い、リンパ節を付加することでリンパ節郭清に続発する上肢のリンパ浮腫を予防しながら乳房を再建することにも取り組んでいます。また、頭頸部領域においても頭頸部癌に対する頭頸部再建や、顔面神経麻痺に対しては筋肉

移植や神経移植を駆使し顔面の形態の回復のみならず機能的な再建も行っています。マイクロサージャリーは、四肢の外傷にも応用され、切断指など一度切断された組織の血管を吻合することで再び接合することができます。このように再建手術の守備範囲は広く、今後も様々な先端的な再建手術に取り組んでいきたいと考えています。

この度、郷里の岡山で再び地域医療に貢献できることに大きな喜びを感じております。今後も川崎医科大学形成外科学教室の発展に尽力してまいりますので、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

2001年 岡山大学医学部医学科 卒業
 2001年 岡山済生会総合病院 臨床研修医
 2003年 岡山大学医学部附属病院形成外科 医員
 2004年 自治医科大学分子病態治療研究センター臓器置換研究部 特別聴講生
 2005年 岡山大学医学部附属病院形成外科 医員
 2008年 岡崎市民病院形成外科 副部長
 2010年 岡山済生会総合病院形成外科 医長
 2011年 MD Anderson Cancer Center (Texas, USA) 形成外科 Visiting Scientist
 2012年 岡山済生会総合病院形成外科 医長
 2014年 東京大学医学部附属病院形成外科 助教
 2016年 東京大学医学部附属病院形成外科 特任講師
 2022年 川崎医科大学形成外科学 主任教授

国際医療福祉大学医学部教授に濱田利久氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび令和4年4月1日付で国際医療福祉大学医学部教授を拝命しましたのでご挨拶申し上げます。

私は東京医科歯科大学を卒業後、岡山大学医学部皮膚科学教室（荒田次郎教授）に入局しました。岡山にはゆかりがない私ですが、医局のみなさんや同門会の先生方、他科の先生方にも親身になってご指導いただいたこと

は、今でもそのご厚意に対し感謝に堪えません。入局後は、荒田次郎教授・岩月啓氏教授のご指導のもと臨床や教育に加え、皮膚リンパ腫領域の臨床研究におもに従事しました。新規治療薬の開発を進めるとともに診療ガイドラインのメンバーにも加えていただきました。平成30年より高松赤十字病院に移りましたが、森実真教授のご高配により多人数で皮膚科診療を行うことができました。前部長の池田政身先生が構築された病診連携網を基礎として、岡山大学在籍中以上に専門医療に従事することができました。複数の臨床研究に従事しつつ皮膚リンパ腫診療と研究を進めることができ、そのつながりがご縁で今回のお話をいただきました。

国際医療福祉大学成田病院は、国際医療福祉大学医学部に併設され、2020年3月に開院しました。現在、1期生が6年生で大学としてはこれからですが、今後の発展に大変期待しています。成田市から北と東方面は茨城県南部を含めて医療施設の密度が低く、遠方からも多数の患者さんが来院し、外来や入院患者数、手術数はまさにうなぎのぼりです。専門診療も軌道に乗りつつあり、複数の臨床研究を準備しています。

コロナの影響で何でもリモートになってしまった結果、会員のみなさまにお会いするチャンスはほとんどなく、ご無沙汰している先生方も多くなってしまいました。定年とされる年齢までそう遠くないところに来ており、いただいたポジションを大切に精一杯努力する所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略 歴

1998年3月	東京医科歯科大学医学部医学科卒業
1998年4月	岡山大学医学部皮膚科入局
1998年6月	岡山労災病院レジデント（ローテート研修）
2000年6月	岡山大学医学部皮膚科医員
2002年5月	岡山大学医学部皮膚科助手
2003年3月	川崎医学振興財団川崎病院皮膚科レジデント
2004年4月	川崎医学振興財団川崎病院皮膚科副医長
2005年1月	岡山大学医学部皮膚科助手
2014年9月	岡山大学病院皮膚科講師
2018年1月	高松赤十字病院皮膚科副部長
2019年4月	高松赤十字病院皮膚科部長
2021年12月	国際医療福祉大学成田病院皮膚科病院教授
2022年4月	国際医療福祉大学成田病院医学部教授

川崎医科大学乳腺甲状腺外科学主任教授に平 成人氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

令和4年4月1日付で川崎医科大学乳腺甲状腺外科学主任教授ならびに同附属病院乳腺甲状腺外科部長を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成6年に山口大学医学部を卒業後、岡山大学産婦人科学教室に入局し国立岡山病院にて婦人科の良性・悪性疾患の診断と治療、周産期医療センター、NICUで周産期医療の修練を積みました。その後、平成7年に岡山大学旧第二外科（現呼吸器・乳腺内分泌外科）に入局し、関連病院（倉敷第一病院、宇和町立病院、岡山労災病院）にて6年間の外科研鑽を積みました。この間、腫瘍外科学ならびに臨床腫瘍学を専門とすることを志し、岡山大学に帰局後は、腫瘍グループで基礎研究を行い、学位を取得いたしました。

平成15年より四国がんセンターにレジデントとして勤務し、がん専門医の基礎的トレーニングを受け、平成17年からは乳腺専門スタッフとして乳がんの外科・薬物療法の修練を積みました。

平成19年に岡山大学病院乳腺・内分泌外科に帰局後は、乳がん患者さんを包括的にケアし、さらに教育・研究面でも協力関係を築くため、形成外科・理学療法士・精神科・看護師から構成される乳がん治療・再建センターを立ち上げました。また院外活動面では、平成21年に中・四国地域の乳腺専門医から構成されるNPO法人瀬戸内乳腺事業包括的支援機構を設立し、共用データベースの構築、臨床研究、教育・研修事業、市民啓発活動等に取り組んで参りました。私の主な研究分野は、乳がんの疫学研究、ヘルスアウトカム・がんサバイバーシップリサーチ、高齢者腫瘍学、ePRO（electric Patient-reported-outcome）の臨床導入に関する研究などです。また臨床面では遺伝性乳がんの診療体制の確立に努めて参りました。

岡山大学で学んだ知識と経験を活かし、4月からは川崎学園の一員として、歴史ある乳腺甲状腺外科学教室のさらなる発展に寄与し、地域住民への安心・安全な医療の提供、未来を担う医療人の育成、先駆的な医

学研究に尽力して参ります。

末筆にはなりますが、鶴翔会の先生方の益々のご健勝を祈念しますとともに、引き続きご指導とご支援の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

略 歴

- 1993年：山口大学医学部卒業
岡山大学産婦人科学教室入局
- 1994年：岡山大学第二外科
(現、呼吸器・乳腺内分泌外科入局)
- 2001年：岡山大学医学部研究生
- 2003年：国立病院四国がんセンター
(現、独立行政法人機構四国がんセンター)
- 2007年：岡山大学病院 助教(乳腺・内分泌外科)
- 2013年：岡山大学病院 講師(乳腺・内分泌外科)
- 2017年：岡山大学病院 准教授(乳腺・内分泌外科)
- 2022年：川崎医科大学 主任教授(乳腺甲状腺外科学)

川崎医科大学免疫学教室教授 に向井知之氏 ご紹介



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、2022年5月1日付けで、川崎医科大学免疫学教室教授を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

私は1999年に岡山大学を卒業し、榎野博史教授が主宰されている第三内科学教室(現腎・免疫・内分泌代謝内科学教室)に入局いたしました。関連病院での研修の後、同教室にて診療・研究に従事しました。研究においては、大塚文男先生(現総合内科学教室教授)・山村昌弘先生の指導のもと、炎症性サイトカインが骨芽細胞機能に及ぼす影響について研究し、学位を取得しました。2007年から約2年間、愛知医科大学リウマチ科(山村昌弘教授)にて診療・教育・研究に従事しました。2009年から約5年間、米国ミズーリ大学カンザスシティ校の植木靖好先生(岡山大学分子医化学教室出身)の研究室にて、自己炎症性骨疾患「Cherubism」をテーマに基礎研究に従事しました。2014年の帰国時に、川崎医科大学リウマチ・膠原病学教室(守田吉孝教授)に着任いたしました。診

療を行うと共に、大学院生を指導しながら基礎研究を行っていましたが、基礎研究により注力するため2021年に免疫学教室に移籍し、このたび教授の拝命となりました。大学在学中、またその後のキャリア形成において、岡山大学出身の先生方には大変お世話になり、改めて感謝申し上げます。

臨床面で関節リウマチを専門としていることもあり、基礎研究では「炎症性サイトカインと骨」「炎症性骨破壊」をテーマに研究を進めていました。その中で、自己炎症性骨疾患「Cherubism」や自己炎症性疾患「TNF受容体関連周期性症候群」を含めた遺伝性炎症性疾患へと研究を展開し、遺伝子改変による疾患モデルマウスの解析を行っています。また、炎症性皮膚疾患(乾癬)、アトピー性皮膚炎、メタボリック症候群・脂肪肝炎、血管石灰化などに免疫・炎症研究を展開しています。

先に記載させてもらいましたが、私は臨床医学教室に長年所属した後に、2021年に基礎医学教室(免疫学教室)に移籍しました。本免疫学教室での今後の教育・研究においては、この経歴を強みに変えて、免疫学と臨床医学との関連に焦点を当てた「臨床免疫学」を柱としたいと考えています。Research mindを持った良医を育成し、臨床に還元できる医学研究を行っていきたいと思います。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りすると共に、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

- 1999年 岡山大学医学部卒業
- 1999年 岡山大学医学部 第三内科(現 腎・免疫・内分泌代謝内科学)入局
- 2007年 愛知医科大学 リウマチ科 助教
- 2009年 米国ミズーリ大学カンザスシティ校骨研究部門 リサーチフェロー
- 2014年 川崎医科大学 リウマチ・膠原病学 講師
- 2015年 同 准教授
- 2021年 川崎医科大学 免疫学 准教授
- 2022年 同 主任教授(川崎医科大学附属病院 リウマチ・膠原病科 特任副部長兼務)

鳥取大学医学部統合生理学教授に檜山武史氏 ご就任



ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年10月1日付けで鳥取大学医学部統合生理学教授を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

私は愛知県岡崎市の基礎生物学研究所に20年近く在籍したのち、2019年に岡山大学に参りました。3年余りの期間でしたが、その間に、多くの先生方に温かく迎え入れて頂き、臨床医学、医学教育など多岐にわたってご指導いただきました。この間の学び無くしては、このたびの教授拝命はあり得ませんでした。

私は医学部出身ではございませんが、母方は代々にわたる医者一家であり、その先祖の出身地が今回の赴任地の米子市ですので、ご縁を感じております。高校時代、母方の医者家系を継いで医学部に進学するか、父方の研究者家系を継ぐか悩みました。自分自身の中で両方の折り合いをつけようとして基礎医学、特に新たな時代の学問である脳科学を志した経緯がございます。東大の生理学より移られた塚原伸晃教授は、1960年代末に時代に先駆けて神経生理学と情報工学の融合を目指した生物工学科を創設されました。そこで学び、脳神経科学一筋に歩んでまいりました。その一方、臨床医学への思いが冷めることもありませんでした。

その思いを抱えて岡山大学に移ってからは、たくさんの先生方に直接ご指導を仰ぐ機会に恵まれました。さらに、優秀な学生たちの助けを借りながら、さまざまな疾患と脳神経機能の間の関係を探る新たな研究の一步を踏み出すことができました。これも、長年の臨床の伝統の上に医学研究を強力に推進されている岡山大学という環境でこそ可能だったと感じております。このような研究環境を与えてくださいました岡山大学のみなさまには、どれだけ感謝しても足りるものではないでございます。

もとより微力ではございますが、赴任先においても臨床医学と基礎医学を接続し融合する研究と教育の発展に貢献すべく努力精進致す所存でございます。鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りするとともに、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

- 1992年3月 ヴィアートル学園洛星高等学校卒業
- 1997年3月 大阪大学基礎工学部生物工学科卒業
- 1999年3月 大阪大学大学院基礎工学研究科卒業
- 2002年9月 総合研究大学院大学博士課程修了（理学博士）
- 2002年11月 基礎生物学研究所助手
- 2002年11月 総合研究大学院大学助手（併任）
- 2019年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科講師
- 2022年10月 鳥取大学医学部教授



会 員 動 向



受 章

- 旭日双光章 (昭48) 難 波 義 夫
- 〃 (昭51) 大井田 二 郎
- 瑞宝中綬章 (昭46) 脇 口 宏
- 令和3年度警察協力章警察庁長官表彰 (昭54) 玉 木 俊 雄
- 令和3年度公衆衛生事業功労者厚生労働大臣表彰 (昭40) 西 下 明

このたびの受賞に対し、会員一同心からお慶び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。
 ※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

医学部・病院関係

教授就任

- 人体構成学 川 口 綾 乃
- 肝・腎疾患連携推進講座 高 木 章 乃 夫
- むくみを科学する先進リンパ学講座 品 岡 玲

准教授就任

- 放射線医学 松 井 裕 輔
- 乳腺・内分泌外科 枝 園 忠 彦
- 運動器外傷学講座 中 田 英 二
- 運動器知能化システム開発講座 鉄 永 智 紀
- 腫瘍センター 香 川 俊 輔

講師就任

- 皮膚科学 川 上 佳 夫
- 救命救急・災害医学 湯 本 哲 也
- 形成再建外科学 松 本 洋

- 慢性腎不全総合治療学講座 森 永 裕 士
- 赤磐（あかいわ）総合診療医学講座 灘 隆 宏
- 血液浄化療法部 田 邊 克 幸
- 乳腺・内分泌外科 岩 谷 胤 生
- 消化器・肝臓内科学 原 田 馨 太
- 麻酔・蘇生学 谷 西 秀 紀
- 運動器スポーツ医学講座 雑 賀 建 多

令和4年度 岡山大学医学部医学科入学者

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 竹内 豪 | 衣田 彩乃 | 山下 拓朗 |
| 廣幡 絢子 | 坂手 萌子 | 中村 美樹 |
| 坂口 諒 | 森 一将 | 樫本 侑奈 |
| 原 菜々瀬 | 山崎 義信 | 小山 弥風 |
| 辻 昌樹 | 畠山昂太郎 | 福西 瑞生 |
| 高瀬 結万 | 齋藤 光莉 | 嶋野 綾音 |
| 飯岡 佑太 | 藤本 信智 | 棟田 淳雅 |
| 竹内 颯汰 | 後藤 顕次 | 佐藤 諠治 |
| 永野 佑歩 | 三宅 眞希 | 春田 雅樹 |
| 有村総一郎 | 高橋 万機 | 橘高みなみ |
| 横山 裕之 | 小俣 景俊 | 藤原 優花 |
| 木元 美優 | 篠原紗也子 | 野島 蒼也 |
| 國末 莉沙 | 田中 瑞希 | 杉口 和樹 |
| 橋本 彩花 | 亀山 遼平 | 柏原 北斗 |
| 堀 未早 | 市野 楠奈 | 西崎 真大 |
| 緑川 大樹 | 李 恩花 | 濱岡 諒大 |
| 伊藤 響生 | 高橋賢史朗 | 瀬尾 環 |
| 崎山 奈央 | 松本 拓也 | 三木さくら |
| 野藤 銀河 | 三谷 峻永 | 實延 正喜 |
| 田中 杏依 | 藤本 花子 | 赤井 翔 |
| 三木 雄翔 | 藤原 幹太 | 佐藤 大 |
| 澤西 喜大 | 山田菜々美 | 上垣外英史 |
| 吉岡 宏彌 | 石井志有人 | 名倉 一葉 |
| 田地野龍星 | 國次 郁弥 | 松本 陽成 |
| 道下 凜子 | 三宅 乙枝 | 三谷 知蔵 |
| 明石梨璃子 | 山田 真優 | 林 あすみ |
| 川村 哲 | 西峯 空来 | 貝原 啓斗 |
| 矢野 順三 | 橋野眞光人 | 中村 聡汰 |
| 矢野 有紗 | 小川 芽姫 | 田中 皓己 |
| 兒島恵美利 | 毛利 祐翔 | 斎藤 青司 |
| 岩井 貴寛 | 大住 洸平 | 樋口 凱斗 |
| 岩戸 大 | 谷合樹梨亜 | 沖屋 新平 |
| 石守 未奈 | 川崎 峻祐 | 八木 萌 |
| 石田 沙織 | 大下 航平 | 岩崎 幹矢 |

中田 啓太	野口 由翔	白羽 恭士
仙田 詩織	佐藤 百恵	三神 映月
藤井 顕	古内 龍雅	三好 智也
平野 里桜	岩元 智佳	原 真梨
渡辺友季子	西谷 昂大	大橋早紀子

関連病院関係

入会

多可赤十字病院 (兵庫県)
 児島聖康病院 (岡山県)

退会

製鉄記念広畑病院 (兵庫県)
 佐々木外科病院 (山口県)

名称変更

みとよ市民病院 (旧永康病院) (香川県)
 城南病院 (旧城南多胡病院) (兵庫県)

令和3年度岡山医学会賞受賞者

総合研究奨励賞 (結城賞)

山田 大祐 (組織機能修復学 助教)
 Induction and expansion of human PRRX1⁺ limb-bud-like mesenchymal cells from pluripotent stem cells

孫 翠明 (中国医科大学附属第一病院)
 Spred2 controls the severity of Concanavalin A-induced liver damage by limiting interferon-gamma production by CD4⁺ and CD8⁺ T cells

山口 哲志 (腎・免疫・内分泌代謝内科学 医員)
 Adipocyte-Specific Inhibition of Mir221/222 Ameliorates Diet-Induced Obesity Through Targeting Ddit4

原田 洸 (マウントサイナイ・ベスイスラエル病院 内科レジデント)
 Trends in the Nontuberculous Mycobacterial Disease Mortality Rate in Japan: A Nationwide Observational Study, 1997-2016

がん研究奨励賞 (林原賞・山田賞)

西田充香子 (免疫学 助教)
 Mitochondrial reactive oxygen species trigger metformin-dependent antitumor immunity via activation of Nrf2/mTORC1/p62 axis in tumor-

infiltrating CD8T lymphocytes

垣内 慶彦 (消化器外科学 医員)
 Local oncolytic adenovirotherapy produces an abscopal effect via tumor-derived extracellular vesicles

山崎 泰史 (消化器内科 助教)
 Nonrecurrence Rate of Underwater EMR for ≤20-mm Nonampullary Duodenal Adenomas: A Multicenter Prospective Study (D-UEMR Study)

胸部・循環研究奨励賞 (砂田賞)

市川 啓之 (循環器内科 医員)
 Incremental prognostic value of non-alcoholic fatty liver disease over coronary computed tomography angiography findings in patients with suspected coronary artery disease

妹尾 賢 (血液・腫瘍・呼吸器内科学 大学院生)
 Essential role of IL-23 in the development of acute exacerbation of pulmonary fibrosis

小林 泰幸 (The Hospital for Sick Children, University of Toronto・Research Fellow)
 Staged repair of Tetralogy of Fallot: A Strategy for Optimizing Clinical and Functional Outcomes

脳神経研究奨励賞 (新見賞)

金 一徹 (脳神経外科学 大学院生)
 Vagus Nerve Stimulation with Mild Stimulation Intensity Exerts Anti-Inflammatory and Neuroprotective Effects in Parkinson's Disease Model Rats

野島弘二郎 (分子医化学 Pre-ART生)
 Assessment of Possible Contributions of Hyaluronan and Proteoglycan Binding Link Protein 4 to Differential Perineuronal Net Formation at the Calyx of Held

教育奨励賞

無し

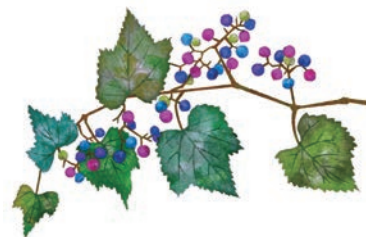
※氏名後の () は、応募時の所属です。

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

旧教員	大森晋爾	2022. 4. 13
昭21	大萩順蔵	2022. 2. 7
昭23	塩月健次郎	2014. 5. 21
昭24専	大橋 亘	2022. 8. 7
昭24	佐々木 甲子郎	2022. 2. 16
昭24	山光次郎	2021. 11. 4
昭25専	赤木和彦	2022. 3. 23
昭25専	一宮道憲	2021. 12. 4
昭25専	竹内梓郎	2022. 1. 17
昭27	梅田昭正	2022. 3. 11
昭28	氏家陸夫	2022. 7. 20
昭28	小山靖夫	2022. 7. 10
昭28	三宅隆雄	2021
昭28	山崎謙三郎	不明
昭29	那須亨二	2022. 6. 17
昭30	鍋島三朗	2022. 3. 23
昭30	森定諦	2022. 4. 17
昭31	大森達也	2021. 9. 4
昭31	濱松 宏	2020. 7. 30
昭32	折田洋造	2022. 4. 15
昭32	佐藤 繁	2021. 11. 6
昭32	白井吉郎	2021. 2
昭33	氏平一郎	2022. 6. 17
昭33	高原正好	2021. 9
昭34	小武守研二	2022. 4. 27
昭34	小西静雄	2021. 8. 17
昭34	寺尾 章	2022. 1. 24
昭35	岡本迪男	2022. 2. 22
昭37	林 泰明	2022. 7
昭38	三宮崇典	2022. 6. 26
昭38	種谷節郎	2022. 5. 31
昭39	坂田俊輔	2022. 4. 3
昭41	藤井秀昭	2022. 7
昭42	川瀬美枝	2022. 4. 23
昭42	西岡 聖	2021. 12. 7
昭45	藤井 信	2021. 5. 26
昭47	三谷 健	2022. 4. 16
昭48	永井信也	2022. 1. 6
昭49	角田光男	2022. 3. 10
昭50	中山頼和	2021. 4. 15
昭50	長谷川俊水	2020. 3. 22
昭50	福田 博	2022. 3. 1
昭53院	藤原良一	2012. 10. 3

平1	洪谷 修	不明
平8院	井上高明	2021. 12
平25院	藤原義朗	2022. 1
会員	大西武生	2022. 2. 8
会員	小野芳郎	2022. 1. 23
会員	河野 淳	2021. 6. 29
会員	瀬能孝敏	2022. 7. 11
会員	高野純行	2020. 12. 3
会員	森重照夫	2021. 12. 16



クラブ報告

岡山大学ピアノ部.SPF

部長 宮里佳奈

盛夏のみぎり、鶴翔会の皆さまにおかれましては、ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。

岡山大学ピアノ部.SPFには現在、医学部35人、歯学部8人、津島生28人の計71人が在籍しています。

年に数回開かれる演奏会への出演とそれにむけての練習が主な活動となっており、他にも現在はコロナの状況で出来ていませんが、例年は岡山大学病院や老人ホーム、介護施設などでも演奏活動を行っています。

多くの部員が演奏会に向けて各自鹿田、津島にある部室や長谷川楽器店の練習室を借用して練習しています。ほかの部活と違い、部室は基本的に年中空いているので曜日や時間を選ばず自分が好きな時に練習できます。

演奏会では、ピアノだけではなく管弦楽器や和楽器を用い、ソロやアンサンブルなど楽器や演奏形態を問わず、クラシックからポップス、ジャズまで幅広いジャンルの曲を演奏しています。下の写真は今年4月にJホールにて開かれた新歓演奏会の写真です。この演奏会は約二年ぶりとなる有観客での開催となり、たくさんの新入生が聴きにきてくれました。感染拡大防止のため外部生はオンラインでの視聴となりましたが、新入生とも交流をもつことができ、有意義な時間となりました。

鹿田所属の部活ではありますが津島の学生も多く在籍するため、演奏会は部員の演奏を通して刺激をもら

うのと同時に他学年や他学部生と交流を深める機会となっています。今後も感染対策を徹底しながら色々な場所で演奏活動ができればと思います。

最後になりますが、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、今後とも岡山大学ピアノ部.SPFの活動を温かく見守っていただければ幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

医学部ソフトテニス部

キャプテン 山下 瑞生

時下、鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。医学部ソフトテニス部の主将を務めさせていただいております、医学部医学科4年の山下瑞生と申します。

現在医学部ソフトテニス部は、男子が医学科11人、保健学科2人、女子が医学科4人、保健学科6人の合計23人で活動しています。日常の練習としては週3回行って、目標としては、春に行われる関西医歯薬大会、夏に行われる中四国大会、西医体で好成績を収めることを第一に考えて、幹部を中心に練習メニューを試行錯誤しながら限られた練習時間でより強くなることができるよう練習に励んでいます。練習中には先輩、後輩の垣根を越えてお互いの弱点をアドバイスしあうことで切磋琢磨することができています。また、テニスを楽しむということにも重点を置いているので、初心者から始めた部員であっても経験者や先輩に丁寧に指導してもらうことによって楽しくテニスをしながら、メキメキと上達していています。

2022年は新型コロナウイルスによって直前まで開催されるはずであった西医体も急遽中止が決まるなど、





(写真撮影時のみマスクを外しております。)

大会参加という点に関して言うと不完全燃焼の年でした。練習のモチベーションの一つでもある大会が開催されなかったため、部員もモチベーションを保つことが難しい状況であったと思いますが、それでも各々目標をたて、来シーズンには開催されるであろう大会にむけて練習を続けることができたと考えています。また、感染対策によって会食が禁止されていた時期もあったので部員間のコミュニケーションをとることすら難しい時期もありましたが、練習中に感染には十分留意しながらも同級生だけではなく先輩、後輩と良い関係性を築くことができていたのではないかと思います。

2023年こそは新型コロナウイルスの感染もある程度収束して、大会が開催されることを切に願ってこれからも部員全員で練習に励んでいく次第です。今後とも医学部ソフトテニス部の活動を温かく見守っていただければ幸いです。

最後に改めまして鶴翔会の皆様のみますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



会員のこえ

ルネッサンス基金について

昭40 坪井修平

2015年、昭和40年卒クラス 四〇会は卒後50周年記念同窓会を迎えて、“私達の今日あるは、母校や先輩、後輩の皆様のお蔭によるところが大きく、ささやかなりとも恩返しになるのではないか”と考え、記念行事の一環として「岡山大学医学部創立150周年記念事業(10年ルネッサンス計画)」に寄付することで衆議一決しました。

2012年10月、本誌第113号、p9に掲載された「次代を拓く創立150周年記念事業の大綱」に注目が集まっていたからです。

1. 地域に根ざし国際感覚を身につけた高度医療人の育成

- 学部教育における6年間一貫した地域医療・在宅医療実習（関連病院等における学部学生のEarly Exposureを含む）の支援
- 医学研究インターシップやARTプログラムによる学部学生のリサーチマインド育成支援
- 国際感覚醸成のため、アジア、欧米の大学との姉妹校締結
- 関連病院等と岡大病院の実体的な連携による、初期研修、後期研修、先進医療に至るまでシームレスで魅力ある研修システムの構築支援
- 学部教育、卒後臨床研修に参画する病院・診療所の支援

2. 学部教育から始まる新たな地域医療連携の構築
 - 関連病院の先生方による学部学生・研修医へのメッセージ・イベントの拡充
 - 関連病院等の医療関係者や市民による学部教育への参加推進
3. アメニティ…
4. 新たな連携関係の構築…
5. キャンパスの整備…

とあり、人材育成事業が冒頭に掲げられていました。

2019年7月、ホームページに「岡山大学医学部創立150周年記念事業募金について（お願い）」

「…次の50年、100年を貫く機軸をしっかりと打ち立て、次代を担う有為な医療人の育成、我が国の医療・福祉への貢献になお一層励み、ますます厚い信頼と高い評価をいただけるように歩みを進めてまいりたいと考え、創立150周年記念事業を計画いたしました。…私たちの教育・研究、診療に対する取り組みと人材育成を柱とした記念事業にご賛同いただき、是非、ご支援、ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます」と、ここでも人材育成の重要性が強く謳われていました。

2005年、四〇会は卒後40周年記念同窓会で岡山医学振興会に寄付させて頂きました。その後、詳細な決算報告が公表され、将来有望な若手研究者の支援に多少とも寄与出来たことが分かり、四〇会一同「寄付の甲斐があった…」と喜んでいました。50周年記念同窓会では40周年記念同窓会を上回る浄財が集まり、ルネッサンス基金のほかミャンマー医療人育成やベトナム先天性心疾患児に対する遠隔医療、ネパール医療人研修にも支援させて頂きました。



2020年、岡山大学医学部は創立150周年を迎えます。

私たちは2011年からの10年間を「10年ルネッサンス」として、150周年事業を展開してまいります。



2022年4月、本誌132号p136に「基金募金活動の終了について（お礼とご報告）」を拝見しました。

「…約1000を超える個人、団体から、6億5千万円を超えるご芳志を頂きました。お蔭さまで、念願でありました旧生化学講堂の整備改修をはじめ、教職員のアメニティ向上、また、次代を担う人材育成等教育事業、地域との連携関係事業など計画しておりました記念事業を進めることができました」と、トップに「…念願でありました旧生化学講堂の整備改修…」と、当初の謳い文句が後退しており、疑問に思いました。建築物などハード面いわゆるハコ物への投資は維持管理費が永遠？に続き、撤去費も巨費を要します。その費用はどうされるのでしょうか？ 国有財産への投資と国との関係にも小首を傾げています。

私は大都市の役所で10年働いた経験があります。直営や第3セクター方式でホテルや調理実習室を備えたスポーツジム等ハコ物を造り、土地代、建設費、人件費、維持管理費に巨額の公金を投じながら、結局は民間業者を圧迫し、天下り先になっているのでは…、と不審に思ったものです。

その点、人材育成などソフト面への投資は維持管理費が不要で、投資額の数倍、数百倍の価値のある成果を生み出す「夢」があります。当初「人材育成」を強調されながら、ハコ物を優先された経緯を説明して頂きたいと思えます。

また、「現在、約3000万円の残金をお預かりしております…」とだけあり、使途の詳細が不明です。四〇会事務局（故田中茂人・石津日出雄・奥田博之・小林完治・坪井修平）の庶務係としての責任もあり、鶴翔会事務局に問い合わせたところ、決算報告未定、と回答を戴きました。鶴翔会会員以外の個人、団体の方々は、我々以上に疑問を覚えていらっしゃるのではないかと、心配しています。是非、速やかに公表して頂くようお願い申し上げます。

昨年、医学部として、コロナによる経済的困窮学生への募金活動をされ、私も応募しましたが、ルネッサンス基金からの拠出は如何ほどでしょうか。

2005年8月、ハリケーン・カトリーナがニューオーリンズを中心にアメリカ南部を襲いました。私は、少額ですが、アメリカ赤十字社に寄付しました。ほどなく、メールで礼状が届き、その後数年間に亘って、定期的に写真入りの災害復興の状況や寄付金累計額、毛布〇〇万枚等使途の詳細な報告がありました…。

「寄付文化」の伝統の相違とは思いますが、ルネッサンス基金も是非、アメリカ赤十字社に匹敵する詳細

な決算報告と共に、支援を受けた学生や研究者の声を聞かせて頂ければ幸いです。

さいごに

10年間に亘って、多忙な本務の傍ら、母校の創立150周年記念事業を企画、執行された歴代の医学部長はじめ関係者の皆様に、卒業生の1人として、心から厚く御礼申し上げます。また、500頁もの大部の「岡山大学医学部百五十年記念誌」を編纂された大塚愛二座長はじめWGの皆様には心より労いと謝意を表します。裏表紙に添付されたDVDには、慶応3（1867）年「医学館存意書」はじめ「明治18年からの歴代教授一覧」「フォトライブラリー」「ものがたり岡大医学部百年」など、記念誌に掲載出来なかった膨大な、貴重な歴史的資料がふんだんに盛り込まれており、私の宝物に致します。

ありがとうございました。

（謝辞：本稿を的確に推敲して頂いた級友の池田重政君・石津日出雄君・奥田博之君・小林完治君に感謝致します）

鶴翔会・鶴翔会報・医学部へ 再度のお願い

昭40 坪井修平

1996年、級友の池田重政君が、鶴翔会報第80号（1996）へ「St. Louisから母校を想う」を投稿して以来、鶴翔会会長（医学部長）、編集幹事の面談も含めて鶴翔会報編集委員会・鶴翔会・医学部に、賛同した私と合わせて十数回提言させて頂きました。右肩下がりの鶴翔会費納入率の反転と、母校の益々の発展を期待したからです。

私達の提言に対して丁重なご回答を戴き、実現して頂いたケースもある反面、黙殺されたこともありました。以下、これまでの経緯を総括し、未解決の提言については、速やかにご回答をお願い致します。

1. 編集委員会

1) 会報128号（2020）「提言－鶴翔会報をより良くするために」：編集委員…会報をより同窓会員のためにする第一歩は、編集委員に会合に参加できる学外委員を加える必要があると思います。学外委員の日時調整、交通費等については、E-mailやLINE、Skypeを使えば問題ないと思います。➡「学外1

- 名と学生2名を加えました」と回答がありました。
 ⇨更なる学外委員の増員をお願いします。
- 2) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 目次の変更…現教官陣の消息や寄稿文が第1頁から掲載されており、会員中心の記事に改めて頂ければ幸いです。新任・退任のご挨拶、教室だより、学生の声は「医学部だより」に一括し、後半部に簡略化して掲載し、同窓会報に相応しく、会員だより、会員の声をもっと優先されては如何でしょうか? ⇨「他校の会誌も教官人事が冒頭にあります」と回答を頂きました。⇨これは、役人の「前例主義」「事なかれ主義」と同じで、先陣を切る「抜本的改革」は不可能ではないでしょうか?
- 3) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 教室だより…1986年31教室だより66頁中11頁、17%、2016年83教室、106頁中32頁30%となっており、学外会員には馴染の薄い教室が過半数を占め、歴史や教室員数、業績等によって文字数や報告回数に強弱をつけるべきではないでしょうか? ⇨「フォントを下げてページ数を圧縮しました」との由。⇨姑息的な手段と思います。小文字化しても、第131号(2021年10月)では、80教室、77頁中26頁34%と、寧ろ占拠率が高くなっており、元のフォントに戻せば、過半数を占めるでしょう。また、(私は老眼鏡を必要としませんが)老眼の会員には読み辛く、スルーされてしまうのでは、と心配です。
 後述の10)のような会員アンケート調査を行って「教室だより小文字化」の是非をご判断下さい。
- 4) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 査読…とくに海外だよりの査読は、会報のレベルアップに必須だと思います。⇨「投稿者に失礼と思われるので…」と却下されました。⇨しかし、勘違い、記憶違い、学問的な間違い、論理的な間違い、針小棒大・群盲象を評す・木を見て森を見ず(とくに海外だより)等の記事がそのまま掲載されれば、編集部への責任は重く、本会報の鼎の軽重を問われるでしょう。
- 5) 会報117号(2014)「編集者への提案」: 会員の情報収集…会員の朗報、悲報等の情報収集を充実強化して、より多くの会員が喜び、悲しみを共感し、災害発生時には安否確認や有形無形の支援を行っては如何でしょうか? 各学年、各地域に1、2名のモニターを委嘱し、メールやLINE等ITで通信すれば良いと思います。⇨「貴重なご意見をありがとうございます。編集局として、医学部以外のニュースとして、かなり以前からですが、関連病院だよりを設けています。また、これはつい

- 最近ですが、学生だより、臨床研修体験コーナーを新設して、若い人々から寄稿してもらっています。今回の会報記事はこの成果と考えます。医学部の内外を問わず、いろいろの年代の人々に親しく読まれる会報にしていきたいと考えております。今後もどしどしご意見を下さい」と前向きな回答を戴きました。⇨「世界160か国の著名人に恩恵をもたらしたフルブライト奨学金によって米国留学を果たした大先輩の方々: 9 高原滋夫(1953-1955 Northwestern University)・9 橋本 清(1955-1956 Duke University)・20 稲田 潔(1954-1955 Harvard Medical School)・20 下村誠一(1950-1951 Bellevue Hospital)・22 山内逸郎(1955-1957 State University Upstate Medical Center)・23 田口 一(1956-1958 Texas Medical Center)・24 西本 詮(1953-1954 University of Pennsylvania)・26 岩原正雄(1956-1956 Beckman-Downtown Hospital)・27 徳丸 匡(1953-1957 University of Pennsylvania)・27 土光文夫(1955-1959 Columbia University)……」[「阪神・淡路大震災で全壊したマンションの1階に住んでいた41目黒文朗君(外科医)は瓦礫の間から救出されるや否や勤務先の神戸市立西市民病院に駆け付け、他のスタッフと共に殺到する負傷者にキリキリ舞いでした」]「大平・青山衛生学教室から34古市圭一君、35玉木 武君ら多数の厚労省の高官や41五島正規君、43中桐伸五君の2人の国会議員を輩出しています」[「オリンピックのマラソンで活躍した宗 茂・猛の双子の兄弟の健康管理は、旭化成産業医で運動神経抜群の38 有道 徳君に任されていました」とか、母校出身の「国内外の新任大学教授・研究所長等一覧表」「各県市郡新任医師会長一覧表」「新任院長・新規開業医一覧表」「官界幹部・政界議員一覧表」といった記事は、多くの会員が興味を抱くと思います(敬称は君付けで統一)。
- 6) 会報120号(2016)「鶴翔会、鶴翔会報への提言」: 巻頭言…鶴翔会報の巻頭言は、学外の会員、例えば他大学、研究機関、海外、市中病院、医師会、病院、医院、産業界、官界、各教室同門会、クラス委員等の会員にも依頼しては如何でしょうか? ⇨「鶴翔会報編集委員会が開催され、可能なものから逐次改善する方向で合意しました」と嬉しい回答を戴きました。⇨今なお、学外会員の巻頭言は掲載されていません。
- 7) 会報120号(2016)「鶴翔会、鶴翔会報への提言」: 一般教官の声…役員以外の教授等教官の皆様の現況報告等を掲載しては如何でしょうか?“医学生のかえ”だけでなく、例えば、毎号1名ずつ基礎、臨床

の先生より最近の母校の医学教育についての記事をお願いしたいと思います。「名誉教授の今…」や「クラスノート」も読者の興味を惹くと思います。

8) 会報117号(2014)「編集者への提案」: 会報のペーパーレス化…印刷代や郵送費も不要になる電子版会報にされては如何でしょう。2019年10月号に決算書が掲載され、会報経費は500万円、支出の20%になっています。しかし、その後の決算書は発表されていません。何故でしょうか。重要な監査役も見当たりません。

9) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 全会員に会報送付…会費未納の理由のみで、母校や同窓生の動向の分かる同窓会報の送付を中止するのは、如何なものでしょうか。会報をペーパーレス化すれば経費もかからず、ペーパー会報は、希望する会費納入会員にのみ送付すれば良いと思います。

10) 会報124号(2018)「編集者への手紙-鶴翔会報、会費について」: 会費納入率…1986年63%、2022年45%と右肩下がりです。未納の原因を調査しては如何でしょうか?

① 1) ~ 9)

② 会誌の通読率・精読率・積読率・無読廃棄率及びそれぞれの理由

③ 掲載記事の評価

※①②③について全会員またはモニター会員に、ITによるアンケート調査を行えば、会員は会報に愛着を感じ、ひいては会員数や会費納料率アップにつながると思います。

2. 鶴翔会

1) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 会長…鶴翔会会長は岡山大学医学部長又は医学科長、副会長3名の中2名は大学病院長・医学系研究科長又副科長、他の1名は幹事同様、評議員の互選、総会の議決、会長委嘱による、とありますが、鶴翔会の大多数を占める学外会員の意思が反映し難いのではないのでしょうか?

2) 会報88号(2000)「編集者への提案」: 会費…本会に功績顕著なもの及び本学教授であった者(要役員会の同意)は、鶴翔会名誉会員となり、77歳超会員(要申し出)と共に会費免除となっておりますが、会費に関しては経済的理由のある者を除き、同窓会員全員平等であるべきではないのでしょうか?

3. 医学部

1) 会報120号(2016)「鶴翔会、鶴翔会報への提言」

…岡山医学会、岡山大学医師会の規約を読むと、鶴翔会と混然一体になっている感あり、事務経費の負担割合等はどのようになっているのでしょうか?

2) 会報124号(2018)「母校の医学教育-リノベーションへの期待」…ルネッサンス基金の一部を給付型奨学金にしては如何でしょうか?

3) 会報124号(2018)「母校の医学教育-リノベーションへの期待」…1,2年生時に、哲学、歴史、文学、自然科学等一般教養の学習時間を増やし、3~4年生時の薬理学、生理学、生化学等基礎医学を重視し、卒業試験にも加えるべきではないのでしょうか?

人を相手にする臨床医は、一般教養のみならず、政治、経済、社会の動きに関心を抱き、“Hi-Tech, Lo-Think”の医師になってはいけません。患者と医師の良好な関係は医療訴訟を防ぐことにもなります。

基礎医学の知識、理解度は、専門分野を極めた医師の質の良さに繋がります。

4) 会報124号(2018)「母校の医学教育-リノベーションへの期待」…卒前卒後教育の充実強化: ベッドサイド臨床教育の重視、バックグラウンドをもつ指導医の配置

5) 会報124号(2018)「母校の医学教育-リノベーションへの期待」…岡山医学会の会員は岡山大学医・歯学部研究者並びに岡山県医師会員、本会の目的に賛同する医師・医学研究者とある一方で、岡山医学会賞研究奨励賞は岡山大学医学部において研究がなされたもの、とあり、矛盾しないのでしょうか?

6) 会報127号(2019)「日本医学会総会(名古屋)に出席して」…岡山大学医学部出身者の講演者/座長

2019年名古屋…5人 ← 1979年東京…15人

全分野の医師達が参加する4年に1度開催される日本医学会総会で講演者や座長に選ばれることは、ある程度母校の評価に繋がると思われます。

余談: これまでに医学部や鶴翔会報、岡山医学振興会へ、他の会員からの「提言」がありましたので、ご参考までに紹介致します。

(1) 会報94号(2003)阿部康二神経内科教授「岡山大学関連病院問題全般に関する私見と提言」

- 政治的/経済的/地理的背景: 岡山市と倉敷市の合併
- 関連病院: 維持に汲々のため、臨床卒後教育、研究活動、研究者育成が疎かになっている。
- 大学入試難易度、研究業績、科学研究費: 神戸大 > 広島大 > 岡山大
- 論文引用回数: 74位/75大学

※提言 ©岡山市の規模拡大、魅力アップ

- ◎質の高いリーダーを集める
- ◎質の高い人材育成／関連病院へ派遣
- ◎関連病院・他大学の情報収集
- ◎政治活動の活性化（政治は血を流さない戦争である）
- ◎医学部長／大学病院長の政治力アップ
- ◎診療科ごとのエゴを許さない
- ◎大学院教育の充実

➡ 会報95号（2003）岡田 茂医学部長：巻頭言として2頁に亘る、懇切丁寧なご回答がありました。

同P55、昭8 榊原 渉先生：「…素晴らしいご提言に感銘致しました…」

同P55、昭36 藤本典男先生：「…記事はショッキングなものであった」と述べられ、ヘリコプター・ピロリの発見者の至言「…組織は慣性を持ち始め、これが排他的に働くようになる…」を紹介され、「各教室のインパクトファクターや優秀論文を掲載してほしい、情報の公開がなければ、賞賛も批判の気持ちも生じない」と提言されました。

⇨ とても貴重なご意見だと思います。これらのご意見が実現していれば、その後の我々の提言は無かったです。

現在20年経過していますので、その間の対応を教えてください。因みに、インパクトファクター75大学中74位という衝撃的な指摘は、その後三段跳びで浮上しているようです。「大学別医学系高インパクトファクター論文数ランキング2022.7.29」では、東大1,518を筆頭に、京大、阪大、慶大、名大と続き、10位広大700、14位神大531、15位岡大515、以下筑波、熊本、慈恵、金沢、長崎、京府…と82校中15位と随分盛り返しています。尤も、この種の統計は、情報源が千差万別のため、慎重な判断を要します。

関連病院いわゆるSitzは大学医局員の就職口であり、卒業生の入局時の判断材料の1つにもなっており、他方病院側にとっては重要な医師供給源であり、大学、病院双方が持ちつ持たれつ関係にあると思います。母校は中四国で唯一の旧医科大学であったため、他の九州、関西、東北等の旧医科大学に比してSitzに大変恵まれ、我が世の春を謳歌し過ぎて、ハングリー精神、団結力、打って出る気概に乏しくなったのではないかと思います。ひいては級友や私もお世話になった徳島県立病院や広島市民病院、舟入病院、雲南共存病院、平田市立病院（現出雲総合医療センター）は他大学の関連病院になり、残念無念です。

神戸市立西市民病院（旧長田市民病院）も戦前の創立以来、諸先輩が支えてこられました。1995年阪神・淡路大震災で全壊しました。その再建の過程で、京都大は前総長が神戸市立中央市民病院長、神戸大は複数のトップクラスが神戸市に日参されていました。母校は時の大学病院長が孤軍奮闘しながら、肝心の人事権を握る各科のトップの多くは電話で打診されるのみでした。神戸大の交渉役には、医学部長、大学

病院長のほか渉外担当の教授も加わっておられました。

神戸市立の3病院の中、阪神・淡路大震災で最も活躍されたのは、西市民病院の故塩見文俊院長（二内、29卒）はじめ目黒文朗外科部長（二外、41）、郡山健治内科部長（二内、45）ら母校から派遣されていた各科の医師達でした。被害の少なかった1000床の中央市民病院はポートアイランド橋が崩落して、医師達は島内の救護活動のみに限定され、500床の西神戸医療センターは激震地区外の西区にあり、後背病院の役割を担っていました。他方、激震地区の西市民病院のスタッフは全壊の憂き目に遭いながら、厳寒の暗闇の中、入院患者を市外の病院に転送し、殺到するDeath on Arrival DOAはじめ裂創、挫滅創、熱傷、骨折等のトリアージと応急処置に忙殺されていました（阪神・淡路大震災から10年－神戸市立西市民病院の再建を中心に、鶴翔会報98：61～63, 2005）。しかし、諸般の事情により、173億円を投じて再建された350床の西市民病院は神戸大、京都大の関連病院となったため、諸先生は涙を吞んで退職せざるを得ませんでした。

今後共Sitzは就職先や医師確保の問題のみならず、協同研究の点でも重要性を増しているのではないかと考えています。

〈2〉会報98号（2005）松尾俊彦「同窓会を活用しよう！」

- 医学部長が同窓会長になるのは、同窓会としての活力を失わせる方向に働いているように感じられます。
- 個々の同窓生では力は弱くとも、同窓会として団結して行動すれば、医学部、大学役員会を動かすことができるのではないのでしょうか。

〈3〉会報98号（2005）医学部6年生 中務秀一「研修医マッチングシステムの渦中で」、奥田雅人「岡大 as No.1」

- 岡山大学附属病院に研修医として残る人数は全国最低
- ポリクリで“ポリクリの学生のことなど知るか”
- カルテについてドコの科でも共通して耳にしたのは“こんなことが医者の仕事か”
- 病院からの給料の額について“給料として受け取ると腹がたつので、寸志として受け取っている”

➡ ノーコメント。

⇨ 17年後の現在、マッチング率も、学生たちの評価も異なると思いますが、母校の将来を背負う学生たちの率直な意見に耳を傾け、誠実な回答をして頂きたいものです。因みに、2021年度大学病院本院 医師臨床研修マッチングランキングの岡山大学病院は、定員42名、マッチ者39名、定員充足率93%と、81病院中28位と健闘しています。100%は東大105/105、京大76/76…ほか。ライバルの神大58/70・83%、34位、広大35/56・63%、51位、徳大12/27・44%、63位、熊大6/43・14%、80位。

〈4〉会報98号（2005）「岡山医学振興会について」：四〇会より貴会を支援させて頂くに当たり、会員から要望事項がありますので、ご回答、宜しくお願い致します。

総花式でなく、

- ①経済的に困っている優秀な岡大医学部生の支援
- ②世界的な研究成果が期待できる岡大医学部若手研究者の支援
- ③全学生／教官を対象にした特別講演会に著名な学外研究者を毎年招聘
- ④医学部各学年成績最優良者の表彰・副賞贈呈
- ⑤学生による授業評価→トップの教官の表彰・副賞贈呈

に限定して頂ければ、会員のより一層の理解と支援が得られるのではないかと、思いつつ、母校の更なるご発展を心から願っています。

➡「貴重なご意見をいただきありがとうございます。ご指摘いただいたことで、当財団で実施可能で効果の期待できるものはやってみようと思います。今後ともよろしくご助言をお願いします」と、難波正義常務理事から丁寧なご回答を戴きました。その後詳細な決算報告と共に、贈呈された研究者の一覧表が公表されました。

さいごに

上記の提言のみならず、原稿の受付や鶴翔会事務局と編集委員会の関係、訃報の連絡等に関して、診療面では紹介状患者さんのガン告知や電話紹介の失神患者さんの診察に関して、メールや速達で問い合わせしても無回答のケースがあり、大変残念に思っています。

今後は、提言や問い合わせに対して、応諾の際は具体策とその実施の時期を、受け入れ難い場合はその理由を明らかにして頂ければ幸いです。

余談ですが、かつて、恩師の第一内科教授・学長に挨拶状やお見舞い状を差し上げると、必ず数日以内に丁寧な自筆の礼状を頂き、恐縮するばかりでした。最近では、現学長と前学長に或る件で問い合わせの手紙をお送りしたところ、ご多忙な中即座に返信して頂き、敬服しております。

この度の再度のお願いは、「岡山大学を正常化する会」からみれば、誠に微小な問題かもしれませんが、相通じるところがあり、関係各位の自浄努力により、母校が一刻も早く、鶴翔会も含めてすべての面で「正常化」「民主化」されることを切望しています。

面談のためにアメリカから一時帰国した池田君が、前夜突然アポイントメントをキャンセルされたこともあります。超多忙な中、歴代鶴翔会会長、鶴翔会報編集幹事、事務局長の皆様には、何度も貴重な時間を割いて頂き、改めて心より厚く御礼申し上げます。

何事にも、資金が必要です。鶴翔会も会費に頼るだ

けでなく、会員や企業から寄付が集まり、香典の寄付先や遺産の遺贈先に指名されますように、心よりお祈り致しております。

以上、不躰なことばかり申し上げ、また、過去の記事の見落としや勘違い、記憶間違いがあるかもしれませんが、母校の発展を願う余りの「再度の提言」ですので、ご寛容頂ければ幸いです。

（畏友 池田重政君は、本学卒業後5年目に渡米し、セントルイス大学の麻酔科教授を退官後、アフリカの発展途上国やネパール、日本等各国の医学教育、卒後教育に情熱を燃やし、その様々な体験を通じて、「母校への提言」が生まれました。比類なき愛校心を抱きながら、最近“いくら提言しても反応がなく、壁に向かって吠えているにすぎなくなった。疲れた！今後提言は止める！”と嘆き、その心を付度した私が自らの経験談も交えて寄稿した次第です。従って、すべての文責は私にあります。）

〈本稿にご賛同の方はご連絡ください。〉

連絡先：stubi-16@docomo.ne.jp

会員の近況

「法医は死者の代理人 一期一会の対話と 法医学者という仕事」を読んで

昭40 坪井修平

本学名誉教授、前法医学教授、畏友石津日出雄君（級友であり、…先生は水臭いので君付けとしま）の著書で2007年にふくろう出版社から刊行された「死者の声に耳を澄まして－ある法医学者の回想」が、この度加筆修正されて電子書籍版で書名も新たに再刊されました。



岡大法医学講師1年、助教授9年、高知医大教授10年、岡大教授16年の傍ら、沖縄県警察法医学顧問を担い、岡大法文学部二部法学科で法律学を学び、その間に700体の検死、1300体の司法解剖を行った様々な体験から本書が上梓されました。

冒頭に「昔から“死人に口無し”と言われている。犯罪の犠牲者となって非業の死を遂げた人は、いくら恨みを残しながら死亡しても、もはや口を利くことはできない。しかし、私ども法医学者はこの口の利けない気の毒な犠牲者の、死体そのものが無言のうちに語る真実に耳を傾けて事件の真相を究明し、法律の正しい運用に資するために研究をし、鑑定をしている」鑑定結果を誤れば冤罪を作るおそれさえある。誠に責任の重い仕事であると言わざるを得ない」とあり、法医学の社会貢献度が極めて高いことを痛感しました。第25回日本医学会総会1999東京での「DNA鑑定」と題する指定講演の招聘や、三木記念賞、結城賞、三越若手医学賞、岡山県文化賞、日本犯罪学会賞、法務大臣・岡山/高知/沖縄県警本部長から感謝状、警察庁長官から警察協力章等数々の受賞がそれを物語っています。

石津君は、助教授に昇進した1971年から「Y染色体による法医学的試料からの性別判定法の開発研究」



に着手し、1975年5月カリフォルニア犯罪捜査学会、同年7月カリフォルニア州検視局長会議で「Blood Stain: Male or Female Origin?」と題する講演を行って大きな反響を呼び、マリリン・モンロー等著名人の検死を行ったことで有名なトーマス・ノグチ博士の注目を惹き、難事件の鑑定に協力を求められました。その後、この「Y染色体による血痕の性別判定法」の応用により、ニューヨークの3件等全米各地で発生した少なからぬ殺人事件の解決に寄与しています。

「頭蓋骨と首無し白骨死体」「民家火災後に発見された一家6人の焼死体」「交通事故の轢き逃げや二重轢き三重轢き」…等、推理小説顔負けのスリルがあり、私はこのkindle版も時間の経つのを忘れて読みふけりました。

石津君は、研究者特有の？の四角四面の近寄り難い堅物でなく、学生時代空手に夢中になりながら、級友の妹さんである才色兼備の女学生にひと目惚れし、純情一途に熱烈なラブレターを100通送って射止めたのが現在の奥様で、今でも四〇会の誰にも追従を許さない愛妻家ぶりを発揮され、脱帽です…。酒豪でもあり、曰く「アルコールが入れば、口が軽くなり、歌さえ歌いたくなります。女性はみんな美しくみえ、男性は頼もしくみえ、友情も厚く、心も寛大になります。アルコールは誠に結構な水薬です」と、好漢石津日出雄君の面目躍如です（写真：前列右から3人目、岡山県内在住四〇会有志による石津君退官記念慰労・三木記念賞受賞祝賀会、2006年、倉敷）。

1999年、母校 愛媛県立三島高校で「法医学への招待」と題する開校記念講演を行って故郷に錦を飾りました。地球温暖化の原因を明らかにした2021年ノーベル物理学賞受賞者の真鍋淑郎先生もこの三島高校の卒業生で石津君の大先輩です。頭脳明晰で岡大医学部空

手部の主将や地元医師会長を務め、私財を投げ打って大規模な知的障害者福祉施設を創設した級友の故武村志延君は石津君の竹馬の友でした。私は、愛媛県東部の辺境に在りながら傑出した人材を輩出している三島高校に深い畏敬の念を抱いています。

近年、孤独死が3万人／年を超え、警察からの要請に応じて、医師会の「検案」講習会がしばしば開催されています。私も最近二度も警察から変死者の検案を頼まれましたが、今後臨床医にとって法医学の重要性が益々高まると思われ、本書をお読みになれば、警察からの検案の依頼にも気軽に応えられると思います。

さいごに

「やりがいのある法医学を専攻しようとする医学生が少ないのは残念である。最近の社会情勢、時代の要請からみると、法医学は従来と比べものにならないくらい重要性が増してきている。若い医学徒が法医学に眼を向けてくれることを願って止まない」と、石津君の心からのお願いを紹介させていただきます。

* 本書の入手方法：発行所 株式会社22世紀アート
www.22art.net または、書名、著者名で検索。

◆PS: kindle版を検索中、著者が鶴翔会会員で同じ22世紀アートから昨年8月に刊行された「三豊総合病院はいかに「創造」されたのかー香川の地で患者のための医療という理想に挑んだ人々」が目にとまった。これは、2013年発行、今井正信著「三豊総合病院 今昔ものがたり」を改題して、加筆、推敲されて再登場したものである。本書は、医師不足のため閉院寸前に陥った香川県西部の辺境に在る三豊総合病院（経営母体は三豊郡豊浜町と大野原町で現在は合併した観音寺市等）が地元出身の今井正信先生（筆者、昭34卒、一内）により劇的に甦り、香川県有数の大病院になるまでの物語である。

1951年この病院は、京大の関連病院として、64床で開設されたが、1965年学園紛争が発生して医師の派遣が困難になり、閉院の危機に瀕した。1968年、京大から支援要請のあった岡大（窓口は第一内科小坂敦夫教授）も学園紛争で混乱を極めていたが、窮状を察して、地元出身の筆者ら3名の医師が派遣された。筆者は、医師不足対策として「医師の家族が住みやすい環境づくり」「地元住民が医師や家族を優遇」「医学生の実験研

修」「地元の行事やお祭りに医局員を招待」「臨床研究/学会活動の奨励」を挙げた。やがて筆者の理念「患者中心の医療」「行政と連携した保健・医療・福祉の地域包括システム」に賛同する後輩の医師達が海を渡り（1971年、私もその1人）、外科や産婦人科教室等からの医師の派遣も軌道に乗り、ベッドは各科の奪い合いになった。筆者は、医師会立病院を夢見て増床に猛反対する地区医師会と粘り強く交渉を重ね、1968年の岡大移管時一般病床170の病院は、2000年に3倍の515床の大病院に生まれ変わった。

筆者の功績は全国的に脚光を浴び、1998年、国保直診病院400、診療所900を擁する全国国保診療施設協議会会長に推され、地域包括ケアシステムを全国レベルで推進した。「正直に白状すれば“憎らしい”と思った人物が数多くいた。今になって思えば、むしろ私自身の考えが成熟しておらず、その人たちはその人たちの立場で当然のことを考えていただけである」「偏った価値観を持つ人たち、異なる世界観を持った人たちを理解、歩み寄り、その人たちの失敗を容認し、良い部分を引き出す」と、相手の立場で考え、自戒反省する“懐の深さ”が人心掌握に繋がり、崩壊寸前の病院が奇跡的に再興された。言わずもがなであるが、厚生大臣表彰、読売医療功労賞、瑞宝中綬章等幾多の荣誉に輝いている。

本書には、地域医療や公立病院のあり方を考える上で大変重要なヒントが散りばめられており、勤務医や大学、医師会、経営母体の自治体、地域住民の方々には是非目を通して頂きたい。

* 本書の入手方法：前述



支部だより

令和4年度 鶴翔会 高知県支部総会報告

愛宕病院

武田 明雄 (昭49)

令和4年度鶴翔会高知県支部総会が、7月9日(土)にザクラウンパレス新阪急高知にて、令和元年度以来3年ぶりに開催されました。特別講演講師としては中止となった令和2年度に予定していました岡山大学副学長 那須保友先生に再度お願いしました。4月の役員会で、感染状況も落ち着いており感染対策を十分に講じながらの開催を決定し、アルコール抜き意見交換会も企画しました。しかし、7月に入ってから感染が再拡大し「状況によっては中止の可能性もあり」という微妙な状況になりましたが、高橋功支部長が「ウィズコロナで開催すべし」と決定され無事(?)開催となりました。

主な総会議事としては、令和2年からの慶事として、田村精平先生(昭和47)が旭日双光章、白井隆先生(昭和47)が旭日双光章、岸本範男先生(昭和52)が日本医師会 赤ひげ功労賞、玉木俊雄先生(昭和54)が警察庁長官表彰 警察協力章、脇口宏先生(昭和46)が瑞宝中綬章、大井田二郎先生(昭和51)が旭日双光章を受賞されましたことが報告されました。また、令和2年からの弔事として、山崎和則先生(昭和51)、本森良治先生(昭和33)、高野純行先生(昭和41)、上村致信先生(昭和44)、喜多村勇先生(昭和28)、渋谷貢一先生(昭和33)の6名の先生が逝去されたことが報告され、黙祷を捧げました。

続いて講演会に移り、講演Ⅰは「高知県におけるコロナ感染の状況」で、コロナ感染のこれまでの経過、現状、今後の見通しについて高知県健康対策部部長 家保英隆先生(平成元)から報告がありました。座長の吉川清志先生(昭和51)は県感染症対策協議会会長でもあり、支部会員のお二人が医療サイド、行政の責任者として高知医療センター(病院長 小野憲昭先生(昭和60))を基幹病院に第一線で活躍されています。

講演Ⅱでは「岡山大学の現状」で鶴翔会事務局長 田口博之氏から報告がありました。創立150周年事業が終了し、「岡山大学ビジョン3.0: ありたい未来を共

に育み、共に創る研究大学」が始まっており、「医師の働き方改革」の体制整備中とのことで、大学のさらなるご発展を祈ります。

最後の特別講演は岡山大学副学長 那須保友先生による「デジタル化時代を迎えたこれからの医療の在り方」(座長 高橋功支部長(昭和41))で、岡山県吉備中央町が「吉備高原スーパーシティ構想」で、全国初となる「デジタル田園健康特区」に指定され、その取り組みについて紹介されました。全国で3箇所の指定で、医療機関として岡山大学が支援していることが評価されたとのこと。後半では、泌尿器科教室の紹介があり、故新島瑞夫元教授、故大森弘之元教授、公文裕巳前教授等懐かしい先生方の写真も紹介されました。出席者から懇親会があればさらに盛り上がりそうな質問もあり、楽しく講演終了となりました。

総会出席者は厳しい状況でしたが42名で例年とほぼ同じでした。那須先生からは「懇親会を楽しみにしていたのですが」というお言葉をいただきましたが、結局、意見交換会、記念写真撮影も中止となり、少し寂しい終わり方でした。

高知県では、総会以降コロナ第7波に本格的に突入し、7月22日には777人と“アンラッキーセブン”、26日には過去最高963人となりました。8月には高知県最大の郷土行事のよさこい祭りが予定されており、1日感染者数が1,000人を超えることが予想されます。コロナに加え、猛暑、台風、集中豪雨、火山噴火、忘れた頃にやってくる南海大地震等の自然災害と厳しい状況が続きますが、来年は「ウィズコロナ」で楽しく総会が開催できることを期待しています。

末筆となりましたが、今回の総会で支部長の交代について諮られ、永年にわたり支部の発展にご貢献のあった高橋功支部長が勇退され、武田がその後任として、今後、高知県支部の運営を任されたことをご報告いたします。



関連病院だより

日本赤十字社 多可赤十字病院

病院長
梶本和宏

この度は伝統ある岡山大学関連病院長会に入会をご承認頂きありがとうございます。

当院の歴史からご紹介します。当院は昭和20年、当時日赤兵庫県支部が当地（旧多可郡中町）に疎開していた関係と地元住民の要望もあり、柏原赤十字病院中町分院として開設され、昭和23年中町赤十字病院として独立しました。昭和50年に現在の地に移転し、平成の自治体大合併で多可郡3町が合併して多可町となったため、平成22年に多可赤十字病院と名称変更しました。中町赤十字病院時代に岡山大学第二外科ご出身の故志賀周郎先生が院長となられ、岡山大学からも医師の派遣を頂いたことがあり、当院の名前をご存じの先生もいらっしゃるかも知れません。従って、正確な経緯は存じませんが、おそらく当院は再入会になるのではと思われます。

その後臨床研修制度のあおりを受け、大学からの医師派遣が途絶え、岡山大学出身医師もいなくなりました。本年4月小生（梶本和宏：昭和59年岡山大学卒、第二内科（現血液腫瘍呼吸器アレルギー内科）所属）が、日赤兵庫県支部からの依頼もあり、病院長を拝命しましたため、今回岡山大学関連病院長会に入会させて頂いた次第です。なお小生は昨年3月まで神戸赤十字病院に在職しておりました。

当院のある多可町は、兵庫県のほぼ中央部にあり、人口19,715人（令和4年2月）、65才以上の高齢化率は37.9%（令和2年）で、全国平均の28.0%を大きく超える高齢化率であり、まさに日本の将来の縮図と言える地域です。当院は厚生労働省主導の地域包括ケアシステムに早くから取り組み、先がけて地域完結型の医療の完成を目指しています。具体的には、昭和63年に全国最初の老健施設を創設、さらに訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、在宅介護支援センター、地域リハ・ケアセンターでの通所リハビリ、はつらつ健康事業などを展開し、令和4年2月には介護医療院を開設しています。

当院は現在一般病床と地域包括病棟を合わせ96床

で、主に地域医療を主体に診療しています。急性期一般病棟で急性期や亜急性疾患治療を、地域包括ケア病棟で急性期治療後のリハビリテーションや退院支援を行い、当院介護老人保健施設および介護医療院と連携して、在宅や施設へ社会復帰して頂けるように努めています。また訪問看護や在宅療養にも取り組んでいます。さらに終末期の患者様には患者様の尊厳を守り、人生の終末期を穏やかに、有意義に過ごして頂いています。また健康診断や人間ドックなどの予防医学事業にも力を入れ、長生きはもちろん、元気で健康寿命を延ばして頂けるようお手伝いしています。

残念ながら、他の地域の病院と同様に、医師不足と変革する医療行政の中で、厳しい状況が続いています。医療制度やマンパワーの問題もあり高度な急性期治療は近隣の高度急性期病院と連携し対応しています。特に医師をはじめ職員の確保が、志賀院長時代からの永遠の課題であり、現在も難渋しているのが実情です。町内には病院は当院だけしかなく、地域の皆様の健康を守るためにも、この地になくってはならない病院として存続発展できるにはどうしたらよいか、職員一同とともに工夫努力しています。また日本赤十字社の一員として、次の時代の地域の医療を背負っていく有能な医師、看護師などの医療人を育成することも当院の重要な使命と考えています。

岡山の地からは若干離れた地域の病院ではございますが、岡山大学医学部各教室、附属病院、関連病院長会ならびに鶴翔会の皆様のご支援なくしては、病院運営が成り立たないと考えています。皆様のご支援ご鞭撻よろしくお願ひ申し上げます。また地域医療を志す医師やメディカルスタッフの方がいらっしゃいましたらご紹介頂ければ幸いに存じます。

末筆ながら、鶴翔会ならびに岡山大学関連病院長会のますますのご発展を祈念申し上げます。



児島聖康病院

病院長
山崎 泰源

この度は、岡山大学の関連病院としてご承認して頂き、誠にありがとうございました。

当院は、“地域の皆様に信頼される医療の提供を行い、健康の保持増進に努め「その人らしさ」を大切にされたケアを提供すること”を基本理念とし昭和55年に倉敷市児島下の町10丁目（沖熊地区）にて開設致しました。開院以来42年に渡り、地域の皆様の期待・要望に応えることができるよう岡山大学消化器外科学教室（旧第一外科）を中心とした先生方に支えて頂きながら、常に進化と改善を求めて病院の増築・増床や介護・療養部門の充実を図ってまいりました。しかしながら、ここ最近の医療・介護をとりまく環境の変化は凄まじく、地域における病院の役割も様変わりしてきております。倉敷市におきましても、特にこの児島地区は高齢化率が33.81%（2021/12/31）と高く、高齢者医療をより真剣に考えていかなければならないと思っております。そこで、現在の老朽化した施設では我々の考える医療・介護を患者様に100%の形でお届けすることが難しいと判断し、昨年11月より下の町1丁目（萱刈地区）にて新病院の移転新築工事を行っており、来年4月に開院予定としております。新病院では、一般病床40床（地域包括ケア病床18床）医療療養病床40

床で診療を行い、新たに脳神経外科を新設する予定となっております。新たなスローガンを“行き方をみつける。生き方をささえる。”とし、児島聖康病院が“かけはし”となって患者・家族・医療・介護・福祉・地域をつなぎ、“病と向き合い克服する場所”だけではなく、“病を受け入れ、癒し、支えること、そして気軽にまず相談できる場所”になっていきたいと考えております。最後に岡山大学関連病院の皆様方の益々のご発展とご健勝を祈念いたしますとともに、今後とも当院へのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



新病院 完成イメージ

随 想

父の殉職の碑を訪ねて

藤 田 讓

私は、岡山大学医学部を昭和11年に卒業した藤田茂の次男です。父茂は、太平洋戦争の戦時中の昭和18年1月に、戦闘機が米国の砲撃から逃れるために成層圏を飛ぶ必要があることから、軍の委託を受けた岡山大学の生理学教室（生沼教授の教室）で、圧力タンクの中で成層圏と同じ状態の低圧にして酸素濃度を高めた状態で、ヒトの生理機能の変化や低圧状態でも正常な機能を発揮させるための方策を人体実験中に、タンクが発火して死亡致しました。航空医学の殉職者です。

当時私は1歳になったばかりで、父親の顔は全く憶えておりません。確か、国が軍から頂いた戦闘帽を被り軍服姿の父の胸像が実家にあり、子供の頃からそれだけが私にとっての父親像でしたが、母からは岡山大学での出来事はよく聞かされておりました。

その父と、もう一人タンク内の人体実験中に一緒に死亡された西崎さんとの二人の記念碑が岡山大学構内にあるということで、大分昔に母と一緒に訪れたことがありましたが、それが今回、令和4年3月に、妻と娘と三人で再度構内の素晴らしい場所に設置されている記念碑を訪れることが出来ました。これには不思議なご縁の導きがあった思いで感謝しております。



娘は羽田空港のANAのVIPルームで顧客サポートの仕事をしておりましたが、平成24年6月のある日、羽田に到着した便で当時の岡山大学学長の森田学長が降りられ、娘がアテンドすることになったようです。娘も祖父が岡山大学で殉職したことや記念碑があることは、私の母や私から聞いて知っておりましたから、アテンドの道すがらそんな話題を提供してみたところ、偶然にも森田学長は医学部出身の元病院長だったこともあって、その話は講義の中で聞いたことがある、医学部では誰でも知っていることだと云われたそうです。その後、森田学長から娘宛に、当時の生理学教授の松井秀樹先生からの詳しい報告と記念碑の写真等を送って頂きました。

そうした偶然のご縁があって、この度の再度の記念碑参拝となった次第です。訪問当日は、松井教授からタンクが発火した当時の状況等を詳しく、ご丁寧にご説明頂き、又、資料館にもご案内頂きました。

私の実家（私が生まれ育ち、高校卒業迄生活していた）は、兵庫県相生市矢野町という山陽本線相生駅から海と反対側の山の方向へ、今では車で20分位、昔はバスで50分位入った農村です。母の実家も医者の家系で、医者の家から医者に嫁いできました。父は尾道で開業する計画があり準備も進んでいたようで、幸せな生活が待っている筈であった母の人生は、父の突然の死去で全く想定外のものとなりました。27歳で未亡人となり、茶道と華道の師匠をしながら馴れない農業もして、4歳違いの兄と私の二人の男の子を育て、大学まで出してくれました。

父のタンク発火の事故が起きて、おそらく当時のことですから電報が田舎の実家に届いたと思われます。急いで身支度をして出発したところで、小さな二人の子供連れです。おまけに、駅からの交通はバスしか無く、しかも1時間に1本位の便で、更に相生駅からは1時間に1便か2便の在来線で岡山駅まで来て、岡山



大学病院に辿り着くまでには優に4～5時間は掛かったことでしょう。岡山大学医学部百年史によりますと、事故が発生したのは12時頃で、父の死亡は午後6時半頃と記されております。母から聞いた話では、病院に到着出来た時、父はまだ息があったそうで、5歳の兄の手を握ったと云うことでした。父は大学のボート部だったようで、肺が丈夫だったからではないかと母は云っておりました。

事故の六日後に大講堂で大学葬が執り行われたようです。丁度生沼先生の弔辞が始まる頃から、1歳の私が泣き出して、参列者の皆さんの迷惑になるからと、母は私を抱いて講堂の外に出ていたそうで、一番聞きかかった生沼先生の弔辞を全く聞けず終いだだったと恨めしく云われた記憶は強く残っております。

実は、その生沼先生直筆の、巻紙に認められた実物の弔辞を資料館で拝見させて頂きました。私にご配慮に感激致しましたと同時に、母に代わって心の中で手を合わせました。

父の死は戦場での死ではなかったのですが、国のご配慮で戦死とされ、私の家は遺族となっております。国から褒章が伝達されたとかで、父の父親（私の祖父）

が皇居に参内したとのことです。

私も傘寿を迎えて、父の記念碑をそう何度も訪れることはないだろうと思います。松井秀樹教授、大学院医歯薬学研究科等事業部総務課の高取様、杉田様はじめ、多くの皆さんのご好意のお陰で忘れ難い訪問となり、心から感謝しております。

「歴史は歴史に継ぎ、人は人に継ぐ」と云います。父の殉職のことを今日迄も語り継がれていることや、医学部同窓会「鶴翔会」の卒業生名簿の完備や立派な活動状況を伺いますとき、改めてこの言葉の重みを感じております。

150周年を迎えられた岡山大学医学部の更なるご発展と、持続的な社会へのますますのご貢献を心よりお祈り致しております。

殉職研究者へ弔辞

太平洋戦争中の1943年1月、岡山医科大（現岡山大学医学部、岡山市北区鹿田町）で、成層圏飛行による体調異常を調べる実験中の爆発事故で殉職した研究者2人に向け、担当教授が「靈ヲ祀リテ研究ノ守護神トナサント欲ス」などと記した弔辞が、同大で見つかった。2人を2階級特進させ「学界最高ノ栄典」の大学葬で弔ったとの内容。専門家は「空軍力増強を急ぐ軍部から成果を求められる中での悲劇で、大学も軍事研究で協力を強いられた時代の一端がうかがえる」としている。（大橋洋平）



軍部委託の実験中の爆発事故で殉職した研究者2人に向けた弔辞

戦時中、軍事實験に悲劇 岡山大で発見

事故は1月20日午前、生沼曹六教授（1876～1944年）の生理学教室で起きた。同教室は当時、高度1万5千以上の成層圏での体調の変化を調べるため、気圧を成層圏と同じ5分の1に下げる鉄製低圧タンク（高さ2・5メートル、直径2メートル）を自作。この日、タンクに入ったのが同教室の西崎良虎副手（当時37）と藤田茂副手（同34）で、実験中にタンクが爆発し、ともに全身にやけどを負って亡くなった。

弔辞は、今年4月の一般公開開始に向けて同大医学資料室（同所）で学内の資料を整理していた客員研究員の木下浩室長補佐が見つけた。事故の6日後に営まれた大学葬で読み上げた生沼教授の筆とみられ、「両君ノ犠牲的態度ハ後進学徒ヲ奮起セシム」「研究ハ航空医学ノ上ニ不滅ノ燈トナリ」と激賞。大学側は2人を講師に昇進させたとし、大学葬の参列者についても「文部大臣ヲ始トシ斯学ノ権威ヲ網羅ス」などと記している。

木下室長補佐によると、当時、軍事的に重要だった軍用機での成層圏飛行は操縦士が体調異常を起こす問題があり、研究は対策を探るため軍部の委託で進められた。戦局が急迫する中、事故後も研究は中止されず、タンクに入る被験者探しに苦労しながらも翌年、その成果が医学誌に公表された。しかし戦況は刻々と悪化。米軍が成層圏を飛べる爆撃機B29で日本本土の各地を空襲する一方、日本軍は成層圏を満足に飛行できる機体を開発できないまま、終戦を迎えたという。

2人は異例の戦死扱いとなり、当時タンクがあった付近には今も殉職碑が立つ。木下室長補佐は「2人の業績をたたえ、盛大に弔うことで軍事的に重要な研究の続行を図り、戦意高揚につなげた面もあったようだ。国のため危険な人体実験で命を落とした若き研究者がいたことを多くの人に知ってほしい」と話している。



研究者2人の殉職碑を確認する木下室長補佐氏 岡山大学鹿田キャンパス

山陽新聞 令和4年8月15日掲載

文部科学省医学教育課

公益財団法人岡山医学振興会
岡山大学名誉教授

昭36 難波正義

文科省には医学教育課があります。しかし、他の学部の教育課、たとえば、法学教育課や工学教育課といった課はありません。大学には医学部の他に多くの学部があるのですが、何故でしょうか。医学系の教育は、他の学部に比べ特別なのでしょうか。

それぞれの学部には、その学部のカリキュラムがあり、医学部だけが特別といったことはありません。予算の配分も医学部だけ特別といったことはありません。ただ、医学部には附属病院がありますが、ただ、それだけで医学教育課が必要なのでしょうか。とにかく医学教育課は、文科省で特別な位置にあるようです。

不思議なことに、医学教育を体験された（医学部卒の）医学教育課長さんが居られたことはないと思います。歴代の医学教育課長さんは、キャリア官僚で、東大や京大の法学部や文系の出身者がなられています。医学教育を受けられた体験はありません。

実際に医学教育を体験されていれば、現在の日本の医学教育の改善に役立つ筈です。課長席で話を聞き、データを解析し、ときどき、医学部を視察に出掛けられるぐらいでは、教育現場や各医学部がその地域で果たしている現状（厚労省も関係がありますが）などは、詳しくは分かりませんし、改善のアイデアも出ないでしょう。

日進月歩の生命科学の知識を利用する医学部に、旧態依然とした講座体制や制度が存続し続けることは見直されるべきでしょう。

そのような改革には、医学部内の努力も必要ですが、文科省の規制の見直しや新しい目標づくりの後押しも必要です。ただ、文科省が旧態依然ではどうにもなりません。

現場を熟知された医学教育課長さんが誕生し、その課長さんの改革的発想と活躍があれば、日本の大学の医学部はさらに発展することと思います。(2022-1-19)

目医者のつづやき [Okayama Field Station, University of Michigan]

昭60 松尾俊彦

2018年6月に米ミシガン大学日本研究センターの筒井清輝所長らが来学、同年10月には槇野博史学長らがミシガン大学を訪問されたという記事（図1）をご記憶の方もおられると思いますが、ミシガン大学には1947年創設のCenter for Japanese Studies（日本研究センター）があります。1950年4月には、この研究所の現地分室としてOkayama Field Stationが占領下の岡山市内（南方のちに京山）に設置され、フィールドワークを基礎とした幅広い研究が行われています[1]。Okayama Field Stationは1955年に閉所しますが、1959年には、『Village Japan』[2, 3]という文化人類学の学術書がUniversity of Chicago Pressから出版されています。Okayama Field Stationを拠点とした当時の都窪郡加茂村大字新庄上小字新池（にいけ）村（現岡山市北区加茂）、造山古墳に寄り添う小集落に住む24世帯130人の家族構成、生活、仕事、宗教、行政との関係などについて、米国の研究者や学生が行ったフィールド調査をまとめたものです。

この本の著者として岡山に長期滞在されたのが、ミシガン大学日本研究センターで文化人類学者として日本などのフィールドワーク研究に取り組まれていた1918年米国生まれのRichard K. Beardsleyです[4]。出



図1. 2018年10月29日、ミシガン大学日本研究センターを訪問した岡山大学一行。右から槇野博史学長、筒井清輝ミシガン大学日本研究センター長、横井篤文副学長、妹尾昌治ヘルスシステム統合科学研究科長。岡山大学ホームページから引用。

版当時、『Village Japan』についての書評を拾ってみますと、「多分野の研究者が民俗学、文化人類学、経済学、政治学など様々な視点から分析した日本の農村研究の最高峰である」（科学誌Scienceの書評[2]）がある一方で、「小学校区よりも小さな集落の事細かな調査がどの程度普遍性をもつのか」（国立国会図書館デジタルコレクション[3]より）といった研究手法の限界を指摘するものもあります。

Okayama Field Station を拠点とした調査研究には、日本人研究者や学生も参画しています。ミシガン大学日本研究センターの事業に対する協力等を視野に入れた「瀬戸内海総合研究会」が1950年に設立され、新制岡山大学を中心に活動していたようです[5]。中でも当時岡山大学教育学部助教授であった谷口澄夫先生は、ビアズリー（Beardsley）先生をはじめ日本研究センターの教員と交流があったようです。

余談になりますが、当時、教育学部の学生であった母もお手伝いをしたと聞いたことがあります。さらに付け加えると、1970年代前半に、Beardsley先生が時代の変遷に関する再調査のため岡山を来訪された際、ご持参の内服薬が足りなくなる事態が生じたそうです。そのとき日本で同等薬を探すのを手伝ったのが父信彦（昭和30年卒）で、どうやら両親ともにご縁があったようです。残念ながらBeardsley先生は、心疾患のため研究継続を断念して帰国され、1978年、59歳で亡くられています。

1955年に所期の目標を達成し閉鎖されたOkayama Field Stationですが、閉鎖に際し、当時の三木行治岡山県知事（岡山医科大学 昭和4年卒）が継続を希望する手紙をミシガン大学に送られたという記録も残っています[1]。

1949年、新制 岡山大学が誕生して間もない時期に、Beardsley先生をはじめミシガン大学の諸氏と、岡山大学の教員や学生が協力して調査研究を進めた事実は、非常に意義深いのではないかと思います。奇しくも岡山大学では、2019年から4年続けて、米国で重要言語の一つに位置付けられている日本語を学ぶ拠点として、国務省の重要言語奨学金プログラム（Critical Language Scholarship Program）の学生を受け入れています。地域の記憶から消えかけている先人の思いや遺産が、現代に繋がっていると感じます。

参考文献

1. History of the Center for Japanese Studies (CJS). Okayama Field Station. <https://ii.umich.edu/cjs/history-of-cjs/okayama-field-station.html>

2. John C. Pelzel. Book Reviews. Village Japan. Richard K. Beardsley, John W. Hall, and Robert E. Ward. University of Chicago Press, Chicago, Ill., 1959. 498 pp. Illus. \$8.75. Science 1959; 130 (3382): 1104-1105. DOI: 10.1126/science.130.3382.1104.
3. 国立国会図書館デジタルコレクション. Review of: Richard K. Beardsley, John W. Hall, Robert E. Ward, Village Japan. 14[1]. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10208367?tocOpened=1>
4. Richard K. Beardsley papers: circa 1950-1975. Bentley Historical Library, University of Michigan. <https://quod.lib.umich.edu/b/bhlead/umich-bhl-8569?view=text>
5. 谷口陽子. ミシガン大学日本研究所について. 2010/7/17 共同研究会「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」於 神奈川大学日本常民文化研究所. <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/research/group8/ovubsq00000030zv-att/resume.pdf>



岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2022.2.1～2022.8.31）

掲載年月日	媒体	見出し		備考
2022/ 2/ 5	読売新聞	27	3回目接種4割が発熱 2回目接種との比較	頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 2/ 6	山陽新聞	27	県内濃厚接触で欠勤次々 医療の人手不足危機感	「崩壊」回避へ 待機期間ゼロも 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 2/ 7	山陽新聞 MEDICA	11	若年性乳がん 20、30代でも注意必要	元木崇之（平9）
		12	高度医療で地域を支える 2022 胃がん外科治療にロボット 手術を導入	西崎正彦（平5）
		13	泌尿器科外来より 夜間頻尿	橋本英明（平元）
2022/ 2/11	読売新聞	25	コロナ後遺症 支援強化を 岡大病院専門外来1年	感染しないことも大事 大塚文男（岡山大学病院副 病院長）
2022/ 2/16	山陽新聞	29	飛沫防ぐ器具開発 軽量ビ ニール製 コロナ感染者救急搬送時使 用	塚原航平（岡山大学病院救 命救急科）
		17	病院の実力 脳腫瘍 基本は手術で切除	岡山大学病院、倉敷中央、 岡山旭東
2022/ 2/18	読売新聞	25	3回目接種 変化見られず 岡山県と岡山大 副反応2 回目と比較	頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 2/21	山陽新聞 MEDICA	11	日本腎臓学会 慢性腎臓病 大規模データ ベース構築	柏原直樹（昭57）
		13	良質な医療で地域に貢献す る 脳神経外科医のひも解くめ まいの診療	大西 学（平15）
	読売新聞	29	病院の実力 脳腫瘍 頭痛続くなら検査を 脳 ドック早期発見に	中嶋裕之（昭57）
2022/ 2/24	山陽新聞	20	コロナ優先でひずみ オンラインシンポ 地域医 療の課題議論	シンポジウム 感染症と通 常医療（県医師会、県病院 協会主催） 松山正春（昭44）、大原利憲 （昭46）、難波義夫（昭48）
2022/ 3/ 6	山陽新聞	18	腎臓病にならないために 予防の一步は検尿から	治療継続が重症化防ぐ 柏原直樹（昭57） 和田 淳（腎・免疫・内分 泌代謝内科学）
2022/ 3/ 7	山陽新聞 MEDICA	11	人工関節手術 安全確実に ナビとロボット活用 位置 や角度 ずれ抑制	藤原一夫（平12院）
		12	高度医療で地域を支える 2022 多部門と連携して行う外傷 診療	吉村将秀（平21）
		13	良質な医療で地域に貢献す る 職員一人一人が「自身が COVID-19に感染している」 という想定で医療に取り組 む	小林直哉（平4院）
2021/ 3/15	山陽新聞	33	眼病予防法を開設 県医師会公開講座 白内障 の症状や予防法解説	木村修平（岡山大学病院眼 科）
2022/ 3/16	山陽新聞	25	コロナワクチン 3回目 岡山大接種開始 9月までに1.2万人予定	
2022/ 3/20	読売新聞	28	病院の実力 がんの放射線 治療 照射範囲や量 適切に	岡山大学病院、倉敷中央、 川崎医大
2022/ 3/21	山陽新聞 MEDICA	11	夜間頻尿 治療は生活習慣改善から	橋本英昭（平元）
		12	高度医療で地域を支える 2022 大動脈弁狭窄症に対する TAVI治療	山中俊明（平27院）
2022/ 3/22	山陽新聞	21	岡大病院アフターケア外来 後遺症7割長期化	倦怠感最多QOL改善へ治療 大塚文男（岡山大学病院副 病院長）
2022/ 3/27	山陽新聞	33	山陽新聞を読んで 選手触むドーピング焦点に	松山正春（昭44）
2022/ 3/30	山陽新聞	25	医学資料室 来月公開 岡山大 種痘器具など106点	豊岡伸一（岡山大学医学部 医学資料室長）
2022/ 4/ 7	山陽新聞	22	一日一題 チーム医療	久保俊英（昭59）

掲載年月日	媒体		見出し	備考
2022/ 4/ 9	山陽新聞	29	5～11歳接種 前向きに 県医師会長「第7波の入り口」	松山正春（昭44） 4/13読売新聞再掲
2022/ 4/11	読売新聞	27	ドクターカー本格運用	岡大病院 車内で治療救命率向上へ 前田嘉信（岡山大学病院長）
2022/ 4/13	読売新聞	13	血液型不適合 生体肺移植	京大病院世界初 両親から一部 伊達洋至（昭59）名誉会員
2022/ 4/14	山陽新聞	22	一日一題	岡山キワニスクラブ 久保俊英（昭59）
2022/ 4/18	山陽新聞 MEDICA	11	新型コロナ感染再拡大	高齢者施設の支援強化を 協力医療機関との連携鍵 江澤和彦（平9院）
		12	胆のう、胆管、膵臓の病気のポイントと当病院での取り組み	総胆管結石、胆のう結石 原田 亮（平14）、 杭瀬 崇（平16）
		13	地域密着病院として、在宅から急性期医療まで	胃食道静脈瘤の治療 松田忠和（昭49）
	山陽新聞	21	チームで取り組む心不全治療	カテーテル治療 丸尾 健（平8）
2022/ 4/20	読売新聞	19	病院の実力 てんかん 脳神経細胞が興奮	服薬で発作抑える／難治は手術も 岡山大学病院、倉敷中央、岡山医療センター
2022/ 4/21	山陽新聞	22	一日一題	ポカホンタス 久保俊英（昭59）
2022/ 4/23	山陽子ども新聞	C	病や体に向き合う	ゲノム医療 遠西大輔（岡山大学病院ゲノム医療センター） 乳がん治療 高橋侑子（岡山大学病院内分泌センター）
			病や体に向き合う	ゲノム医療 遠西大輔（岡山大学病院ゲノム医療センター） 乳がん治療 高橋侑子（岡山大学病院内分泌センター）
2022/ 4/24	読売新聞	23	病院の実力 てんかん 岡山編	定期的に脳波検査を 岡山大学病院、倉敷中央、岡山医療センター
2022/ 4/27	読売新聞	23	5～11歳 副反応少ない傾向	ワクチン岡山県中間報告 発熱1.9% 成人は2.7% 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 4/28	山陽新聞	20	一日一題	さにーちゃん 久保俊英（昭59）
2022/ 5/ 2	山陽新聞	22	岡山大学病院アフターケア外来	1年間に225人受診 岡山大学病院
2022/ 5/12	山陽新聞	20	一日一題	児童虐待 久保俊英（昭59）
		26	市販貝類からプラネクト	洗濯で流出か 日常生活に海洋汚染ルート 5/15 「滴一滴欄」に再掲 難波正義（名誉教授）
2022/ 5/14	山陽新聞	26	モデルナ3回目接種 岡山 大中間報告	副反応 2回目より減「症状軽かった」6割弱 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 5/16	山陽新聞 MEDICA	12	胆のう胞	胆のう、胆管、膵臓の病気のポイントと当院での取り組み 秋元 悠（平28院）
		12	がん検診受けませんか？	地域密着病院として、在宅から急性期医療まで 岩堂浩典（昭61）
2022/ 5/17	読売新聞	25	副反応 2回目より減	岡山大 モデルナ製「接種検討を」 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 5/19	山陽新聞	22	一日一題	給食を食べすぎた三平君 久保俊英（昭59）
2022/ 5/21	山陽新聞	28	県と岡山大ワクチン「交互接種」調査	ファイザー→ファイザー→ファイザー3回と比較 副反応割合高く 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 5/22	読売新聞	27	病院の実力 痔 岡山編	早期 生活習慣見直しを 森谷行利（会員）
		25	山陽新聞を読んで	「吉備を環る」もっと深掘りを 松山正春（昭44）
	山陽新聞	30	不妊治療の保険適用拡大	カップル支援 社会全体で 相談患者増 期待大きく 中塚幹也（保健学研究科）
2022/ 5/25	山陽新聞	25	十次の直筆書簡発見	孤児院運営費集め協力依頼 明治41年？ 岡山・大宮小児童福祉への熱い思い 石井十次（第三高等学校校医学部）（明22）
2022/ 5/26	山陽新聞	20	一日一題	歩く 前へ 久保俊英（昭59）
2022/ 6/ 4	山陽新聞	16	連続シンポジウム「SDGs地域課題を探る」	貝にプラ片や糸くず 難波正義（名誉教授）
2022/ 6/ 6	山陽新聞	20	小児医療推進に貢献	山内逸郎記念賞受賞 馬場健児（岡山大学病院IVRセンター）

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2022/ 6/ 6	山陽新聞 MEDICA	11	難治の食道がん克服へ	ロボット駆使 安全に手術	チーム医療で患者支援	野間和広 (岡山大学病院)
		12	膵臓がんを克服する - その1「診断」	胆のう、胆管、膵臓の病気のポイントと当院での取り組み		秋元 悠 (平28院)
			おなかが痛いと思ったら	地域密着病院として、在宅から急性期医療まで		勝部亮一 (平16)
2022/ 6/ 7	山陽新聞	25	マスク着脱 状況に応じて	「熱中症にも注意を」		頼藤貴志 (疫学・衛生学)
2022/ 6/10	山陽新聞	24	高精度で放射線照射	がん狙い撃ち副作用軽減	川崎医大病院が装置導入	勝井邦彰 (平16院)
2022/ 6/11	山陽新聞	12	見えてきたコロナ後遺症	岡山大学病院アフターコロナ外来	診療体制整備に課題	大塚文男 (岡山大学病院副病院長)
2022/ 6/12	山陽新聞	4	提言2022 コロナ禍で減るがん検診	受診把握できる仕組みを		豊岡伸一 (岡山大学医学部長)
2022/ 6/14	山陽新聞	1	選択2022参院選 地域の課題	新型コロナ対応 保健、医療の将来像は？		頼藤貴志 (疫学・衛生学)
2022/ 6/19	山陽新聞	29	地域の小児科絶やさない	岡山市北部に来月、新医院	365日診療基本	青山興司 (昭43)
2022/ 6/20	山陽新聞 MEDICA	12	膵臓がんを克服する - その2「治療」	胆のう、胆管、膵臓の病気のポイントと当院での取り組み		山野寿久 (平3)、 杭瀬 崇 (平16)
	山陽新聞	20	胎児の病気 早期発見へ	福山市民病院 超音波検査充実	岡山大病院と連携 救命率向上図る	
2022/ 7/ 4	山陽新聞 MEDICA	11	救命の連鎖 切れ目なく			前山博輝 (平19) 山中俊明 (平27院)
		12	膵臓がんを克服する - その3「薬物療法と今後の展望」	胆のう、胆管、膵臓の病気のポイントと当院での取り組み		原田 亮 (平14)
		13	市民に新時代の医療を	身体と心に優しいがん治療を目指して		橋田真輔 (平27院)
2022/ 7/ 6	山陽新聞	33	中国・天津と医療交流 協力体制話し合う	岡山市日中友好協会		土井章弘 (会員) 森田 潔 (昭49)
2022/ 7/ 7	山陽新聞	29	川崎医学・医療福祉学振興会	医学・福祉研究20件に助成		松本悠司 (平24)
2022/ 7/13	山陽新聞	28	コロナ「第7波」警戒	県内感染者 13日連続前週上回る	BA・5や免疫低下背景	頼藤貴志 (疫学・衛生学)
2022/ 7/15	山陽新聞	26	患者第一の人生 伝記に	川崎学園創設・川崎祐宣氏	孫の川崎誠治理事長が執筆	川崎祐宣 (名誉会員) 川崎誠治 (昭61)
2022/ 7/18	山陽新聞 MEDICA	11	更年期障害 心と体が揺らぐ時期	気分転換や適切な治療を		小比賀美香子 (岡山大学病院総合内科)
2022/ 7/19	山陽新聞	22	吉備を環る 牛窓往来 大師堂	十次の原点 思いを継ぐ		石井十次 (明22第三高等学校医学部)
2022/ 7/22	山陽新聞	28	コロナ感染最多1821人	子ども中心に急拡大 県きょう対策会議	換気、マスク、消毒、基本徹底を	頼藤貴志 (疫学・衛生学)
2022/ 7/24	読売新聞	31	病院の実力 岡山編 乳がん	形やしこりチェックを		枝園忠彦 (岡山大学病院乳腺・内分泌外科)
2022/ 7/27	山陽新聞	29	小児救命救急センター 岡山大学病院を指定	中国地区で初 8月1日から運用		岡山大学病院
2022/ 7/31	山陽新聞	29	コロナ感染拡大 発熱外来受診急増	一般診療への影響懸念		今城健二 (昭58)
2022/ 8/ 1	山陽新聞 MEDICA	11	心臓病センター榊原病院	ブラッドアクセスセンター開設	透析患者の心臓血管疾患最善治療を	清水明德 (会員)
		12	働き盛りの人への健康講座	当院における人工股関節置換術の取り組み		大森敏規 (令3院)
		13	市民に新時代の医療を	持続可能な救急医療を目指して		桐山英樹 (平6)
2022/ 8/ 6	山陽新聞	19	コロナ感染拡大 発熱外来受診急増	ワクチン接種拡大	岡山市保健福祉局からのお知らせ	松岡宏明 (昭60)
2022/ 8/14	山陽新聞	1	滴一滴「ヒロシマ日記」 広島通信病院長			蜂谷道彦 (昭4) 名誉会員

掲載年月日	媒体		見出し		備考
2022/ 8/14	山陽新聞	23	県内コロナ「第7波」	病床逼迫 使用率61% 感 染高止まり 人手不足	一般医療に影響も 岡山赤十字病院、 岡山医療センターほか
2022/ 8/15	読売新聞	26	大腸がんを考える		藤原俊義（消化器外科学）
	山陽新聞	1	殉職研究者へ弔辞	戦時中、軍事実験に悲劇	西崎良虎、藤田 茂（昭11）
2022/ 8/21	山陽新聞	18	紙齢5万号 メッセージ	岡山SDGsを世界へ発信	横野博史（岡山大学長）
	読売新聞	25	病院の実力	大腸がん	倉敷中央、岡山済生会、 津山中央、岡山大
2022/ 8/22	山陽新聞	21	「不育症」治療に尽力	中四国、九州唯一の認定医	岡山、福山で専門外来 中塚幹也（保健学研究科）
2022/ 8/24	山陽新聞	28	コロナ対策再度徹底を	岡山の医療負荷減へ専門家 有志 動画、チラシで訴え	頼藤貴志（疫学・衛生学）、 萩谷英大（岡山大学病院総 合内科）、藤田浩二（平19）

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡山大学病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。



夕暮れ時の三原の内海

井上 一

学会・研究会だより

第86回日本循環器学会学術集会

循環器内科学 教授
伊藤 浩

2022年3月11日から13日にかけて第86回日本循環器学会学術集会を完全WEB開催しました。参加人数が15,000人という日本でも最大規模の学会であり、岡山大学が主幹校になったのは150年の歴史で初めてです。準備に2年、運営も医局員全員で一丸となって取り組みました。1991年創立の循環器内科ですが、全国に実績とActivityを認められた証でもあります。テーマは「翼を広げる循環器病学」。動脈硬化性疾患、心不全、心臓弁膜症だけではなく、成人先天性心疾患、腫瘍循環器学、糖尿病・慢性腎臓病患者の一次予防、再生医療、遠隔医療、Big data/AIの活用など様々なテーマで活発な討論が行われました。セッションの間には岡山藩と岡山大学医学部の歴史をまとめたイメージビデオを流すことで、しっかりと岡山をアピールしました。



WEB配信室で



神戸国際展示場の配信会場



下山 敦士

教室だより

(令和4年4月～令和4年8月)

細胞組織学

新型コロナ3年目、国内感染者1500万人を超えています。本会報がお手元に届く頃には、オミクロン株対応のワクチン接種が始まっていることでしょうか。本年3月に博士学位修得した土生田宗憲君は、4月より社会福祉法人旭川荘にて勤務しています。久保田温和院生(D1)は、6月より徳島大学大学院創成科学研究科(三戸太郎教授)にて特別研究学生として「食用コオロギの味覚の研究」を開始しました。本学7月採用の池田志織技官は、医学部共同実験室と共配属です。学会活動では、5月に日本酸化ストレス学会にて藤田助教が口頭発表(破骨細胞形成とCysLTR1)、7月に日本涙道・涙液学会にて大内教授が特別講演(涙器の細胞組織学と組織再生治療)、8月に日本下垂体研究会にて佐藤助教が口頭発表(SABER-FISH法を用いたメダカ下垂体における遺伝子発現の解析)をしました。教育面では、6月にタイMahidol大学医学部生Wisunsaya Nootaveeさんが2週間滞在し、FISH法について医学研究インターンシップ実習を行いました。7月に大学院特別講義として斎藤通紀京都大学大学院医学研究科教授・ASHBi拠点長を招聘、鹿田会館(旧生化学棟)講堂にて「生殖細胞の発生機構の解明とその試験管内再構成」についてご講演いただきました。8月には高大連携活動として高松高校生19名が3年ぶりに来学、本学教職員・医学科生の指導のもと、医療教育センターにてシミュレーション教育を体験しました。(大内 記)

人体構成学

6月1日に川口綾乃教授が着任しました。川口教授は「JST創発的研究支援事業『融合の場』第一回シンポジウム(中国・四国地区)(6月9日～10日)」と、「NEURO2022(6月30日)」シンポジウム「哺乳類の脳の進化的拡大と複雑化」にて「Generation of outer radial glial cells that contribute to evolutionary expansion of the cerebral cortex」と題した発表を行いました。百田助教は「第54回日本結合組織学会学術大会(枚方市・6月25日～26日)」にて「XVIII型コラーゲン欠損マウスの肝臓で起こるとされる代謝機構の変化」と題して発表を行いました。小阪助教・入江恭平大学院生は、第31回日本がん転移学会(7/7-8、2022年 京都大学)で「Structural and functional differences of OCT4A and OCT4-PG1 in cancer cells」と題して発表しました。それからもう一件、米国癌学会4月にWeb発表しました。「Biological and clinical value of OCT4A/SPP1C axis in endometrial and lung adenocarcinoma」American Association for Cancer Research (AACR) Annual Meeting 2022)

COVID-19が引き続き猛威を振るっております。今年度の6

月のともしび会の総会もやむなく中止となりました。その一方で、夏の解剖は3年ぶりにラクイラ大学より2名の学生を迎えて実施しております。間もなく迎える新学期には解剖の講義と実習が控えています。Omicron株が世界的に猛威を振るう中、教室員一同、感染防止につとめ安全第一で解剖実習を進めて参ります。(百田 記)

脳神経機構学

教育では、4月から1年生の医学セミナー(チュートリアル)、2年生の神経構造学(神経解剖学)の講義・実習が始まりました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講義は2教室に分かれての対面で行いました。頭蓋骨および脳肉眼解剖実習は解剖実習室が十分な換気ができることから対面で行い、神経組織学実習はバーチャルスライドシステムを使い、オンラインで行いました。また、5月には徳永浩司先生(岡山市民病院脳神経外科部長)、田中朗雄先生(脳神経センター大田記念病院副院長・放射線科部長)にオンラインで特別講義を実施していただきました。6月にマヒドン大学(タイ王国)のMs. Porntida Narongdejが短期留学し、研究に取り組みました。

研究活動では、3月の第31回神経行動薬理若手研究者の集い(ハイブリッド)で宮崎育子が座長を務め、正井加織院生が「ストレプトゾトシン脳室内投与による孤発性アルツハイマー病モデルマウスの行動学的・組織学的検討」について発表し、優秀発表賞を受賞しました。3月の第95回日本薬理学会年会(ハイブリッド)、第127回日本解剖学会総会・全国学術集会(オンライン)、5月の第63回日本神経学会学術大会(東京)で宮崎が「部位特異的アストロサイト-ミクログリア連関がもたらすロテノン誘発ドパミン神経障害」について発表しました。6月の第49回日本毒性学会学術年会(札幌)で浅沼教授が「農薬ロテノン慢性皮下投与パーキンソン病モデルマウスにおける腸管細胞環境の変化」について、宮崎が「妊娠・授乳期エポキシ樹脂BADGE曝露による新生仔マウス脳発達異常におけるエストロゲン受容体βの関与」について発表しました。また、浅沼教授がHappy Face Seminar WEST JAPAN for Expert(オンライン)で「ゾニサミドの神経保護の可能性-基礎研究から」と題し、講演しました。7月の第16回パーキンソン病・運動障害疾患コンgres(MDSJ)(東京)で浅沼教授が座長を務め、宮崎が「パーキンソン病の脳腸病態を再現しうるモデル動物における腸管神経障害機構の検討」について発表しました。また、The 8th International Symposium on Metallomics(ハイブリッド)で浅沼教授が座長を務め、宮崎がアストロサイトにおける亜鉛結合蛋白メタロチオネインを標的としたドパミン神経保護について発表しました。

教室のホームページをリニューアルしました。新しいアドレスは<https://okayama-medicalneuro.com>です。研究活動の詳細、学会・論文発表およびイベントなど掲載しておりますのでご覧下さい。(宮崎 記)

細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学です。令和4年4月から令和4年8月の近況をご報告いたします。新型コロナウイルス感染症のオミクロン株BA.5は5月下旬に国内で疑い例がはじめて確認された後、たった2か月で主流となり、今や1日の新規感染者数は約20万人（岡山県1,893人）に至り、今後の更なる激増が懸念されています。7月には現在主流のBA.5の3.2倍の感染力を持つ新たな変異株BA.2.75（ケンタウロス）が確認され、こちらも懸念されます。この同窓会誌が発行される10月までに一体どうなるか、誰も見通せない状況です。そんな中、細胞生理ではふたつの慶事がありました。まず、檜山武史講師が2022年10月1日付で鳥取大学医学部生理学教授へ栄転することになりました。檜山講師は大阪大学基礎工学部を卒業後、岡崎の基礎生物学研究所で長く研究員を務めた後、2019年4月より当研究室で活躍しました。もうひとつの慶事として吉川助教も4月1日付で順天堂大学医学部免疫学教室准教授に栄転しました。藤村助教も大いに活躍中です。学生については、修士1年として、田中優樹君（岡大環境理工卒）と重平崇文君（川崎医療福祉大卒）が加わりました。修士2年の前田夢咲さんは就活中、西條雅貴君は復帰し、一方、藤田悠紀さんは吉川助教を慕って、博士2年の長尾圭君と共に、6月から順天堂大学に内地留学しています。博士大学院生は、珊瑚 徐さん（POST-ONECUS）、また臨床教室との連携で、呼吸器・乳腺内分泌外科から大谷悠介医師と朱医師、整形外科から片山晴善医師と板野拓人医師、皮膚科から浦上仁志医師が参加中で、皆よく頑張っています。大学院生を送って下さり、豊岡教授、尾崎教授、森実教授に感謝いたします。技術員白神美津穂さん、秘書小野桂子さんも、毎日いい仕事をされています。（教室スタッフ；神谷教授、檜山講師、藤村助教）（神谷 記）

システム生理学

2021年4月に日本学術振興会科学研究費・基盤Aの研究課題「新規メカニカル負荷装置の開発を通じた次世代メカノメディスンへの挑戦」が採択され、研究を開始しました。また防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。

今期は以下の学会で発表を行いました。第61回日本生体医工学会大会（6月、成瀬・高橋・森松・貝原）、The 11th International Conference on High Pressure Bioscience and Biotechnology（7月、成瀬：基調講演）、9th World Congress of Biomechanics 2022（7月、片野坂：招待講演、高橋・董：口頭発表）、ヨーロッパ心臓病学会（8月、高橋・王）。高橋は、7月の岡大ピッチコンテスト2022でNEDO賞および中国銀行賞を受賞しました。

メンバーは4月より修士課程学生に洪遵淵、6月より博士課程に高子丹、7月より研究生に頼道越を迎えました。また、研究生のRumaisa Kamranが4月より修士課程に入学しました。

（高橋 記）

生化学

3月26日、山田准教授、竹居は第6回ポドサイト研究会（千葉、千葉大学医学部、ハイブリッド開催）に参加し、山田准教授は「ポドサイトにおけるダイナミン2によるアクチン制御にはダイナミン2の適切な自己重合と膜との相互作用が必要である」の演題で、竹居は「分化ポドサイトにおけるダイナミン1の機能」と題して、口演発表しました。4月1日、Zhang Yiyi（ジャン イイ）さんが大学院（修士課程医歯科学専攻）に入学し、研究生から大学院生になりました。6月3日、竹田研究准教授、藤瀬賢志郎博士（令和3年3月修了）らの総説「Centronuclear Myopathy Caused by Defective Membrane Remodeling of Dynamin 2 and BIN1 Variants」がThe International Journal of Molecular Sciencesに掲載されました。6月29日、太田助教は情報処理学会第70回バイオ情報学研究会（沖縄、ハイブリッド開催）に参加し、「化学量論に基づく代謝経路の探索」と題するオンライン発表講演を行いました。6月28-30日、竹田研究准教授、Haymar Wint（ヘイマー ウイント）博士大学院生、竹居は第74回日本細胞生物学会大会（東京、タワーホール船堀）に参加し、Haymar Wint博士大学院生は「Pacsin 2-dependent N-cadherin turnover regulates migration behavior of invasive cancer cells」と題するポスター発表を、竹居は「ダイナミンによる微小管制御と糸球体ポドサイトの形態形成」と題する口演発表を行いました。9月1日、竹田研究准教授、山田准教授、竹居の総説「Dynamin: Molecular scissors for membrane fission」が著書Plasma Membrane Shaping（Academic Press、末次士郎・編）に発表されました。

追悼：4月13日、生化学同門の大森晋爾先生がご逝去されました。大森先生は昭和33（1958）年～45（1970）年に当分野の助手、講師として在籍された後、岡山大学薬学部教授、津山工業専門学校校長を務められました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせいたします。（竹居 記）

分子医化学

魅力ある教育研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、4月より博士課程大学院生（インプラント再生補綴学）窪木慎野介さんが共同研究のため研究に参加されています。また、Ziyi Wangさんが日本学術振興会外国人特別研究員として4月より研究に参加されています。

学会活動については、春から夏にかけて国内学会は現地開催されたものもいくつかあり、久しぶりのオンサイト参加を味わうことができました。6月には第54回日本結合組織学会学術大会（枚方）に宮崎、米澤、大野、大橋が参加しました。当分野から留学中の浅野先生も急遽帰国し参加しました。来年には大橋が第55回の学術大会を担当することになっています。岡山で開催されるのは大藤 眞先生が1980年に担当された第12回以来となり、身の引きしまる思いです。6月末には、宮崎、大橋と医学科4年次生の谷君がNeuro2022（日本神経科学会などの合

同開催)にて、ポスター発表を行いました。大野准教授は6月に骨形態計測学会(米子)のシンポジウム、7月に日本補綴歯科学会学術大会(大阪)でLunch & Learningの講演を行いました。7月10日には鹿田会館(旧生化学講堂)にて久しぶりの分子医化学同門会を実施しました。1つ嬉しい受賞の報告があります。6月の岡山医学会で当分野にPre-ART生として所属している医学科5年次生の野島弘二郎君が脳神経研究奨励賞(新見賞)を受賞しました。史上最年少受賞です。最後にお知らせがあります。12月17日(土)に、西日本医学生学術フォーラム2022を岡山大学が当番校として開催する予定で、大橋が世話教員を務めます。研究に興味のある医学科生が参加するフォーラムです。COVID-19の影響をあまり受けずに西日本の医学生が対面式で交流できることを祈念しています。

教育関係では、1学期に基礎病態演習(3年)、医学研究セミナー(1年)を担当しました。10月から分子医化学講義・実習担当がありますが、教室員一丸となって担当します。

(大橋 記)

薬理学

令和3年10月より細野祥之教授の新体制が始まり、約半年が過ぎましたが、漸くラボ内の再整備(備品移動・購入・廃棄など)が落ち着いてきました。現在の薬理学構成員は細野祥之教授、逢坂大樹助教、王登莉助教、澤田隆介助教、研究員の劉克約、花房裕子、渡辺香里、院生(博士課程)の喬寒棟、宮本理史、中本翔伍、吉川真生、佐藤まどか、事務職員の藤田さやか、岡内邦江の14名です。7月に着任した澤田助教は、バイオ・ケモインフォマティクスが専門であり、情報技術を活用した次世代型創薬研究推進に向けて大きな役割を担います。

【教育】4~7月は新体制で初めて臨む学部・大学院の講義でした。コロナ制限が緩和されたことから概ね対面講義としましたが、一部、外部講師や通学困難者に対してオンライン併用という柔軟な対応が可能になりました。またこの場をお借りして、学内講師をご快諾頂いた先生方(脳神経機構学の浅沼先生、薬剤部の座間味先生、腫瘍微小環境学の富樫先生、研究推進室の中山先生、循環器内科の中村先生、血液内科の西森先生)に心より感謝いたします。

【研究】4月からの新規研究として、細野教授の基盤B(2022~2024年度)、およびAMED・ゲノム創薬基盤推進研究事業(2022~2024年度)、逢坂助教の基盤C(2022~2024年度)が採択されました。また、国内外のアカデミアや研究所との共同研究を開始・継続するだけでなく、2件の共同研究契約を企業と締結することができました。さらに、ラボ内には博士課程の学生だけでなく、学部生(医学部、薬学部)、他教室の共同研究者・学生も多く出入りするようになり、新体制としての研究環境が整いつつあります。がん、ゼブラフィッシュ、インフォマティクスの3つをキーワードに、今後も新しく開けた創薬研究を行っていければと考えています。

(逢坂 記)

病理学(免疫病理)

教育面では今年度から病理学の講義・実習も3年ぶりのオンラインサイトとなり、録画等これまでのオンライン講義で得られたデジタル化のメリットも取り入れ、行うことができました。また、4月の日本病理学会総会(神戸)では計8演題の発表を行い、こちらも久しぶりに現地で学会場の雰囲気を楽しむことができました。

人事面では藤井裕貴が後期研修医となり、病理専門医プログラムを開始しました。また、夏頤筠さんが研究生として来日され、博士課程入学に向け、研究生活をスタートされました。

研究面では病理組織切片を用いた解析から、細胞内シグナル解析、腫瘍免疫、AI研究まで幅広く、各教員を中心に取り組んでいます。同門会は本年度もオンラインでの開催となりましたが、次回こそは現地で開催したいと考えています。同門の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

(大原 記)

病理学(腫瘍病理)

令和3年度末を持って吉野が退官を迎え、3月25日に最終講義をハイブリッド形式で行いました。学内外から多数の方々に参加して頂き、この場を借りて感謝申し上げます。教室として一つの区切りを迎えましたが、吉野には引き続き特命教授として研究、教育の両面でご尽力頂いております。4月14日から16日に日本病理学会が、6月23日から25日にリンパ網内系学会が開催されましたが、教室からも多数の発表をすることができました。また、7月8日は名古屋大学の加留部教授を特別講義にお招きすることができました。残念ながらコロナ禍収束の見通しがたらず、退官記念を兼ねた同門会を中止せざるをえない状況でございました。

教室の人事に関しては河原邦光が神戸大学病理診断科の特命教授に就任いたしました。岡山医療センターの永喜多が家庭の事情で帰郷し、田端(磯田)が岡山医療センターに赴任しました。岡山赤十字病院の池田が病理部の特任助教となり、入れ替わりで都地が赤十字病院に赴任しました。また、堀川礼奈が岡山済生会病院で後期研修を開始いたしました。学内ではコロナの影響で入国が遅れていました中国人留学生の彭芳麗が大学院生として研究を開始いたしました。

新教授の赴任までまだ少し時間がかかりそうですし、赴任後の教室運営には教室員、教室関係者並びに同門の先生方のお力がどうしても必要になります。今後ともご指導・ご鞭撻とともにご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(田中 記)

病原細菌学

教育面では、今年度より医学科3年生の基礎病態演習が4月に配当されたため、当分野の担当する授業が4月~6月に集中してありました。4月の医学科3年生の基礎病態演習に始まり、4月~5月は1年生の医学セミナー(テュートリアル)、4月下旬~5月は3年生の細菌学講義、実習を実施しました。春休

みやゴールデンウィークで新型コロナウイルスの感染拡大が危惧されましたが、文部科学省や岡山大学の方針に従って、感染防止対策を講じた上で対面授業を目指しました。基礎病態演習と医学セミナーでは途中オンラインに切り替えざるを得ない場面もありましたが、細菌学講義、実習については、補講をすることもなく無事に対面で実施することができて安堵しました。医学科以外の授業としては、病原ウイルス学分野とともに教養教育科目「感染症と戦う」を、松下教授は大学院のオムニバス授業「医歯科学概論」と「社会医歯科学」を担当しました。これらの授業を終えて一息ついたのも束の間、10月より始まるMRIで学外に派遣される3年生の学生3名（海外2名、国内1名）が派遣先で使用するタンパク質の精製のためにすでに研究室に来ており、松下教授が熱心にその指導にあたっています。MRIの学外派遣は、当分野からは3年ぶりとなります。この教室だよりを執筆している7月末に日本での新規感染者数が世界最多になったとの心配なニュースが飛び込んできましたが、今年こそは派遣できることを願っています。

研究面では、内山准教授の「ピロリ菌を除菌可能な食べれる人工抗菌酵素剤の研究開発」が三島海運記念財団2022年度自然科学部門の研究助成を受けました。また、「緑膿菌感染症に対する人工抗菌酵素の研究開発」がAMED令和4年度橋渡し研究プログラム（シーズA）に採択されました。

管理運営面では、松下教授は2年間にわたって医歯薬学総合研究科博士課程の学位プログラム化に尽力してきました。先日「医歯薬学専攻」が文部科学省から認可されて、令和5年度学生募集も始まり、一区切りがついたようです。

人事面では、4月より修士課程1年の辻秀真さんとバングラデシュからの客員研究員アサド（Asaduzzaman）さんがメンバーに加わりました。（山本 記）

病原ウイルス学

4月より修士課程1年に佐々木、廣田、前川が加わりました。学部生の希望者数名も実験を始めました。5月からウイルス学講義が始まり、大講義室や講義室を併用しながら対面で実施しました。本年度の特別講義は「C型肝炎ウイルス」加藤宣之名誉教授、「ネオウイルス学」本学資源植物科学研究所（倉敷）鈴木信弘教授でした。前任の山田雅夫名誉教授、山下信子非常勤講師も講義を担当しました。新型コロナウイルスの感染状況に合わせて、3年ぶりに対面でウイルス学実習を実施しました。4月の医学セミナーは難波が担当し、対面形式で実施しました。7月からは病原細菌学とともに教養教育科目「感染症と戦う」を担当し、オンライン形式で実施しました。6月30日の第35回ヘルペスウイルス研究会（オンライン開催）で李院長が発表いたしました。（難波 記）

疫学・衛生学

2022年は、教室ができてから100年（初代緒方先生が着任されてからは97年）という節目の年です。これまで支えていただいた皆様に心より御礼申し上げます。

3月に博士1名、修士5名が卒業し、それぞれの分野で活躍しています。4月には1名が博士課程に、2名がMPH（公衆衛生学修士）コースに入学し勉学に励んでいます。

2021年10月から同門の岩瀬先生が備前保健所長に、2022年4月から同じく同門の光井先生が美作保健所長に就任し、県型の保健所も陣容が厚くなりました。また、当教室が事務局をしている岡山県クラスター対策班（OCIT：Okayama COVID-19 cluster Intervention Team）も活動を継続しております。OCITは、医療機関や福祉施設において集団発生した場合などに、速やかに感染拡大防止対策を講じられるよう編成されたチームです。ご協力いただいている学内外の皆様へ深く御礼申し上げます。この度、これらの活動を通じて実施した調査や分析などの研究情報をいち早く社会の皆様にお届けするため、「岡山大学疫学・衛生学分野ニュース（新型コロナ情報）」というニュースレターを発行することになりました。5月24日には「小児新型コロナウイルスワクチン接種後副反応調査中間報告について」（Vol. 1）、7月6日には「小児新型コロナウイルスワクチン接種後副反応調査最終報告について」（Vol. 2）を発行し、講座HPで公開しております。

7月と9月には、高尾准教授が産業医基礎集中研修会を津島キャンパスにおいて開催します。毎回、定員を超える申し込みをいただく基礎研修会ですが、岡山大学医師会枠を若干名設けておりますので、ご活用ください。

講座HPには、「岡山県内の感染状況・医療提供体制の分析」なども掲載しております。今後ともご支援いただきますようお願いいたします。（鈴木 記）

公衆衛生学

令和4年度4月～8月の教育活動としては、医学科1年次生を対象とした医学セミナー、教養教育の社会医学入門の講義を行いました。COVID-19流行下における実施であったため、一部を除きオンライン講義となりました。また、2年次生（学士編入生）を対象とした早期医学体験実習を行いました。

令和3年度4月～8月の研究活動としては、神田教授が5月の第95回日本産業衛生学会において、久松准教授が7月の第54回日本動脈硬化学会総会・学術集会において、また絹田助教が6月の第76回日本栄養・食糧学会大会において、それぞれ学会発表しました。

令和3年度4月～8月の社会活動としては、神田教授がKSB瀬戸内海放送（5月28日放送）「検証ゲーム条例2、eスポーツ部の挑戦」のコーナーで高校eスポーツ部チームドクターとして出演、eスポーツ部員の健康管理について解説し、また久松准教授が6月の第58回日本循環器病予防学会学術集会において心不全講習会の講師を務めました。

現在行われている研究としては、神田教授が研究代表を務める「高校生eスポーツアスリートにおける心身の健康実態の解明」（基盤研究C）、「地域住民における測定値自動送信技術を用いた家庭血圧管理状況と血圧変動要因に関する探索的研究」（オムロンヘルスケア株式会社との共同研究）、「地域住民における飲酒状況と家庭血圧の両変動およびその関連要因に関する

研究」(お酒の科学財団公衆衛生学領域助成)、久松准教授が研究代表を務める「家庭血圧の長期縦断研究からみた血圧変動の共振現象及び無症候性脳血管障害との関連」(基盤研究C)、福田助教が研究代表を務める「壮年期を対象とした伴走型血圧管理支援事業の役割と評価:社会的処方観点から」(基盤研究C)などがあります。

令和4年4月から、博士課程に1名、修士課程に1名、それぞれ大学院生が入学し、博士課程計5名、修士課程計2名となり、ますます活発な研究教育活動を続けています。(久松 記)

免疫学

研究面では7月20～22日に開催された、第26回日本がん免疫学会総会(鳥根)で西田、工藤、Chaoが口頭発表を行いました。また、大学院生徳増のEP4阻害剤に関する論文がInternational Immunologyに(2月)、鶴殿教授のメトホルミンに関する総説がBiochimica et Biophysica Acta (BBA)-General Subjectsに(5月)、大学院生Chaoのメトホルミンに関する論文がFrontiers in Immunologyに(7月)アクセプトされました。徳増の論文はEditor's Choice及びMost Readに選出されています。

人事面では、大学院博士課程に今野なつみさんが入学しました。さらに特別聴講生としてAdam Fakirさん(3～7月)とBari Garnier Martinさん(6～8月)の二人の留学生が加わりました。二人ともCOVID-19の混乱が残る中の来日で、半年にも満たない滞在期間ではありましたが、ミーティングや抄読会にも加わって研究室の国際色を盛り上げてくれました。

教育面では、医学科3年生の寄生虫学を5月に開講しました。3人の外部講師の先生方に来ていただき、2年ぶりの対面授業を行っていただきました。講師も学生も久しぶりの対面授業で、オンラインとは違う刺激を受け授業の活気があったのではないのでしょうか。10月以降は医学科3年生のMRIと2年生の免疫学講義がありますが、COVID-19が再び拡大しつつあるので、まだまだ気が抜けない状況が続くそうです。(工藤 記)

法医学

実務面では、今年の剖検数は7月末現在で92体となり、昨年と同じ程度となっております。ここ数年の年間解剖数の傾向は変わらず、今年の通年の総解剖数は昨年並みの160体前後になるものと予想されます。

人事面では、4月に竹居セラ大学院生が香川大学医学部法医学の助教として着任しました。教室内では、第六管区海上保安部の研修生(医学部研究生)の近藤卓さんの研修期間が3月末で満了しました。また今年で4年目となっている検視官受入(検視官や検視官補になるために警察大学校が行う講習の一環、法医学教室での法医解剖や解剖関連検査等の実地研修)は、5月9日からの約2週間、5名を受け入れました。

学術面では、4月に神戸で開催された第111回日本法病理学会総会において谷口助教が「嘔吐下痢症の急性急激な転帰をとった乳児突然死の一例～Waterhouse-Friderichsen症候群

とすべきか～」の発表を行いました。6月に名古屋で開催された第106次日本法医学会学術全国集会では、竹居大学院生が「An experimental study on postmortem direct exudation of myoglobin through vessel wall」、山崎助教が「法医解剖死体におけるB型肝炎ウイルス感染の現況」を現地で行いました。

教育面では、今年の1月から8月にかけて、選択制臨床実習で6年生延べ14名が法医解剖、解剖事例検討等を行いました。

末筆になりましたが、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。(山崎 記)

分子腫瘍学

人事面では、堺明子助教と保田雪子客員研究員が令和4年3月31日付けで退職いたしました。現在の講座運営は、大内田守准教授、伊藤佐智夫助教、實盛好美技術補佐員、藤元佳与技術員が中心となり、客員研究員である倉敷中央病院の綾邦彦先生、医学科5年生の西村さん、山辻さんと共に研究に取り組んでいます。

教育面では、4月スタートの1年生の医学生物学は新型コロナ感染症対策のためオンラインで、医学セミナーは対面と一部オンラインで行いました。また、6月には医学系CBTブラッシュアップ専門部会委員として大内田が医療系大学間共用試験実施評価機構(東京)にてCBT問題のブラッシュアップ作業を行いました。

研究面では、4月から大内田がAMED創薬支援推進事業・創薬総合支援事業の委託研究、国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所、浜松ホトニクスとの共同研究を開始し、伊藤助教と綾先生は引き続き各自の基盤研究Cを進めています。大内田が参加した共同研究の論文が、Epilepsia. 63: e80-e85, 2022.とJournal of Dermatological Science. online June 28, 2022.に発表されました。

今後も教室員一同、教育、研究に取り組んで参りますので、ご指導の程よろしくお祈り申し上げます。最後になりましたが、同門・同窓の諸先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(大内田 記)

腫瘍微小環境学

腫瘍微小環境学分野として2年目に入り、多くの先生方のサポートもありまして、新年度から他大学の大学院生や留学生も含めて新しいメンバーが多数加わり、スタッフ4名、博士10名、修士2名、技術補佐員4名の大所帯となりました。

新年度も引き続き科研費、AMED、民間財団等に複数採択され、複数の企業とも共同研究を行っています。あまり今まで行っていなかったミトコンドリア・免疫代謝の研究や細胞療法に関する研究も始めていて面白いデータが出ています。成果といたしましては、初期のシングルセルシーケンズデータを基に行ったがん免疫療法のmixed responseに関する論文がAACRの雑誌Cancer Res Communに掲載され、さらにInt ImmunolやCancer Sciにinvited reviewが掲載されました。岡山に着任してから臨床の先生方と共同で行った研究も複数投稿・査読中

で、データが揃い近いうちに投稿予定のものも複数あり、成果を皆様にご覧いただければと思っています。

臨床的な疑問から臨床データや検体を解析することが病気の本体解明に最も近いと考えておまして、そのような我々の研究に興味がありましたら是非気軽に声を掛けください(ytogashi@okayama-u.ac.jp)。まだスタートしたてで至らぬ点もございますが、今後とも皆様の温かい支援並びにご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしく申し上げます。(富樫 記)

細胞生物学

[人事] 2022年4月より新しいメンバーとして宮本航大さん(修士課程)、安井優さん(修士課程)、泌尿器病態学から長崎直也さん(博士課程)、堀井聡さん(博士課程)が加わりました。

[研究成果発表] 大学院生Ni Luh Gede Yoni Komalasariさんが乳がんにおけるLOXL4の機能について、大学院生合原勇馬さんがREICのPD-L1への作用を介したがん抑制メカニズムについて、木下理恵助教が炎症性疾患に対する抗S100A8/A9抗体療法におけるマクロファージの役割について、日本組織培養学会第94回大会(2022年7月、豊中市)でそれぞれ発表を行いました。同大会でNi Luh Gede Yoniさんと合原さんはEnglish Presentation Awardを受賞しました。私、村田が軸索変性に関与するSARM1の阻害剤開発についてNeuro2022(2022年7月、宜野湾市)で発表を行いました。「肺炎症性疾患の予防及び/又は治療剤」について、中国、米国、カナダ(2022年4月)において特許出願を行いました。

[研究費獲得状況] 2022年度からの新規科研費として、山本健一助教と私、村田がそれぞれ基盤研究Cに採択されました。阪口政清教授が公的財団法人長瀬科学技術振興財団の研究助成に採択されました。

今年度も教室員一同力を合わせて研究に励んでいきたいと思っています。(村田 記)

細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ABCトランスポーター発現と細胞機能変化の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボロミクス研究など様々な研究を実施しています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、インドネシア留学生(博士課程)、工学部、薬学部などの学内研究者、京都大学の共同研究者が従事しています。

教育関係では、年度初めから3年生対象の基礎病態演習、1年生対象の医学セミナーと医学生物学、修士課程対象の生化学といった多くの授業が重なったため、1日に3つの授業を掛け持ちするなど忙しい日々を送りました。医学セミナーでは、初回は新型コロナの関係でオンライン授業となりましたが、2回目以降は対面授業を行うことが出来ました。今回のテーマは「人体」と決まり、各自の興味および視点で人体に関わる個々のテ-

マ(眼、記憶、睡眠、心臓、イップス)について調べてもらいました。学生の調査資料の発表に対して、他の学生からの様々な質問や意見を元に資料の加筆修正を行ってもらい、最終的に非常に興味深く、良くまとまった冊子を作成することが出来ました。(小淵 記)

組織機能修復学

当教室の現況の報告をさせていただきます。

人事関係では、北野統己先生が博士課程に進学、整形外科学教室から井上智博先生が大学院生としてお越しになり、修士課程に岡本真幸さん、櫃本有希雄さん、藤澤佑樹さん、山本由夏さんの4名が加わりました。また、8月より長船洋子さんが秘書として着任いたしました。新しく参画されたみなさんも研究意欲が高く、よい雰囲気をラボに届けてくれております。

学術関係では、山田大祐助教が岡山医学会総合研究奨励賞(結城賞)を受賞しました。また、高尾知佳助教が第42回日本骨形態計測学会で「マウス骨髄内LepR陽性細胞中の細胞不均一性の解析」という演題で発表しました。論文面では、今年に入ってから3報掲載されております。

教育関係では、1年次科目『医学セミナー』、3年次科目『基礎病態演習』を対面で行いました。医学セミナーでは「再生医療」というテーマで各自が興味のある分野をそれぞれ調べ、それを一つのプレゼンとして綺麗にまとめて発表することができました。そして基礎病態演習では鎌状赤血球症を担当し、しっかりと最後の英語のプレゼンまで完遂することができました。また、7月15日にアメリカから森宗昌先生をお招きし、「肺の臓器創生は実現できるのか?」という演題でRSセミナーを開催しました。そして8月26日には長崎大学から松下祐樹先生をお招きし、「骨の形成、再生を制御する骨の幹細胞を探し求めて」という演題でRSセミナーを開催しました。両セミナーとも多くの先生方がご参加くださり盛況に終わりました。

その他、共同研究の先生方のご支援によりAMEDの橋渡し研究プログラムpreFを始めとした研究費獲得に至っております。

最後になりましたが、今後とも先生方のご支援並びにご指導ご鞭撻のほど、よろしく申し上げます。(大曾根 記)

消化器・肝臓内科学

2015年の着任以来、常に先頭に立って当科を牽引してこられた岡田裕之先生が3月末を持ち定年退官され、4月から故郷の姫路赤十字病院院長に着任されました。現在主任教授不在という逆境に立ち向かうべく、副診療科長平岡(H6)を中心に医局員一丸となり診療、研究、教育に従事しています。また代理教授を伊藤浩循環器内科教授にお願いさせていただいており、この場をお借りして御礼申し上げます。

スタッフ人事面と致しましては、4月に高木准教授(H2)が肝・腎疾患連携推進講座教授に就任致しました。また原田(H11)が消化器内科講師へと昇進、内田(H18)が2年間の医薬品医療機器総合機構(PMDA)への出向を終え、新医療研

究開発センター助教として復帰しました。一方7月には長年消化管グループの中心メンバーとして活躍した神崎洋光 (H15) が津山中央病院へ赴任致しました。また大学院生、医員の人事面では4月に小川泰司 (H23) が津山中央病院へ、上田英次郎 (H24) が岩国医療センターへ、姫井一美 (H24) が広島市民病院へ、山本峻平 (H24) が姫路赤十字病院へ、安富絵里子 (H24) が香川県立中央病院へ、田尻和也 (H24) が福山市民病院へ、國富恵美 (H27) が赤磐医師会病院へ赴任しました。さらに後期研修中の増田修子 (H28) は産休に入り、嶋崎岳 (H29) は鳥取市立病院に戻り研修を継続しています。入れ替わりに宮本和也が津山中央病院より胆膵グループ医員として、三宅望 (H26)、山本洋一郎 (H26)、牧佳恵 (H27)、須江真彦 (H27)、大里俊樹 (H27)、神尾知宏 (H28) が病棟医として、さらに後期研修中の林里美 (H29) が半年間の予定で帰局し、各々が消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。

コロナウイルスの影響もいまだしばらく続くことが予想され、以前にも増して厳しい条件下ではありますが引き続き消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご貢献できるよう努力致しますので引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。(川野 記)

血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素より多大なご支援をいただいておりますことを心より御礼申し上げます。当教室の現況の報告をさせていただきます。

前田嘉信教授は、2021年4月より岡山大学病院長として現在に至るまで、コロナ禍という逆風の中、大学病院の維持・発展に尽力し、診療、研究、教育のすべての分野で日本をリードする病院を目指しております。「患者さんのために、保健・医療の発展のために、自己ではなく社会のために」という理念のもと、コロナ禍の様々な場面におけるチーム医療の実現にご協力いただき、各診療科、同窓の先生方に深く感謝申し上げます。

臨床中核拠点病院・がんゲノム医療中核拠点病院・造血幹細胞移植推進拠点病院など岡山大学病院が果たす様々な役割において、当科医局員も日々尽力をしております。血液グループでは、CAR-T細胞療法実施施設として患者さんの新たな希望を支えるとともに、造血幹細胞移植推進拠点病院として国立大学の中でも有数の移植数を誇っております。困難症例の移植実施も多く、BCRやICUの先生方・メディカルスタッフの皆様のご尽力なくしてこのような診療は行えず、この場をお借りしてお礼申し上げます。呼吸器グループでは、肺がんだけでなく種々の固形がんの薬物療法に力を入れております。近年の分子標的治療薬・免疫チェックポイント阻害薬の著しい進歩とともに進行がん患者さんの寿命は大きく伸びております。このため、主治医の判断により患者さんの予後が大きく左右される責任を真摯に受け止め診療を行っております。また、COVID-19を含む呼吸器感染症や間質性肺炎など良性呼吸器疾患にも積極的に取り組み、これまでエビデンスの創出の困難であったこれら良性呼吸器疾患においても様々な研究の取り組みを行っております。

教室の実務体制は、医局長 市原英基、外来医長 浅田騰、病棟医長 肥後寿夫 (西8階)・藤原英晃 (西3階BCR)、教育医長 横本剛が担当しております。血液・腫瘍内科の医員は植田裕子、松村彰文、松原千哲そして2022年4月から近藤歌穂、寺尾俊紀が加わり、10月には米国より清家圭介が帰局予定です。呼吸器・アレルギー内科の医員は、田岡征高に加え2022年4月松本千晶、小柳大作、滝貴大、山下真弘が加わり、更に7月より大西桐子が加わりました。10月には田中孝明も加わる予定です。

最後になりましたが、引き続き「患者さんのために、医学のために、社会のために」教室員一丸となって診療、研究、教育に取り組んで参りますので、何卒ご支援、ご指導の程よろしくお願ひ申し上げますとともに、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。(市原 記)

腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田 淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動をはじめ、広く精力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っています。和田教授が研究代表者である「尿レクチンアレイ解析を用いた腎疾患診断キットの開発」(令和2-4年度AMED難治性疾患実用化研究事業)で体外診断薬の開発を目指しております。また「糖尿病性腎臓病における糖鎖異常と進展機構」(令和4-6年度基盤研究B)や「糖鎖修飾ソマトスタチンGT-02037の前期第II相試験」(医師主導治験)など糖鎖研究に力を入れています。

令和4年3月に、日本女性腎臓病医の会(JSWN)より田中景子先生が研究活動奨励賞、内山奈津美先生が症例報告論文賞を受賞いたしました。また、第66回日本リウマチ学会学術総会において、勝山恵里先生がICW Excellent Abstract Awardを受賞し、医学部6回生の高嶋香菜子さん、清水崇司さん、上舞直さんが近未来のリウマチ医セッションで優秀ポスター賞を受賞しました。

人事面では、長らく腎臓内科の診療・研究・教育にご尽力いただいた杉山 斉教授が令和4年3月に退任され、4月より川崎医療福祉大学の教授に就任されました。また、4月に血液浄化療法部講師の木野村賢先生が岡山済生会総合病院腎臓内科に、リウマチ・膠原病内科助教の大橋敬司先生が倉敷成人病センターリウマチ科に、腎臓内科医員の奥山由加先生が姫路赤十字病院に、それぞれ赴任されました。今後のご活躍を祈念しております。令和4年4月より森本栄作先生が三朝地域医療支援寄付講座の助教に着任しました。新たな寄付講座として慢性腎不全総合治療学講座が開設され、講師に森永裕士先生、助教に大西康博先生が着任しております。また、田原稔久先生、中納弘幸先生、寺嶋悠也先生、石井貴大先生、櫻武敬真先生、浅川知彦先生、山岡主知先生が医員として、山崎遥香先生、森本志帆先生が医師支援枠医員として病棟業務に従事されています。中国よりPost-ONECUS大学院生として来日した田 哲先生と楊博軒先生が各々腎臓グループと糖尿病グループで研究を開始しております。

最後になりましたが、同門の諸先生方の御健康と、益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。(田邊 記)

精神神経病態学

多くの方々に惜しまれつつ、令和4年3月末をもって、山田了士先生が教授職を退任されました。あつという間の7年間で、山田先生が当教室の臨床・研究・教育の充実・発展に大きく貢献されたことはご存じの通りです。ご在任中、多くの学位取得者を指導・輩出されたほか、全国学会の大会長をお務めになる(過去最多の参加者数)など、数々の輝かしい実績を残されました。そして、教室員だけでなく、初期・後期研修医や学生に対しても熱心なご指導を続けてこられるなど、後進の育成にも尽力されました。教室はいつも山田先生のあたたかい笑顔に包まれ、穏やかな雰囲気になり溢れていたことが思い出されます。同年4月より、岡山県精神科医療センターの副理事長・特任院長に着任されており、ますますのご活躍を心からお祈りしています。

また、今春から松井友紀子先生が姫路北病院に、中村敦俊先生が林道倫精神科神経科病院に異動となりました。さらに、専攻医の浅田貴大先生は慈圭病院で、石川真悠子先生と江原慎一郎先生は岡山県精神科医療センターで、大矢芳男先生はたいよりの丘ホスピタルで、そして辻野修平先生は岡山大学病院で、それぞれさらなる研鑽を積んでいます。

令和4年度は、新たに6名の専攻医の先生(木曾萌香先生・栗山裕先生・馬場悠花里先生・横出晃能先生・山下修平先生・佐藤涼太先生)と、鳥越美沙子先生をお迎えしました。教室医局長は井上真一郎が4期連続6期目で、外来医長は岡久祐子先生、病棟医長は竹之下慎太郎先生、そして教育医長は藤原雅樹先生と、教授の交代に備えて同じ顔ぶれとなっています。

最後に教室行事ですが、去る6月26日に岡山国際ホテルで第128回教室同門会を開催し、150名を超える多くの先生方がご参加下さり、山田了士先生にも退任記念としてご講演をいただきました。コロナ禍が続きますが、今後も多くの先生方とリアルで交流できますことを願うばかりです。(井上 記)

小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現状を報告させていただきます。診療では「小児医療センター」を基盤として、先進の高度医療を提供しています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科、小児心身医療科が中心になり、院内の多くの診療科・診療部門との横の連携を進展させています。

本年7月末には、重篤な小児患者に対して高度集中治療を提供するとともに、小児救急医療関係者の臨床教育を行う「小児救命救急センター」も設置されました。中国四国地方では初になります。

「周産母子センター」では、産科婦人科と協働連携しながら、吉本順子、鷺尾洋介が中心になってNICU患者の診療にあたっ

ています。広島県と福山市による寄付講座である「小児急性疾患学講座」では、広島県福山市とその周辺地域の医療保健福祉を池田政憲特任教授、鷺尾洋介、津下充らが支援・強化しています。

馬場健児が医局長・病棟医長兼任、藤井智香子が外来医長、吉本順子が教育医長を務めています。COVID-19の大流行による様々な制約の中で、医局員が一丸となって小児医療の「最後の砦」としての任務を果たしています。

研究面では、各診療グループが高いレベルの成果を挙げています。中国四国の連携施設と協力しながら、小児科同門会として1~2週に1編のペースで英文論文が出されています。最近、トップジャーナルにもいくらか成果を出せるようになりました。ここ半年ですと、Pediatr Res、Inflamm Res、Antioxidants、Sci Repなどです。海外留学としては、カナダのThe Hospital for Sick Children(トロント)、スウェーデンのKarolinska Institute(ストックホルム)などで臨床や基礎の研究が行われています。

現在、岡山大学小児科の医局員は、出産や育児などで一時仕事を中断している方も含めて約40名です。当小児科への「入局者」は毎年コンスタントに6~10名(約半数が女性)ですが、こちらの数字は国内有数です。今年は7月時点で、すでに7名の若手医師を迎えました。毎年、岡山大学病院プログラムにて小児科専門研修を開始する方は5名前後、岡山大学大学院(小児医療関連)に入学する方、卒業する方はそれぞれ5名前後です。

中国四国の中核的な総合病院の多くは岡山大学病院の連携施設ですが、それらの病院の部長・副部長の小児科医師、それぞれ約20名、約10名が臨床教授、臨床准教授として、当院の豊かな教育環境をさらに充実させてくださっています。(塚原 記)

発達神経病態学

小林勝弘教授のもと、秋山倫之准教授(てんかんセンター副センター長、医局長)、秋山麻里助教(教育医長)、柴田敬助(外来医長)、土屋弘樹助教(病棟医長)の体制で、教室運営を行っています。

医局人事に関しては、4月より兵頭勇紀が北野病院に赴任いたしました。新たに、大野友香子が医員として専門研修を開始いたしました。一方、品川穰が国内留学、禪正和真が専門研修を終えました。

診療については、新型コロナウイルス感染症がなかなか収まらない影響もあり、入院患者数が少なめの状態が続いております。同門の諸先生方には、基礎疾患検索、てんかん外科手術の適応検討、治療入院などを視野にいらたご紹介を引き続きお願いいたします。

他診療科との連携体制(小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボード)には大きな変更なく診療を継続しております。また、臨床遺伝子診療科と協力し、月数回の小児遺伝外来を開設いたしました。

学会活動は、ハイブリッド開催が主体です。この中、日本小児科学会(演者:浦田奈生子)、日本小児神経学会(演者:秋

山倫之、秋山麻里)、岡山てんかん懇話会(演者:塚原理恵)で、発表を行いました。研究面では、てんかんや神経生理学、代謝物質分析等に関する臨床研究を継続しております。

来年5月25日(木)~27日(土)には、小林勝弘会長のもと、第65回日本小児神経学会学術集会を岡山で開催予定です。「先端研究と臨床的洞察の融合に向けて」というテーマで、魅力あふれるプログラムを現在構成中です。

今後とも同門の諸先生方のご指導、ご鞭撻、ご支援をよろしくお願い申し上げます。(秋山 記)

消化器外科学

令和4年4月~令和4年8月の教室だよりをお届けします。藤原俊義教授のもと、現体制となって13年目を迎え、教室員一同、臨床・研究・教育に励んでおります。

人事面では、4月より香川俊輔が腫瘍センター准教授に配置換えとなり、岩本高行は新医療研究開発センター講師に、垣内慶彦は低侵襲治療センター助教、橋本将志は消化管外科研究助教に昇任しました。納所 洋は広島市立広島市民病院、吉田一博は姫路聖マリア病院、熊野健二郎は岡山赤十字病院、武田正は岡山済生会総合病院、佐藤博紀は福山市民病院へ異動しました。研究を終えた赤井正明は岡山赤十字病院、藤本卓也は藤本外科・胃腸科・肛門科クリニック、八木千晶は岡山済生会総合病院へ赴任しました。広島市立広島市民病院より尾山貴徳、関西医科大学附属病院より松三雄騎が帰局し、米国留学から帰国した賀島 肇、研究を終えた庄司良平、畑七々子、臨床研修を終えた木村次郎、高橋達也、藤田脩斗、三島顕人、大倉友博、半澤俊哉および外科専門研修3年目の片山哲也、岡野 寛、高橋洋祐、新田 薫、松本真実とともに、消化管外科・肝胆膵外科・小児外科病棟で日夜奮闘しております。陶守貴人、竹田泰茂、門脇大輔は病棟勤務を終え、松田病院、おおもと病院で外科専門研修を終えた高橋利明、野木祥平とともに大学院生として研究生活に入りました。

研究・学会活動では、令和4年6月17日(金)、18日(土)に「第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会」を藤原教授と岩国医療センター田中屋宏爾副院長の共同会長のもと開催致しました。現地(岡山コンベンションセンター)とWEBのハイブリッド形式にて執り行いましたが、約1,100名(現地会場約300名)の先生方にご参加頂き、盛況のうちに会を終えることができました。皆様から頂きましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育におお層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り致します。

(黒田 記)

呼吸器・乳腺内分泌外科学

2022年4月からの教室だよりをご報告いたします。COVID-19の流行は大きな第七波に入っており気の抜けない中ではございますが、当教室は豊岡伸一教授のもと「真摯・利他・向上」

を掲げ6年目、また豊岡教授が医学部長となられて2年目を迎えております。教室のみならず、医学部全体をさらに活性化させるべく研究、教育、診療に取り組んでおります。また、COVID-19の感染に注意しながらではございますが、オンラインでの学会も国内外で再開されるようになりました。日々のご支援のもと積み重ねてまいりました研究成果をしっかりと発信できるように努めております。

臨床面では、手術実績はほぼCOVID-19流行前に戻り、肺がんに対するロボット手術や肺移植また乳がん診療におきましては遺伝性乳癌卵巣がん症候群に対する予防的両側乳房切除および同時乳房再建など高難度の手術数も増加傾向にございます。がんゲノム検査数も増加しており、それに伴って新たな薬剤の治験も数多く行うようになりました。研究面では、豊岡教授がプロジェクト代表者を務める「保健医療分野におけるAI研究開発加速に向けた人材養成産学協働プロジェクト」のもと医療AI人材育成プログラムが整備され、特に医歯薬学総合研究科の医療AI応用コースにおいて、当教室の大学院生が新たなAI技術を研究しております。

人事面では枝園忠彦講師が准教授となり土井原前教授の後をひきついで、乳腺・内分泌外科の診療科長を拝命しております。また国立がん研究センター東病院乳腺外科より岩谷胤生が乳腺内分泌外科講師として新たに着任いたしました。岩谷講師は医療経済評価が専門で公的評価機関のメンバーも務めており、その経験を当教室においても活用してまいります。そして、大亀正義、氏家裕征、吉川真生が病棟医を終え研究生活に入っております。また、津高慎平(香川県立中央病院)、高津史明(四国がんセンター)、藤原みわ(広島市民病院)、鳩野みなみ(岩国医療センター)が大学院の研究を終え、地域の施設に赴任いたしました。これまで通り温かくご指導賜りますようよろしくお願いいたします。

COVID-19の中でも感染に注意しながら活発に研究や診療を行っていく状況が整いつつあると思います。豊岡教授のもと一丸となって、COVID-19流行前よりもさらに地域に貢献できるよう努めてまいります。今後とも教室の運営にお力添えのお願いとともに同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(枝園 記)

整形外科

令和4年4月から8月までの教室だよりをお届けいたします。

現在、令和5年5月に主催する第96回日本整形外科学会学術総会を成功させるための準備を、教室を挙げて行なっております。

教室の行事としまして、6月11日に第68回岡山大学整形外科開講記念会を開催いたしました。川崎医科大学骨・関節整形外科学の三谷 茂教授による特別講演「人工骨頭・THAの術中合併症対策-今日は大腿骨側のみ-」がありました。また、この2年コロナのため延期していた新入局員の挨拶(令和2年から4年入局の47名)を行いました。

7月30日に岡山大学整形外科桃整会夏季セミナーを開催いたしました。杉原進介、濱田全紀、中田英二、藤原智洋による4題の教育研修講演と国立がん研究センター中央病院骨軟部腫

瘍・リハビリテーション科科長の川井 章先生による特別講演「ゲノム医療から骨盤内臓全摘術までー骨軟部腫瘍の広大な世界ー」があり、若手医師を中心に約60名が参加し、骨軟部腫瘍について学びました。

8月6日に第46回岡山スポーツ医科学研究会を開催いたしました。岡山大学病院歯科補綴歯科部門の兒玉直紀先生による「スポーツ選手の口腔健康を考えるー歯科医師としてできることー」と広島国際大学総合リハビリテーション部の加藤茂幸先生による「スポーツ外傷（膝前十字靭帯損傷）予防の流れ」の講演があり、約40名（医師、コメディカル、学生）が参加しました。

人事面では、4月に運動器知能化システム開発講座准教授の宮澤慎一が福山医療センターに異動し、後任として横山裕介が助教として採用されました。またアメリカのスクリプス研究所に留学しておりました中道 亮が帰局いたしました。大学院生の根津智史が鳥取市立病院、佐藤嘉洋が岩国医療センター、梶平将太が邑久光明園、高尾真一郎が岡山医療センター、近藤宏也が四国がんセンター、平中孝明が赤穂中央病院、梶木裕矢が神野病院にそれぞれ異動いたしました。志渡澤央和、板野拓人、井上智博、植田昌敬、川田紘己、志水紀之が大学院生として帰局し、研究を開始しております。また、専門研修プログラムにより半年間研修しておりました安藤輝彦、徳田貴大、日笠晋太郎、松本 慎、守屋真我がプログラムで決められた病院に異動し、新たに山本哲也、石原健嗣、今谷紘太郎、國富康資、塚原 良、横溝大一郎が研修に励んでおります。

さらに、4月から岡崎勇樹がニューヨーク、7月から篠原健介がサンディエゴ、8月から釜付祐輔がノルウェーオスロに留学いたしました。

今後とも鶴翔会の先生方のご支援、ご指導をよろしく願い申し上げます。（雑賀 記）

皮膚科学

森実真教授は、2018年7月より第11代目岡山大学皮膚科学教室教授に就任され、臨床・教育・研究を精力的に行っており、また総務運営担当副院長としても本病院全体の運営に尽力しておられます。

人事面では、2022年4月に新入局員として澤井望先生、横溝紗佑里先生、岡野真理先生が入局し、川上佳夫先生、高須賀琴美先生、蓮井謙一先生、別木祐介先生と松田吉弘先生とともに岡山大学病院にて勤務しております。立花宏太先生は、2022年4月より助教になりました。また岡山大学より、2022年2月に山崎修先生が島根大学へ、2022年4月に濱田利久先生が国際医療福祉大学医学部へそれぞれ教授として御就任されました。お二人の御栄転を心よりお祝い申し上げます。学術面では、6月第121回日本皮膚科学会総会で池田賢太先生が優秀演題賞を受賞しました。研究面では、学外で継続してる先生を含めて8名の大学院生が皮膚悪性腫瘍、皮膚免疫やウイルス感染症等の研究を継続しており、2022年2月より杉原悟先生はThe University of Queensland Diamantina Institute, Translational Research Instituteへ留学中、2022年3月立花宏太先生と中川

祐貴先生が大学院を卒業しました。新型コロナ感染症対策を十分行いながら、入局見学も随時受け入れており、先日岡山大学皮膚科のホームページを更新いたしました。当科での活動も、ひとえに皆様方のご協力とご支援の賜物と、森実教授をはじめ医局員一同、深く感謝申し上げます。今後とも何卒宜しく願います。末筆となりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念申し上げます。（三宅 記）

泌尿器病態学

令和4年4月から令和4年8月までの教室だよりをお送りいたします。

7年間教室を主宰してきた那須保友前教授は令和4年3月をもって定年退官を迎えました。引き続き岡山大学理事（研究担当）・副学長として職務に専念される予定です。教授不在ではありますが、荒木元朗准教授・診療科長を中心に医局員一丸となって職務にあたっています。医局長は枝村が、病棟医長は西村慎吾助教が継続しておりますが、4月から岡山中央病院より小林知子助教が帰局し外来医長へ、岩田健宏助教が教育医長へ就任しました。

人事面では3月末で佐古智子が広島市民病院へ、徳永素が岡山医療センターへ出向になりました。4月から、小林知子助教に加えて広島市民病院より別宮謙介助教が帰局し鋭意診療にあたっているほか、鶴川聖也、原惇也、松島萌希、長崎直也が泌尿器科専攻医として大学病院での研修を開始しました。また、2018年より大学院で研究活動をしていたACOSTA GONZALEZ HERIK RODRIGO大学院生ですが、7月で日本での研究生活を終えアメリカのミシガン大学で臨床研修を開始しました。今後の活躍が期待されます。

学会活動ですが、7/1から7/4まで開催された欧州泌尿器科学会へ片山聡助教、吉永香澄助教、渡部智文医員が現地参加し発表を行って来ました。久しぶりの海外学会への参加であり、当事者のみならず参加報告を受けた医局員も大いに刺激を受けました。COVID-19次第ですが、早く以前のような学術活動が再開できることを皆待ち望んでいます。

今後とも同窓の先生方におかれましては、御指導ならびに御支援くださいますようお願い申し上げます。（枝村 記）

眼科学

眼科学教室の近況をご報告いたします。今年度の『岡山大学眼科専門研修プログラム』の参加登録者は4名（知原、今村、永山、上野）です。この1年間は網膜、緑内障、斜視の分野をローテーションし、眼科への理解を深めてもらう予定です。4名共、上級医の指導の下で毎日様々な経験を積みながら頑張っています。

本年5月より毎週水曜日に「眼炎症・ぶどう膜炎」の専門外来を開設いたしました（塩出、金道）。膠原病内科とも連携し、ステロイド、生物学的製剤を用いた治療から硝子体手術まで、最適な治療をご提供できるよう頑張ります。学会や研究会での発表も積極的に行う予定です。

網膜剥離や外傷など、手術を要する緊急患者の受け入れもこれまで通り積極的に行っております。平日9:00-17:00までは眼科外来:電話(086)235-7952、または初診予約担当:電話(086)235-7205、平日時間外および土・日・祝日は眼科病棟:電話(086)235-6708が連絡先となっております。時期によっては病床に限りがあることもございます。誠に恐縮ではございますが入院の可能性のある急患については事前にご一報くださいますようお願いいたします。なお、これまで、平日の緊急患者の御紹介は眼科医局へご連絡を頂いておりましたが、悪質な電話が多いため医局にお電話頂いても、医師への直接の電話の取次ぎおよび診療に関する電話の受付はできなくなりました。医師からは折返しご連絡いたします。ご迷惑をおかけいたしますが何卒ご理解の程よろしくをお願いいたします。(塩出 記)

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室の現況をお知らせいたします。学会関係ではCOVID-19の行動制限が緩和され、開催形式もハイブリッドが主流となりつつあります。その中、日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会、日本頭頸部癌学会、日本アレルギー学会、耳鼻咽喉科臨床学会、日本小児耳鼻咽喉科学会などで医局員が現地ならびにWebにて多数の演題発表をいたしました。

また6月25-26日に中国四国地方部会連合学会を当科が主管となって開催し、多数の参加をいただき、盛況の内に終了することができました。皆様方には深く感謝申し上げます。

人事関係では3月に駿河有莉が国立岡山医療センターへ異動、4月より牧原靖一郎が香川労災病院より帰局しています。また、上野雄介、田口佳典、田中慎太郎、森脇悠利の4名の新入局員を迎え、教室は活気に満ちています。

臨床面ではCOVID-19感染に細心の注意を払いつつ外来・手術をおこなっております。今後とも同窓の諸先生方のご支援をよろしくお願い申し上げます。(菅谷 記)

放射線医学・放射線部

令和4年4月~令和4年8月における当教室の活動と現況についてご報告いたします。

平木隆夫教授就任以降、新体制での教室運営は円滑に行われております。

人事面については、大学から関連病院への異動として、4月に丸川洋平が岡山済生会総合病院へ、北山貴裕が中国中央病院へ、丸山拓夢が香川県立中央病院へ、河村俊一が住友別子病院へ、西垣貴美子が岡山医療センターへ、7月に蟹江悠一郎が姫路赤十字病院へ、それぞれ赴任いたしました。関連病院から大学へは、4月に川端隆寛、浅野雄大、大野凌、川田まりあ、衣笠里菜、山田実典が帰局しております。さらに、今年度は岐阜大学からの国内留学生として永田翔馬先生を大学病院に迎えています。また、この春の新入局員として、岡部将仁、高橋優花、久保遥祐、平井唯隆の4名が教室に加わりました。岡部、高橋は岡山大学病院で、久保は岡山赤十字病院で、平井は姫路赤十字病院で、それぞれ後期研修を開始しております。医局役員に

ついては、4月より外来医長に児島克英、病棟医長に吉尾浩太郎、教育医長に宇賀麻由が就任いたしました。

学術面では、第81回日本医学放射線学会総会をはじめとする主要な関連学会にて当教室・関連病院より多数の優れた演題発表がなされました。教室員は様々な臨床・基礎研究に引き続き精力的に取り組んでおります。主要なプロジェクトの一つであるCTガイド下針穿刺ロボットの医師主導治験については予定数の治験手技を無事完遂いたしました。

教室関連の行事としては、4月にハイブリッド形式で同門会を開催し、併せて平木教授就任記念セレモニーを執り行いました。5月には恒例の研修医画像セミナーをWeb開催し、多数のご参加を頂きました。今年度は、研修医や学生の皆様に画像診断を学んで頂く機会をさらに多く提供できるよう、同セミナーを複数回開催することを予定しております。

以上、簡単ではございますが教室の近況をご報告させて頂きました。同門・同窓の諸先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。(松井 記)

産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。4月以降も日本産科婦人科学会、日本婦人科腫瘍学会、日本周産期新生児医学会などの学会等で教室から多数の演題を発表いたしました。6月12日、3年ぶりに第89回同門会総会ならびに学術講演会が対面で催行されました。今後もひき続き、同門会が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、鳥取市民病院の早田 裕が香川県立中央病院に、岡山市立市民病院の川西貴之が岡山赤十字病院に、岡山赤十字病院の道満佳衣が赤穂中央病院に赴任されました。また原賀順子は交流人事として、2020年4月より厚生労働省に出向されていましたが、本年4月より新医療研究開発センターの助教として勤務されています。9月時点の教室内役職は医局長 中村圭一郎、婦人科病棟医長 小川千加子、外来医長 早田 桂、周産母子センター産科部門長 衛藤英理子、教育医長 久保光太郎の体制で運営しております。

本年度は当教室に3名の新入局員を迎えました。杉原百芳、田中佑衣、藤川 淳が大学で後期研修を開始いたしました。10月から各地の研修病院に赴任します。ご指導宜しく願います。また7月には後期研修を終えた大羽 輝、岡本遼太、兼森雅敏、白河伸介、中村一仁、片山菜月、牛尾友紀が産婦人科専門医試験を受けました。

産婦人科医不足は相変わらずで、同門のベテランの先生方には定年後も嘱託医や非常勤医師として現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。2024年には「医師の働き方改革」が開始されます。「集約化と機能分担」が必要であることは自明の理ですが、各病院の思惑もあり簡単には進まないことも予想され、行政を巻き込んだ働きかけが不可欠です。引き続きの御指導ならびに御支援の程宜しく願います。(中村 記)

麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

手術室、ICU診療に関しては、コロナ第5波の影響から脱し手術件数およびICU入室数も通常の状況にまで戻ってきておりましたが、再度第7波の影響を受け出しました。これまでと異なり重症コロナ患者数は数少ないため、ICU/CCUベッドを気にする状況ではありません。しかし医療者欠員に伴う病院全体の診療制限、ベッド調整が余儀なくされています。手術室でも例外でなく、約10%程度の手術制限をかけております。各診療科の方々にはご不便をおかけしておりますがご協力をお願い致します。

ペインクリニックはカルナコネクト（地域連携病院から直接外来予約可能なシステム）を導入しております。また、外来再移転は外来棟4階に向けて協議中です。

教室の活動として当科主催の2つの学会開催をご報告致します。7/30（土）に岡山コンベンションセンターで第6回日本集中治療医学会中四国支部会が現地開催され、無事終了致しました。また、10/8（土）、9（日）には第27回日本小麻酔学会が同じく岡山コンベンションセンターで開催予定です。コロナの状況を鑑みてハイブリッド形式での開催予定です。ご興味のある方は是非ご参加下さい。

今後とも各診療科の先生方をはじめ、看護師、コメディカルスタッフの皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

（清水 記）

脳神経外科学

新型コロナウイルス感染症は依然として蔓延しておりますが、当院での日常診療は引き続き嚴重な感染対策を行いながら、粛々と行っております。

令和4年3月11日に梅田昭正先生（昭和27年岡山大学卒業）がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。人事関連では、まず新入局者ですが、柿本昂佑樹先生（岩国医療センター勤務）、池田彬人先生（香川県立中央病院勤務）が入局されました。異動・昇任につきましては令和4年3月から令和4年7月の間について記します。令和4年3月には新郷哲郎先生が獨協医科大学から宇都宮脳脊髄センターシンフォニー病院勤務、丸尾智子先生が百石病院よりかがわ総合リハビリテーション病院脳神経外科勤務となり、本条征史先生が本条脳神経外科・外科を閉院されました。令和4年4月には河内正光先生が香川県立中央病院院長退任後に屋島総合病院脳神経外科勤務、守山英二先生が福山医療センター退職後に尾道市立市民病院脳神経外科勤務、大熊佑先生が福山市民病院から苑田第一病院脳神経外科勤務、橋本洋章先生が大手前病院から大阪母子医療センター脳神経外科勤務、川上真人先生が岩国医療センターから谷本駿先生が岡山赤十字病院から井本良二先生が香川労災病院から水田亮先生が岡山大学病院からそれぞれ大学研究室に帰局、井上陽平先生が岩国医療センターから家護谷泰仁先生が市立三次中央病院から五月女悠太先生が広島市立広島市民病院からそれぞれ岡山大学病院勤務、小橋藍子先生が岡山大学病院から広島市立広島市民病院脳神経外科勤務となりました。

令和4年5月には水田亮先生が岡山大学研究室から愛知県がんセンター研究所腫瘍免疫制御TR分野勤務となりました。令和4年7月には堀佑輔先生が米国Boston Children's Hospital, Harvard Medical Schoolから米国Stanford University School of Medicine, Center for Clinical Sciences Research勤務となりました。

教室の役職は、令和4年4月より医局長は藤井謙太郎、外来医長は平松匡文、病棟医長は石田穰治にそれぞれ交代し、教育医長・教育企画委員は引き続き春間純が務めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告いたしました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

（藤井 記）

総合内科学

大塚文男教授は、2012年に教授着任されて10年が経過致しました。令和3年度から拝命した企画／広報・SDGs担当の副院長の職は継続しており、引き続き本院全体の改善・改革や広報活動に尽力してまいります。

教室の動きです。臨床面では、引き続き長谷川病棟医長・小比賀外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第6波を乗り越えましたが、オミクロン株を中心とした第7波対応のために診療科一丸となっています。病棟診療では、新たに病棟医として当科に加わってくれた若手医師を中心に、周辺地域から紹介される診断困難例・難治例を診療しています。外来は、徳増助教を中心とした「不明熱外来」、植田教授を中心とした「漢方臨床教育センター」、片岡教授を中心とした「女性ヘルスケア外来（内科）」、萩谷准教授による「渡航ワクチン外来」を継続しています。新型コロナウイルス感染症関連として、社会的にも注目されている「コロナ・アフターケア外来」（新型コロナウイルス感染症罹患後の長期後遺症に悩む患者さまを対象とした専門外来）、「ワクチン副反応外来」（新型コロナウイルス感染症に対するワクチン接種後の副反応に悩む人への専門外来【岡山県からの委託】）も継続しています。病院全体の患者受け入れ制限が緩和されたこともあり、外来受診者数も増加傾向です。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院の特徴と強みを活かした外来診療を発信してまいります。

教育面です。昨年から引き続き教育医長の谷山講師のもと、教育企画委員の徳増助教を中心に指導を行っています。医学科4年次生を対象とした総合診療医学は今年も盛況で、総合診療領域のニーズの高さを改めて感じています。専門医制度関連では、当科では内科専攻医12名、総合診療専攻医5名が大学病院および連携施設で研修を行っています。

研究面です。リサーチ／ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。COVID-19の影響でWEB開催が多かった学会活動ですが、次第に現地開催もされるようになり、第33回間脳・下垂体・副腎系研究会（4月）、第119回日本内科学会学術総会（4月）、第126回内科学会

中国地方会（5月）、第65回日本糖尿病学会年次学術集会（5月）、第95回日本内分泌学会学術総会（6月）、第64回日本老年医学会学術集会（6月）、第13回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（6月）、第18回日本疲労学会総会・学術集会（6月）、ENDO（6月）、第54回日本医学教育学会（8月）、第25回日本病院総合診療医学会学術総会（8月）、AMEE（8月）、と多くの学会・研究会で学術発表を継続しています。

受賞・専門医取得状況です。小比賀講師が令和4年度ダイバーシティ推進本部「女性研究者派遣事業」助成金、赤穂助教が科学研究費（若手研究）および武田科学振興財団（医学系研究助成）を獲得しました。また本多助教が内分泌代謝・糖尿病内科領域指導医、高橋美砂医師・高瀬助教が新制度の内科専門医に認定されました。赤澤医師（大学院生）は2022年内科学会総会ことはじめにて優秀演題賞を受賞しています。

人事面では、令和4年より赤磐総合診療医学講座が開講し、瀧隆宏講師、福安悠介助教が着任しました。大國皓平医師（前住地：虎の門病院）が国際診療支援センターの助教（4月）、山本紘一郎医師が研究助教（5月：新規設置されたポスト）、大塚勇輝医師が県北西部（新見）総合診療医学講座の助教（4月）、高瀬了輔が瀬戸内（まるとめ）総合診療医学講座の助教（4月）に着任しました。大村大輔助教は高齢者総合医療講座（三朝）の任を終え7月より病院助教に、長谷川徹助教は4月より地域医療人材育成講座の助教に異動となりました。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしくお願い致します。（萩谷 記）

循環器内科学

令和4年4月から令和4年8月までの教室だよりをお届けします。

伊藤浩教授をはじめ教室員一同、臨床・教育・研究・学会活動を精力的に行っています。

人事ですが、令和4年4月に岡山市市民病院の辻真弘、香川労災病院の西部倫之、鳥取市立病院の中村悠大、7月に福山市市民病院の吉田優が帰局しました。また大学からは松尾直昭が川崎医療センター、卜部力が岡山ろうさい病院、横濱ふみが岡山医療センター、西本隆史が細木病院、難波悠介が岡山市市民病院へ異動となりました。また7月から市川啓之がHarbor UCLA-medical centerに留学しました。

学会・研究会活動ですが、令和4年3月に第86回日本循環器学会学術集会が伊藤教授を大会長として開催されました。直前まで現地開催（神戸）の予定でしたが、コロナ第6波のため完全オンラインでの開催を余儀なくされました。しかしながら、オンラインならではの趣向を凝らした企画もあり、参加人数はこれまでと変わりなく盛況のうちに終了しました。この場を借りてお礼申し上げます。

最後に教室の実務ですが、医局長に赤木達、病棟医長に高谷陽一、外来医長に三好亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っています。引き続き各診療科および地域の先生方にご協力いた

だきながら、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思います。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。（赤木 記）

心臓血管外科学

2022年4月から2022年8月の教室の動きをご報告いたします。

2017年に笠原真悟医師が第3代教授に就任し、この8月で5年になりました。連携各科のご協力により、診療実績は安定しております。この場をお借りして各部署様に感謝を申し上げたいと存じます。人事面では、衛藤弘城医師が3月末で退職、奥山倫弘医師が2022年4月より香川県立中央病院に異動しました。これに伴い迫田直也医師が助教となりました。また、山内悠輔医師はツカザキ病院に赴任しました。外科後期研修のローテーションで大学に来ていた小川達也医師は、岩国医療センターに赴任となりました。井上善紀医師は岡山医療センターから帰局し、大学院生となりました。また高尾賢一朗医師は、外科後期研修のローテーションで4月から半年間勤務しております。

臨床面では、小児及び成人先天性心疾患部門は笠原真悟教授をはじめとして、黒子洋介医師、川畑拓也医師、小林純子医師、小谷恭弘の5名のスタッフで診療を行っています。廣田真規医師と迫田直也医師が担当する成人心臓・血管外科領域では、特に大動脈疾患の県の拠点病院に指定され、24時間365日対応できる体制を取っています。引き続き関係各科の皆様にはご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、6人の大学院生が14件の文科省科研費のもと、積極的に活動をしています。本年度は、AMED令和4年度移植医療技術開発研究事業に、「臨床応用を目指したマージナルドナー及び心停止ドナーからの心臓移植に関する研究」が採択され、代表者の小谷恭弘を中心に、3年間の研究が開始となりました。本研究では臓器保存を目的とした機器開発と共に、心停止ドナーからの移植に関する倫理的な問題点を探求する予定です。岡山大学の関係者の皆様におかれましては今後ともご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

現在、教室からは7人が海外で活躍しております。甲元拓志医師はMedical College of Wisconsin、本浄修己医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで、また大崎悟医師はUniversity of Madisonでスタッフとして10年以上にわたり活躍されています。また、石神修大医師はclinical fellowとしてRoyal Children Hospital, Melbourneで、門脇幸子医師（clinical fellow）、小林泰幸医師（research fellow）はThe Hospital for Sick Children, Torontoで研鑽中であり、木佐森永理医師は7月より、米国ワシントンDCにあるChildren's National Hospitalでclinical fellowとして勤務しております。

藤井泰宏医師が2021年1月にAMEDに出向して1年半が経ちました。来年3月までAMED勤務予定となっております。

今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますよ

うお願い申し上げます。

(小谷 記)

脳神経内科学

科長代理山下徹准教授は、引き続き世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野での発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。さらに、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動において中心的役割を果たしています。

人事面では、昨年入局の中田有美が今年度も病棟業務を精力的にこなし、数多くの難しい症例の診療を担当し活躍しております。松岡千加は広島市民病院、平祐貴は香川県中病院において内科専攻医ローテート中です。スタッフ業務については、医局長は森原隆太が、教育医長は中野由美子が、病棟医長は柚木太淳が、外来医長は武本麻美がそれぞれ担当しています。

臨床面では、このコロナ禍にも関わらず病棟診療においては年間入院患者数400名を超え、様々な神経内科疾患の診療を担当しています。一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、脳神経内科独自の外来検査を導入、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法に加え、Muse細胞静脈投与治療の治験を新たに開始するなど新しい治療法開発に積極的に取り組んでいます。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けてさらなる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では脳虚血グループ、変性疾患/認知症グループ共に多くの論文が出版され、国内・海外での学会発表も活発に行われました。ALSについては、2020年9月に岡山大学脳神経内科と東北大学の共同研究で、新しい幹細胞であるMuse細胞静注投与することでモデルマウスの治療効果を見出したことを発表し、国内外から注目を集めています。脳卒中については、超音波を用いた新しい脳血栓溶解療法を2022年7月に発表し、これを発展して新規治療法を開発すべく研究中です。今後とも何卒宜しくお願いします。(森原 記)

救命救急・災害医学

岡山県の地域高度医療の最後の砦として、昨年8月より病院を挙げて救急患者を積極的に応需する方針となり1年が経過しました。Withコロナ時代の中、搬送困難となる症例の応需も含めて、地域貢献の期待に少しでも応えたいと考えています。各専門診療科や地域の先生方には多大なるご協力を賜り、この場を借りて深謝申し上げます。

臨床面では多発外傷、院外心停止、急性中毒、重症小児、敗血症など多岐に渡り初期診療から重症患者の入院管理を行って

います。

学会関連では中尾教授が第38回日本救急医学会中国四国地方会の大会長を務め、ハイブリッド形式で盛大に執り行われました。

人事面では病棟医長として奮闘した藤崎が4月に広島市立市民病院の救急科部長として、7月には災害医療や岡山県下のCOVID-19の対応に勤しんだ山田が兵庫医科大学救急科の准教授としてそれぞれ赴任しました。4月からは新たに3名の後期研修医の他、若手の本郷、平岡が、更に7月からは飯田が加わり活気溢れる教室となっています。更に4月からは有井、谷口と2名の病院救急救命士が採用され、救急救命士の活躍の場が広がっています。

研究面では、本郷らの研究成果が救急集中治療領域で権威あるCritical Care誌に掲載されました。また、准教授の内藤を研究責任者とする中等症の院外心停止蘇生後の患者を対象とした低体温と常温治療を比較する多施設無作為化比較試験が開始となりました。また、国のデジタル田園健康特区に選定された吉備中央町と本学が連携し、上田助教らを中心に救急患者の超音波検査などの情報を取得・伝送する革新的なシステム構築のプロジェクトが進行中です。

救急搬送数の増加は学生・研修医教育の面でも大きく役立っており、シミュレーターを用いたトレーニングと合わせて幅広く救急医学の教育に取り組んでいます。

最後になりましたが、今後とも地域救急医療の拠点としての役割を果たすべく、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。(湯本 記)

形成再建外科学

2022年度前期の近況についてご報告致します。

教室人事では、品岡玲がむくみを科学する先進リンパ学講座特任教授として就任致しました。また、松本洋が講師へ、北口陽平及び太田智之が研究助教へ就任致しました。その他、4月より栗山修平、永廣楓が帰局し、向井裕子が岡山労災病院へ、藤本沙里が岡山赤十字病院へ異動となっております。国内留学につきましては、駒越翔が血管奇形の治療を学ぶべく斗南病院へ留学し、東北大学病院の今井利郎先生が性同一性障害を学ぶべく当科へ来られる予定となっております。大学院博士課程には、内田達也が入学致しました。新入局員につきましては、7名を新たに迎え入れました。

臨床においては、COVID-19の影響を感じる中で各連携部門との再建手術を含め診療体制の維持に努めて参りました。頭頸部再建、性同一性障害、リンパ浮腫、乳房再建、小児先天性疾患、血管奇形などの領域で、多くの各周辺医療機関、各連携部門の皆様のご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

学生教育については、臨床実習内容を見直し、創傷外科としての基本的な知識の指導に注力させていただいております。また以前より取り組んでいたビジュアルアート教育は、デッサン教室・岡山県立美術館でのアート鑑賞を基に継続していく予定としておりますが、この取り組みについて、産経新聞（中四国版、令和4年6月14日）に取り上げられ、主任教授・木股敬裕

のインタビュー記事が紹介されました。

研究では、基盤B、C、若手研究など複数の科研費を獲得し、多くの最先端の研究を行っています。また、本年度は10月に日本形成外科学会基礎学術集会を主催する予定としており、多くの参加者と活発な議論が行われるよう尽力する所存です。

我々は、今後も最先端の医療の開発、人材の育成を目指し、研鑽を重ねて参ります。同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

(内田 記)

老年医学

老年医学分野の令和4年3月以降の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19(2007)年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証(岡山大学成果)および解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム(JAEA成果)を双方の成果として得ることを目的としています。令和4(2022)年度、学会・研究会(日本原子力学会2022年春の年会、第75回日本酸化ストレス学会学術集会、第59回アイソトープ・放射線研究発表会)でその成果を発表いたしました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29(2017)年度より開講した大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」も6年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行っています。

新型コロナウイルスの感染拡大は、研究、教育、診療に影響をきたしていますが、ITツールなどを駆使しながら、少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしく申し上げます。(光延 記)

臨床遺伝子医療学

臨床遺伝子医療学分野の2022年度上半期の活動報告をさせていただきます。

今期、遺伝外来では、各専門診療科の臨床遺伝専門医の先生方をはじめとする皆様のご参画のもと、遺伝性腫瘍外来枠を拡充しました。遺伝性大腸癌外来では、消化器全般を扱う遺伝性腫瘍外来へと名称変更しました。小児遺伝外来、周産期遺伝外来では、小児神経科、小児科、産婦人科の各専門診療科の皆様のご支援のもと運営しています。遺伝性難聴外来では、耳鼻咽喉科の皆様のご支援のもと一層の充実を図っています。遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)診療では、乳腺・内分泌外科、婦人科、消化器内科、泌尿器科をはじめとする各専門診療科の皆様との連携を深めながら実践を重ねています。

人事面では、河内麻里子(助教)が呼吸器・乳腺内分泌外科学教室に帰室となりました。大学院博士課程には今年度、3名

の入学者を迎えました。永谷たみ(姫路赤十字病院 臨床検査技師)、井浦文香(武蔵野赤十字病院 産婦人科医師)、柳田絵美衣(慶應義塾大学病院 臨床検査技師)が社会人大学院生として入学しました。これまでの実務経験や専門性など各人の強みを生かした研究テーマに取り組んでいます。

がんゲノム医療外来とエキスパートパネルでは、引き続き院内内外から多くのご紹介をいただき継続して実績を重ねています。今後の全ゲノム解析の次なるステージに向けた準備をゲノム医療総合推進センターと協働で開始しています。

病院全体としての取り組みでは、今年度より立ち上げられた遺伝子関連検査に関する院内ワーキンググループに参画し、匿名化が慣例であった遺伝子関連検査に潜在するインシデント対策や医療安全管理について、院内の関係するほぼすべての部署の皆様と改善に向けた協働を行っています。

研究面では、多機関共同研究の中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究の代表施設として研究体制の拡充を継続しています。参加施設は今期で38施設となりました。多施設共同で運営する遺伝性腫瘍エキスパートパネルの回数を毎月1回の開催に増やし、各施設で苦慮するケースの共有や相互の一層のレベル向上を図っています。

今期は、第7回クリニカルバイオバンク学会シンポジウムを当分野教授の平沢晃が大会長として岡山市内で開催しました。昨今のコロナ禍のちょうど合間のタイミングで現地とオンデマンド配信のハイブリッド形式で開催することができました。現地参加約160名、登録約200名の盛会となりました。

教育面では、教養教育での講義「ゲノム医療入門」を1学期(4月~6月)に開講しました。当院認定遺伝カウンセラー®の二川摩周、十川麗美、加藤美乃をはじめ、当院ゲノム医療総合推進センター准教授の富田秀太先生にもご参画いただき、津島キャンパスでの授業を開講しました。

ゲノム医療では、全ゲノム解析の新たなステージに入ろうとしています。職種・診療科・部門を超えた横断的な取り組みと強化が一層重要となってきております。多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力をいただいております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、宜しく申し上げます。(山本 記)

薬剤部

人事関係では、4月1日付で濱野裕章講師が徳島大学病院臨床試験センターより着任した。また、4月1日付で3名の薬剤師を採用した。一方、今期は4名の薬剤師が退職となった。6月30日付で退職された宮本理史薬剤師は7月1日付で臨床薬理学の博士課程に進学した。現在は研究活動に専念し、精力的に活動している。

業務関係ではなかなか落ち着きを見せないCOVID-19感染拡大に伴い、部員一同感染予防に努め、適宜対応している。地域連携の推進のため、地域保険薬局薬剤師の研修施設としても認可され、感染防止に注意しながら、当院独自の研修カリキュラムによる1名の保険薬局薬剤師の研修を受け入れ、教育活動も積極的に行っている。

学会活動として、2022 Forbidden City International Pharmacist Conference、第14回日本がん薬剤学会学術大会、第15回日本緩和医療薬学会年会、第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会、第5回日本病院薬剤師会などにおいて研究成果のシンポジウム・講演を行った。また、牛尾聡一郎特任助教が岡大ピッチコンテスト2022において最優秀賞を受賞し、西原茂樹薬剤師、東恩納司薬剤師が岡山大学病院長表彰「楷の木賞特別賞」を受賞した。科学研究費補助金では、濱野裕章講師、牛尾聡一郎特任助教が若手研究に、河崎陽一薬剤師が基盤研究(C)に、岩田直大、蔵田靖子、白水翔也の各薬剤師の研究が奨励研究に採択された。くわえて、座間味義人教授の研究が持田記念研究助成および武田科学振興財団研究助成に採択された。学術論文として、2022年は英文原著論文に13報、和文原著1報の研究成果を発表した。

教育関係では、昨年度から薬学部5年次の長期実務実習を再開しており、令和4年度第Ⅱ期(5月23日～8月5日)16名(岡山大学薬学部)を受け入れた。(濱野 記)

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設です。今期の活動について紹介します。

今年度前期の全学新規教育訓練は4月19-21日と6月7-9日に実施しました。新型コロナウイルス感染症の影響により、ここ数年、外国人の受講者が激減しており、今年度も4月開催分で外国人向けの日程は受講希望者がいなかったため中止となりました。今後は海外交流も徐々に再開してくるため、受講者の回復が見込まれます。教育訓練については一定数の受講希望者がある場合には随時受け付けを行っていますのでお声かけください。

6月29日から6週の間、医学部医学科の「基礎放射線学」の講義ならびに実習を担当しました。100名超の受講生を4グループに分け、それぞれ講義、実習、自宅学習の3つのコースをローテーションで受講します。講義は寺東が、実習は花房准教授と永松、今田、磯辺3名の技術職員が分担して対応しました。このコースローテーションは3年前の新型コロナウイルス感染症の拡大により、一度に集まる受講生の人数を減らすために導入したもので、この3年間も全て対面で実施しています。医学部医学科との取り決めにより本授業は新規放射線業務従事者教育訓練を兼ねており、この授業を受講することにより、新規教育訓練を受講する必要がなくなりますので、医学部生には必修ではありませんが受講を勧奨しています。当施設ではこの講義以外に医学部保健学科の講義ならびに実習に対する支援を行っています。

7月14日には放射線施設の定期検査・定期確認を受けました。当施設は3年ごとに受ける必要があり、2名の検査官が帳簿等の確認と施設の調査を行いました。今回も特に指摘事項はなく、放射線施設として正しく運用されていることが示されて安堵しています。今後も施設スタッフ一同で安全なRI施設運営を行っていきます。利用者の皆様のご協力よろしくお願ひ致します。

(寺東 記)

動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、教育活動として、令和3年6月および8・9月に、初心者向けマウス/ラット実技講習会の定期講習会を開催した。のべ36名の学内研究者、および、学外者1名の参加があった。今年度は、これまで年2回だった開催回数を年5回に増やし講習会開催を予定しており、ぜひこの機会にご参加を検討いただきたい。また、一昨年・昨年と当部門が制作に携わった、国立大学法人動物実験施設協議会の教育用動画(マウス、ラット、およびウサギの実験手技動画34本)を、以前より動物実験手技動画公開用として運用しているMicrosoft Streamの視聴グループに追加した。すでに公開している17本の実験手技動画と併せ、ご活用いただければ幸いです。

その他教育活動として、広島アニマルケア専門学校より6月に5名、8月に3名の学生を、千葉科学大学より8月に1名の学生を受け入れ、2週間のインターン実習を行った。また、マウス・ラットを対象とした上級レベルの講習会として、マウス・ラット上級技術講習会(一般社団法人日本実験動物技術者協会関西支部との共催)を7月30、31日に鹿田施設多目的研修室およびメインウェットラボ室で開催した。(平山 記)

卒後臨床研修センター 医科研修部門

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の皆様、日頃より大変お世話になっております。

本年4月に岡山大学病院は34名の新研修医を迎えました。今年の1年目研修医は卒前の臨床実習や病院見学がコロナ禍により大きく影響を受け、卒業・就職に当たって必ずしも十分に準備できなかった学年です。初期研修では、当院ならびに協力型病院・施設において、その分を取り返す勢いで研修に励んでいただけるよう、前田病院長(センター長)、伊野医科研修部門長、指導医・卒研スタッフならびに36名の2年目研修医とともに全力で支援しています。また次年度のマッチング試験(定員44名)には134名(昨年度110名)の応募があり、8月に育休から復帰した大川七子副部門長も加わって、4日間の採用試験をオンラインで実施しました。

当院の研修プログラムは、その魅力として「①多数の協力型病院」と「②オーダーメイド研修」ならびに「③科学の視点をもつ臨床医の育成」を掲げており、本年6月のオープンホスピタルでは、学内外の医学生60名に当院プログラムの特色を説明しました。また2年目を中心とした研修医の学術活動への挑戦には特に目を見張るものがあり、今年度前半だけで延べ10名の研修医が国内外の学会に参加し、オンラインもしくはオンラインで発表を行いました。併せて、2年目の川邊研修医と副島研修医がそれぞれ筆頭者であるケースレポートが2本、同じく2年目の環研修医が共著者のケースレポートが1本アクセプトされました。これもひとえに、当院のみならず各協力型臨床研修病院・施設の指導医の先生方による熱意溢れる素晴らしいご指導の賜物と考えており、心から感謝申し上げる次第です。

今後もより高い次元で社会のニーズに応える優れた医師を育

成・輩出し、岡山大学病院でのリサーチマインドに富む研修の魅力为全国の医学生・研修医に周知してまいります。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。
(佐藤 記)

運動器知能化システム開発講座

運動器知能化システム開発講座は、設立11年目を迎えました。スタッフは2022年3月に宮澤慎一准教授の福山医療センターへの転勤に伴い、2022年4月より鉄永智紀（准教授）、齋藤太一（助教）の2名で活動を行っております。これまで当講座にて開発してきました人工股関節置換術における国産の手術支援ナビゲーションシステムが本年より臨床使用可能となりました。これまでに一般使用可能となっている海外製品と比較しても遜色ない優れた正確性があることをこれまで学会等にて報告してきました。引き続きこのナビゲーションシステムを臨床使用しながら、有用性について国内外に発信していく予定です。また、基礎的研究としまして股関節唇に対するメカニカルストレスにおける応答の研究を行っております。股関節痛の痛みの原因の一つである股関節唇の詳細な研究により、保存的治療の選択肢が増えるように今後も研究を続けていく予定です。

学会活動は、日本整形外科学会、日本人工関節学会、日本股関節学会などで成人股関節や人工股関節置換術についての研究成果を発表しました。また、日本小児整形外科学会や日本小児股関節研究会にて小児股関節についての臨床研究の発表も行いました。COVID-19の影響もあり海外に行つての学会発表はできませんでしたが、ハイブリッド開催された13th Combined Meeting of Asia Pacific Spine Society and Asia Pacific Paediatric Orthopaedic Society 2021にて発表を行いました。さらに、国内で行われました講演会やセミナーにおいて講師や座長を務めました。

今後とも産学連携および臨床現場で必要な医療技術を構築し、実践的な運動器医療を提供できるように精進する所存であります。同門の諸先生方には、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。
(鉄永 記)

先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行うことを目的として開講致しました。今年で12年目を迎え、現時点で令和8年度までの継続が決まっています。スタッフは、森田（教授）、西井（准教授）で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。研究では、重症不整脈、心臓突然死、遺伝性不整脈疾患、先天性心疾患に伴う不整脈、心臓植込み型デバイスやその遠隔モニタリングに関連した研究を行っています。多施設研究として、岡大関連病院に参加して頂き、植込みデバイス、不整脈診療の新たな研究も進めています。デバイス植込み症例の増加とともに、日々の解析データが膨大となり、時間を要するようになっており、本学工学部の先生方も協力し、AIを用いた自動解析の開発を行い、異常をより

効率よく見いだす方法について検討を始めました。今年の3月には当講座の母講座である循環器内科学講座の伊藤教授が日本循環器学会会長をされ、我々も学会準備、シンポジウム・プレナリーセッションの企画・座長・発表等、積極的に参加させて頂きました。オンライン学会とはなりましたが、非常に盛況に終わることができました。西井准教授が発表したAIによる遠隔モニタリングデータの不整脈判読の研究は日本循環器学会のFeatured Research Sessionの優秀演題に選出されました。6月には不整脈心電学会が横浜で開催され、循環器内科との合同の研究等の発表を精力的に行いました。臨床的には心臓植込みデバイスの遠隔モニタリングは日常でも活用し、デバイス障害、重症不整脈発生、心不全早期発見に役立て、早めの対処が可能となっています。今後、新しい植込み型除細動器システムを早期に導入することが決まっています。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の川田先生、宮本先生、上岡先生、水野先生、増田先生、浅田先生、中川先生や小児科の重光先生など多くの先生方、メディカルスタッフの方々にもご協力頂いており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後も臨床研究を進展させ、世界に向けエビデンスの発信を続けていく所存です。COVID-19の流行が早期にコントロールされ、臨床・研究などで多くの方々とは直接ディスカッションし、協力できる日が来ることを祈念しております。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。
(森田 記)

CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置、さらに2019（令和元）年11月からもう3年の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。今年度が最終年度となりました。

内田は、引き続きNPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事を務め、2022年4月からは岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部会長を拝命しております。また今年度から新たに始まった厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく対策の進捗管理および新たな対策の提言に資するエビデンス構築」研究班および厚生労働省科学研究費「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）対策の推進に資する研究」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田は循環器内科の医局長の任期を2022年3月で終えました。

COVID-19はいまだ続いていますが、岡山県内各地で様々な活動を行っています。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを2022年8月にハイブリッド開催しました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体

との連携に関しましては、これまでの岡山市、美作市、矢掛町、笠岡市、井原市、新見市、瀬戸内市、津山市に加え今年度は新たに総社市、高梁市、玉野市などのCKD対策事業を援助しています。さらには薬剤師、管理栄養士など腎臓病療養指導にあたるメディカルスタッフとの多職種連携を強力に推進しております。

研究活動ですが、臨床研究としてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）の解析を行い順次報告予定です。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。（内田 記）

救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院による寄付講座です。現在、当講座は山本、飯田の教室員2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤んでおります。2名共に高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典センター長のもと岡山県の救命救急医療の最後の砦として重症外傷を含む救急患者の受け入れに努めております。

臨床面では、関係各科と協力しながら大学病院に集約しやすい多発外傷、重症頭部外傷、重度の四肢・骨盤骨折などの重症外傷、重症小児症例、院外心停止などを多く診療しております。各専門診療科の先生方には、初期診療あるいは集中治療管理後の継続診療も含めまして多大なご協力をいただいております。この場を借りて深謝申し上げます。また、スムーズな病床運営のためには、空床確保が必須である中、地域の病院の先生方には全身状態が安定した患者の迅速な受け入れを快諾いただき改めて御礼申し上げます。教育面では、学生、若手医師、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおり、授業や実習、勉強会を通じて学内、院内や地域の救急医療の質向上に貢献しています。山本は日本小児科学会の小児初期対応コース（JPLS）講師、またJPLS委員としても活発に活動しており、最近では島根大学、鳥取大学、九州大学に講師として出向いています。研究面では、水素・ラットの小腸を用いた基礎研究を行っており国内外の学会で積極的に発表し、論文数も着々と増えていきます。

最後になりましたが、当講座は2022年10月末をもちまして寄付講座として終了する予定となっております。講座開講からこれまで8年間にわたり多くの関係者皆様のお力添えをいただきましたこと、心より感謝申し上げます。今後とも県下の救急医療、小児を含む外傷診療の拠点としての役割を果たすべく、皆様には御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

（飯田 記）

運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に関する新規治療の開発を目的とし、開設8年目を迎えました。現在、運動器外傷に対する臨床研究および基礎研究を積極的に行っています。岡山県だけでなく、中四国および全国の外傷治療の促進に取り組んでいます。スタッフは中田英二（准教授）、依光正則（講師）の2名です。

臨床では、救急部と連携し、多発外傷や高エネルギー外傷など重度外傷や、骨盤骨折・寛骨臼骨折、偽関節など、他院で治療に難渋している症例を当院に受け入れ、治療を行っています。基礎研究では、大学院生を指導し、組織機能修復学講座（宝田教授）と連携し、iPS細胞を用いた骨欠損の組織再生などに取り組んでいます。また、学会活動としては、日本骨折治療学会を中心として多くの学会で積極的に発表を行っています。

今後とも先生方の御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（中田 記）

地域救急・災害医療学講座

中尾篤典教授兼任のもと、本年6月より上田浩平が本講座に所属となり、上原・上田の助教2名により運営しています。

Withコロナにおいても地域救急医療の最後の砦としての役割を果たすべく、重症症例に限らず、発熱や呼吸困難などを含めた搬送困難となり得る症例を広く積極的に受け入れております。各専門診療科の先生方には、初期診療、集中治療管理後の継続診療も含め、様々な場面で多大なご協力をいただいております。この場を借りて深謝申し上げます。また、スムーズな病床運営のためには、空床確保が必須である中、地域の病院の先生方には全身状態が安定した患者の迅速な受け入れを快諾いただき改めて御礼申し上げます。

臨床面では関係各科と協力しながら重症COVID-19患者の診療、また大学病院に集約しやすい多発外傷、重症頭部外傷、重度の四肢・骨盤骨折などの重症外傷、重症小児症例、院外心停止などを多く診療しております。研究面では外傷、心停止、集中治療に関連する臨床研究、また敗血症に関連する基礎研究に従事し、教育面でも救急隊との定期的な勉強会や院内の心肺蘇生の講義など幅広く取り組んでいます。

さらに、本年度より当院ドクターカーが運用開始となりました。ECMOなどの医療機器が必要な重症患者を安全に搬送できる体制を整えております。

今後とも地域救急医療を支えるべく邁進していく所存でありますので、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。（上原 記）

岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学への連携によって開講している講座です。開講6年目を迎え、引き続き玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

地方独立行政法人玉野医療センターの一翼を担う玉野市民病

院において、引き続き内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・医院・診療所と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学（漢方医学）領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。訪問診療にも引き続き参加し、地域医療を実務で支える機会となっております。

同病院では内科専門医を目指す専攻医の受け入れが引き続き行われており、その指導にも携わりました。また、地域医療体験実習（3年生）を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員が実習指導に加わるとともにその評価も行いました。医療現場を肌で感じることでできる実習であり、学習意欲の向上や目指す医師像の形成につながるなど貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。新型コロナウイルス流行が続く中、専攻医・実習生の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では、総合内科・総合診療科においてこれまで同様に学生の臨床実習を担当いたしました。基本実習では全ての学生に伝統医学的診療を体験する実習を行い、選択実習において総合内科・総合診療科を選択した学生には、より深く伝統医学に触れられるような実習を継続しております。そして、伝統医学の卒前ならびに卒後・生涯教育の機会として定期的に勉強会を開催し、その普及に努めました。（植田 記）

岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座

いつも同窓会の皆様方には大変お世話になっております。当講座の現況につきましてご報告させていただきます。人事に関しましては、引き続き、山崎辰洋助教と堀口で業務にあたっております。

診療面では、当講座医師で健診業務の拡充、多様化する内視鏡業務への対応、救急も含めた外来業務に従事しております。健診結果の丁寧な説明と主治医との連携によりCOVID-19蔓延下で減少傾向であった健診件数は徐々に増加しています。内視鏡件数も増加してきており、安全・丁寧な検査と他院との連携に取り組んでおります。岡山大学病院 総合内科と藤井病院からの応援をいただき救急、外来、入院業務の充実に努めています。近隣の医療機関の先生方におかれましては引き続き病病連携、病診連携をお願い申し上げます。常勤スタッフ、寄付講座医師、応援医師がワンチームとなり、岡山県南西部地区の医療の下支えをしてまいりたいと思います。

教育については当講座前任の小川弘子教授の在任時より卒前・卒後教育に特に力を入れています。岡山大学医学部より、早期地域医療体験実習（1年生）、地域医療体験実習（3年生）を受け入れ地域医療学習の場を提供しています。当地区は高齢化が進んでおり、現実の医療現場の状況を見て、聞いて、触って、学んでいただいております。また、初期臨床研修にも力を入れています。複数医師の指導により感染症、悪性腫瘍、心血管系疾患をはじめ多様な疾患の診療経験を積んでいただいております。当病院で初期研修を受けた医師が、研修後に当院への応援医師として活躍しており、よい循環が生まれています。

研究については、総合内科で立案された地域医療現場に即した研究を引き続き行っております。COVID-19に関わるテーマもあり、笠岡市民病院スタッフのモチベーションの向上につながっています。

COVID-19蔓延により、診療・教育・研究の各方面において困難を経験することもございますが、引き続き岡山大学病院総合内科と連携しつつ岡山県南西部の医療を盛り上げてまいりたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

（堀口 記）

高齢者救急医療学講座

本講座は2017年11月に井原市の寄付講座として開講し、井原市の高齢者救急医療について研究し、高齢化社会に突入した日本の救急医療の課題について研究してきました。研究内容は井原市民病院だよりや市民講座を通して、井原市民に還元してまいりました。この講座は2022年10月をもって終講となります。

わずかな時間ではありますが、それまでの研究結果を総括し、地域における救急医療として高齢化社会に適応しながらも、未来を担う周産期・小児の医療をいかに維持するか、という次の課題に取り組もうと思っております。小児と子育て世代である20代、30代をサポートできる救急医療体制の強化について研究していきます。

その中で、救急医療体制のIT化・遠隔サポートシステムの充実を通して、判断が難しい症例に対しては中央の医療機関が助言や転院調整の仲介などを行える体制強化の必要性について提言し、消防局との協力体制の強化と市民・医療スタッフへの啓蒙活動を進めていきたいと思っております。

今後とも、何卒お力添えの程宜しく願い申し上げます。同窓・同門の諸先生方には引き続き御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（青景 記）

瀬戸内（まるとめ）総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるとめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座で、開講から3年半になろうとしています。准教授1名（萩谷）・助教2名（岡・高瀬）の体制で、外来診療を中心に丸亀の地域医療の一端をサポートしています。

令和4年4月より内科専攻医プログラム在籍中の田中秀一医師が常勤医として勤務をはじめ、これまでにない活気をもたらしています。診療科を問わない総合診療のスタイルで外来・病棟の患者さんの診療にあたる中で教育的な症例も多く、講座スタッフのサポートのもと、ケースレポートの執筆にも積極的に取り組んでいます。また、各科常勤医の指導もあり、連携施設として付加的な経験も多数してもらっています。研修施設として初期研修医・内科／総合診療専攻医にとって良い病院になってきていると思いますので、若手医師には是非まるとめ医療センターでの研修を選択していただきたいと思っております。

また、今後のアウトバウンド増加によって需要が増える渡航前ワクチン接種にも対応できるよう、7月から萩谷が中心と

なって渡航ワクチン外来を開設しました。

当講座では、今後もまるがめ医療センターを中心とした中讃地域における地域医療の実践を基盤としながら、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ（学位・専門医取得）を実現する体制を構築することを目指して活動してまいります。

（萩谷 記）

災害医療マネジメント学講座

平素、ご指導とご助力を賜りまして、大変感謝いたしております。

当講座は、鳥取市の寄附講座として2018年7月より開講いたしております。

現在、講座には、医師、薬剤師、臨床工学技士の資格を持つ3名の教員が配置されております。講座教員は、各専門分野の視点で岡山県下の災害医療に関連する行事、講義などに参加する機会をいただいております。

2020年から2年間、岡山県受託事業「岡山県地域医療BCP構築事業」の取りまとめをさせていただき、岡山県下の医療機関とともに本事業を進めることができました。南海トラフ地震では、岡山県下の被害対応のみならず四国からの避難者の受け入れも想定されておりますが、他県からの救援が必ずしも期待できない、と危惧されております。これに対して、地域の災害医療の核となる諸機関や組織との協力関係の構築が「要」となります。当事業では、本同窓の諸兄方々のご協力やご指導をいただきましたことが大きな支えとなりましたことは言うまでもございません。あらためまして、この誌上で恐縮ではございますが、お礼申し上げます。この点は、他の都道府県と違った岡山県の特徴ではないかと存じます。またさらに、このシステムは成長させていく必要がございます。

一方、本年の取組は岡山県医師会、岡山県病院協会のご協力とご指導の下に、岡山赤十字病院とともに地域医療システムBCPの普及、つまりオーダーメイドの「出前出張」災害医療研修会の開催です。開催元と事前に打ち合わせを十分に行之、医療機関や地域の災害医療に対する教育・訓練需要を調査し、そのうえで、実習中心の災害医療研修会を開催するものです。本同窓の諸兄方々の一層のご協力やご指導をいただきますようお願い申し上げます。

令和5年3月には閉講となりますが、ご同窓の皆様方からは一方ならぬご指導を賜りましたことを深謝いたしております。

（中尾博 記）

くらしき総合診療医学教育講座

本講座は、2020年4月に、総合内科学講座と倉敷成人病センターの連携のもと、倉敷エリアにおける地域医療現場での教育・臨床・研究を基盤とし、円滑で持続的な医師・医療人の育成を使命とする寄附講座で、三好智子が准教授として、赤穂宗一郎が助教として、着任しております。

臨床現場での教育活動としては、倉敷成人病センターで、初

期研修医への一般外来研修の指導、初期研修医や専攻医への上下部内視鏡の指導に加え、抄読会・症例検討会や症例報告指導も行っております。岡山大学病院では、学生の総合内科・総合診療科での外来指導・症例発表指導などを担当しております。

学部教育活動としては、人間を全人的により深く理解しようとする行動科学という医学科学年縦断的プログラムを担当し、医学科1～5年生は、心理学・社会学・行動経済学・コミュニケーション・医療倫理・研究倫理・リーダーシップ・チーム医療論・死生観なども共に学んでいます。

生涯教育活動として、岡山大学新任教員FD、夏の医療系学部合同FD「医療現場／教育現場でチームワークが機能するための心理的安全性」のコーディネーターも務めました。

更に、医療と研究を繋げる医療者教育ジャーナルクラブやファイナンシャルセミナーなども開催し、医療者の多角的なスキル獲得を支援しております。

学術活動としては、三好准教授が医学教育学会でジャーナルクラブの意義と高大連携について、日本医学教育学会で発表を行いました。また、コロナ禍における行政職員のストレスに関する論文を投稿しました。赤穂助教は臨床業務と平行し腫瘍に関する基礎研究を行っており、科研費（若手研究）を獲得しております。

本講座は、初期研修医および専攻医の育成、多職種連携教育、臨床研究、医学教育研究などを通し、地域医療に貢献していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

（三好 記）

周産期医療学講座

本講座は、2021年7月に福山市からの寄付で開設され、福山府中二次保健医療圏及び井笠圏域における周産期及び産婦人科医療に関わる医師の育成、効果的な医療提供体制に関する研究、地域住民への普及・啓発を行うことで、将来に亘り持続可能な周産期及び産婦人科医療体制の構築に寄与することを目的とする寄附講座です。長尾昌二先生（教授）、衛藤英理子（講師）の2名が所属しております。

持続可能な周産期医療体制の整備が全国的に求められている中、福山府中二次保健医療圏における産婦人科医師数は全国平均に比して少なく、分娩取り扱い医師数も今後減少する試算が出ています。また、隣接する井笠圏域でも分娩医療機関が少ないことから、ハイリスク妊産婦を圏域内で診療できない状況が発生しております。さらに、同圏域のがん検診受診率は全国平均に比して非常に低く、また、婦人科腫瘍専門医が不在で専門的な医療の提供が十分でない現状が続いています。このような中、周産期母子医療センターを中心とした公的医療機関の分娩機能の充実・効率化による安全・安心に産産できる体制の整備、婦人科腫瘍診療の拡充を通し、圏域における効果的な産婦人科医療体制を構築することが本講座の役目です。また、産婦人科医療提供体制の課題と解決策に係る調査・研究、基幹の病院を実践フィールドとした産婦人科医療を担う医師の育成、産婦人科医療に関する地域住民を対象とした公開講座の実施等に注力して参ります。日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医の長尾教

授により腹腔鏡手術が導入され、婦人科悪性腫瘍手術件数は増加の一途をたどっております。衛藤は日本超音波医学会専門医の資格を活かして、2022年6月より胎児スクリーニング外来を開設しました。長尾教授による市民講座「子宮頸がんにかからないためにできること」のYouTube配信は、多くの市民に聴講されました。

今年も福山府中二次保健医療圏及び井笠圏域への診療支援、市民講座の開催などを予定しています。引き続き当講座に与えられたミッションの実践を継続して参ります。周産期医療学講座をよろしく願いたします。(衛藤 記)

慢性腎不全総合治療学講座

本講座は令和4年4月に医療法人盛全会岡山西大寺病院 小林直哉理事長のお力添えにより開設されました寄附講座です。慢性腎不全・腎代替療法選択支援 (SDM) に関する研究・教育活動、および包括的な腎不全診療の実践を目的としています。

スタッフは森永裕士講師と大西康博助教の2名です。森永はこれまで腹膜透析に関する臨床研究に取り組み、岡山大学病院内での腹膜透析診療や慢性腎臓病チーム医療に中心的に関与しており、国公立大学で運営する腹膜透析レジストリーの運用や日本腎臓病レジストリーの研究協力、また前職の医療情報部では糖尿病・腎臓病に関するデータベース研究に従事してまいりました。大西は慢性腎臓病・慢性腎不全に関する研究活動に取り組み、6月の第65回日本腎臓学会にて「岡山市CKDネットワーク (OCKD-NET) におけるCKD病診連携11年後の追跡調査」の口演発表を行いました。基盤研究 (C) 「IgA腎症における尿中糖鎖異常と病態の解明」の研究代表者であり、慢性腎不全の主な原疾患の一つであるIgA腎症に関する基礎研究、および和田教授の指導にて関連18施設における腎生検症例の前向きコホート (INSPIRE研究) を構築し、症例の集積・解析をすすめています。

また、講座として腎代替療法に関する臨床研究「SDM-Q-9を用いた療法選択の質の評価と腹膜透析選択率の検討」および「腎不全療法選択説明と腹膜透析選択率・緊急導入の検討」を行っており、それぞれ11月に岡山で開催される第28回日本腹膜透析学会にて発表を行う予定です。今後は関連施設とも連携をして、SDMに関連した腎不全コホートを構築してまいります。

末筆となりましたが、今後とも同窓の先生方のご指導・ご鞭撻のほど、よろしく願申し上げます。(大西 記)

赤磐 (あかいわ) 総合診療医学講座

本講座は、2022年4月に赤磐市と総合内科学の連携のもと開設された寄附講座です。赤磐市吉井地域にある赤磐市国民健康保険佐伯北診療所は、地域医療確保において重要な役割を果たして来ましたが、2021年3月に常勤医師が定年を迎えたことで医療の確保が問題となっておりました。この度本講座が開設されたことで、講師1名 (灘)・助教1名 (福安) の体制で、外来診療を主体に佐伯北診療所を中心とした地域医療支援の仕組みが整いました。まだ講座開設から日が浅く、患者引継ぎに多

くのエネルギーを割いてきたところですが、今後は地域医療をサポートしながら、教育・研究を展開する所存です。

国保診療所の後継者不足は全国的な問題となっておりますが、そうした国保診療所を支援する講座は岡山大学では岡山県北西部 (新見) 総合診療医学講座に次いで2番目となります。地域住民、自治体、そして大学の皆様から評価される実績を残すことができれば、地域医療の支援とともに地域の課題解決のためのスキームとして全国に発信できるのではないかと考えております。一所懸命精進して参りますので、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしく願申し上げます。(灘 記)

肝・腎疾患連携推進講座

令和4年4月1日より、医療法人創和会 (しげい病院・重井医学研究所附属病院) を母体として肝・腎疾患連携推進講座が開講致しました。近年、特にC型肝炎治療の進歩に伴い肝硬変・肝癌の原因としてウイルス性慢性肝炎より脂肪性肝疾患の影響が大きくなってきております。慢性肝疾患悪化リスクとしてメタボリックシンドロームが重要になり慢性腎疾患と進行リスクが近接してきました。このような医療環境を鑑みて、肝臓と腎臓両方の視点からメタボリックシンドローム関連臓器障害対策を推進していくことを目的に腎臓透析医療の中核施設であるしげい病院・重井医学研究所附属病院と岡山大学 (消化器・肝臓内科学) の共同研究講座として立ち上げられ、高木章乃夫が特任教授として活動開始しております。

活動目標としてはメタボリックシンドローム関連臓器障害の代表である慢性腎臓病と慢性肝疾患の予防・受診・受療の啓発推進活動と、肝臓と腎臓に病気が併存する疾患である肝腎嚢胞疾患の実態調査としております。啓発活動は生憎のコロナ禍の為、表だった活動が出来ない状況ですが、まずは施設間での肝疾患・腎疾患に関する情報の共有より進めていっております。肝腎嚢胞疾患の実態調査については岡山県医師会透析医部会とも協力の上、アンケート調査の倫理申請を準備中です。

肝疾患と腎疾患を一網打尽に発見、改善していくことに邁進して参ります所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願申し上げます。(高木 記)

むくみを科学する先進リンパ学講座

むくみを科学する先進リンパ学講座は令和4年4月に開講いたしました。本講座はリンパ浮腫をふくめたむくみを科学的に診断・治療することを目指した共同研究講座です。共同研究を行う企業は光イメージングで世界的に有名な浜松ホトニクス株式会社とエアポンプのパイオニアである株式会社テクノ高槻です。スタッフは品岡玲 (特任教授) が専任で担当し、木股敬裕 (形成外科主任教授) が分担者として所属しております。

リンパ浮腫を含めたむくみは、多くの患者に見られる症状ですが、科学的に診断すること、治療することはできていなかったのが現状です。その大きな原因の一つにリンパ系の解剖生理学的な情報が少なかったことがあげられます。岡山大学は解剖体研究から始まり、臨床研究を通じてリンパ系の正常解剖生理、

浮腫時の変化を明らかにしてきました。そのシーズを基に、浜松ホトニクス社の光イメージング技術で世界初のリンパ系の診断装置の作製を目指します。さらにはその診断とダイレクトにつながったエアポンプを用いた本邦初のリンパ流促進装置の作製も同時にすすめてまいります。

また本講座を中心に形成外科と共同で、本学のリンパ浮腫診療を充実させ、全国に先駆けて画像診断と治療を科学的に行う体制の構築を目指し、増える癌サバイバーに福音を届けられるよう取り組んでまいります。

今後とも先生方のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。(品岡 記)

検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。臨床検査技師の退職者はいましたが、退職に伴う補充がなかったため新規採用者はいませんでした。また、古川雅規技師が主任に昇格しました。業務上については、尿検査総合搬送システムおよび便潜血測定装置の更新があり3月25日より稼働しています。働き方改革の一環として中央採血室の受付時間を16時30分から16時15分へ変更し、検査室への検体最終到着時間を早めることができました。そして、中央採血室の採血待ち時間を有効に利用してもらうためにスマートフォンなどで採血待ち状況を確認できるようにYouTubeライブ配信 (<https://www.cc.okayama-u.ac.jp/lab/>) を開始しました。教育関係では、本学保健学科学学生の臨地実習と倉敷芸術科学大学学生、京都大学医学部人間健康科学科学学生、山口大学医学部保健学科検査技術科学学生の検査部見学を受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で3演題発表しました。表彰関係では、大倉真実技師が岡山県臨床検査技師会優秀発表賞を受賞し、春の叙勲では、岡田健前技師長が瑞宝双光章を受章しました。資格関係では、武本梨佳技師が一般社団法人日本心エコー学会認定専門技師の資格を取得しました。

検査部は今後も患者サービスの向上に努めてまいりたいと考えています。今後とも検査部をどうぞよろしくご指導申し上げます。(東影 記)

手術部

同窓会の皆様におかれましては益々ご健勝、ご活躍のことと存じます。

手術部は本年度も手術部長産科婦人科学増山、副部長小児麻酔科岩崎、看護師長水原、副看護師長松村・小林・佐伯・松下・藤井が継続して勤めております。3月に看護師2名が特定行為研修(術中麻酔管理領域)を修了し、計3名となりましたが、体制の準備やCOVID-19感染症の影響で本格的な活躍はもう少し先になりそうです。令和4年度の全国国立大学手術部会議中国・四国ブロック会議は5月に鳥取大学の主管によりメール会議で開催されました。周術期薬剤管理加算や術後疼痛管理チーム加算の現状や展望について意見が交わされました。当院では2015年から多職種によるチームでの術後疼痛ラウンドを開

始しており、ようやく診療報酬が認められた形です。他にも各施設が抱える様々な問題を通じて、現状や課題を共有しました。令和3年度の手術件数は8,957件と2020年度より318件増加してありました。ロボット支援手術も積極的に行われており、令和3年度は、消化管外科、泌尿器科、婦人科、呼吸器外科、肝胆膵外科により401件のダビンチ手術が行われました。令和4年度診療報酬改定に伴い保険適応となるロボット支援手術が増え、当院でも結腸悪性腫瘍手術、肝切除術、総胆管拡張手術が新たに承認され、ロボット手術のさらなる増加が見込まれます。手術枠の増枠に向けて外来手術センターの開設も準備が進められております。今年度は、COVID-19感染症への十分な準備、対応を行いつつ、COVID-19感染症流行以前の数に迫る9,500件を目標として手術室の運営を行っており、順調に件数の増加が見られておりましたが、第7波の影響は大きく、自宅療養・隔離者が増え症例制限を行わざるを得なくなりました。今後もCOVID-19感染症への対応を怠らず十分な手術環境の提供に尽力致します。今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。(岩崎、水原 記)

総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT28名、OT7名、ST4名、看護師1名、クラーク2名(交代制)で日常業務をこなしております。医師は教授1名、講師1名、助教1名、医員2名です。

COVID-19など感染対策のため、外来と入院のリハ時間を分けて行っております。外来リハを中止していた期間もあり、先生方にはご迷惑をおかけしました。

千田教授が大会長である第6回日本リハビリテーション医学会 秋季学術大会は2022年11月4～6日、岡山で開催予定です。テーマはリハビリテーション医学の多様性と包括性(Diversity and Inclusion)です。多職種がそれぞれの職種の専門性を尊重し、包括して患者さんの機能向上に向かって進もうという思いを込めています。700題を超える演題が集まり、現地開催、またはハイブリッド開催に対応できるよう、現在準備を進めております。

日常業務・学生実習などは、3密を避けて、手洗いなど感染防止策を徹底しています。選択実習の医学生や初期研修医がリハ研修(実習)を行っています。全科からリハ紹介をいただいておりますので、どの科を専門にする医学生・研修医にとっても有意義な研修(実習)となるよう努力しています。リハ専攻医は現在他病院で研修中です。リハ専門医不在の総合病院も多くあり、早く専門医が増えることを切に願っております。

スタッフ同士でいつも連絡をしっかりとるよう心がけておりますが、行き届かない点も多々あると思います。お気づきの点がございましたら、お知らせいただくと幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくご指導申し上げます。

(堅山 記)

病理診断科・病理部

柳井広之教授のもと、本年度は田中健大〔病理学(第二)腫

瘍病理)], スタッフ2名(西田賢司、大木知佳)、医員4名の合計8名で業務にあたっています。

人事に関しては、昨年度まで病理部長を勤めていた吉野正教授が退任され、第一/免疫病理の松川昭博教授が就任致しました。また、令和4年4月から岡山赤十字病院より大木知佳が入職し、都地友紘が岡山赤十字病院へ異動しました。

学術・研究面においては、令和4年2月に2年ぶりとなる第10回岡山県がん病理診断実務者研修会を開催しました。例年は他施設のエキスパートの先生をお招きしての講習会ですが、この度は当科の柳井、田中、西田、昨年まで勤務していた都地、岡山大学大学院口腔病理学の中野敬介先生が症例を提示し、日常業務に焦点を当てた発表を行いました。

教育面においては、当科は直接的に患者さんに接触しない環境であるため、コロナ禍の現状においても初期研修医、医学科実習生とも通常に近い形で研修・実習を維持しております。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。(西田 記)

輸 血 部

医師、検査技師、看護師と多職種が在籍する輸血部では、今年度より検査技師の人事に変更がありました。長く輸血検査技師のリーダーを務めた小郷博昭主任に替わり、浅野尚美、池田亮の2名が主任の新体制となりました。輸血検査技師4名の体制はこれまでどおりで、増加する検査数に対応しながら安全な輸血療法の維持を目標に努力して参ります。各診療科、部門の先生方におかれましては引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

医師については、近藤匠が助教(がんプロ)となり輸血部を離れました。新たに谷勝真(6月より)、高須賀裕樹(8月より)の体制で業務を行っています。2019年11月より開始となったキメラ抗原受容体T細胞(CAR-T細胞)療法は本年7月に50症例に達しました。輸血部では、治療の原材料となるリンパ球を患者さんからアフェレーシスし、CPCをお借りしてGMP基準に準じた清潔度での凍結保存を実施しております。末梢血幹細胞採取、自己血貯血など、これまでの業務とともに、最新の治療を患者さんに届けるよう尽力して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。(藤井(伸) 記)

血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田 淳部長(腎・免疫・内分泌代謝内科学教授)のもと、スタッフ医師2名(田邊克幸、岡本修吾)、医員5名(高橋謙作、中島有理、中土井崇人、御船朋代、加納弓月)で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

人事面では4月に当部の講師として診療に従事してこられた木野村賢先生が岡山済生会総合病院へ異動となりました。ますますのご活躍を祈念しております。代わって田邊が講師に昇任

し、岡本修吾が助教に採用されております。また、医員の大西康博は慢性腎不全総合治療学講座の助教となり、後任に中土井崇人が採用されています。御船朋代と加納弓月はキャリア支援枠(医員)として引き続き当部の診療にあたっております。

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、血液透析及びアフェレーシス療法のための血液浄化療法部への受け入れ件数は年間1,600件程度まで大幅に減少致しました。しかし、昨年末以降、関連病院の先生方からの透析患者のご紹介も増加し、今年1月からの受け入れ患者数は以前と同等に近い程度まで回復してきております。一方で、新型コロナウイルス感染症の第7波の到来により、岡山県内でも透析患者の感染者が再び急増しており、当部でも受け入れ患者数が増加しているところに更に感染患者を受け入れることになり、人員的に非常に厳しい状況が続いております。早期に感染者数が減少することを祈るばかりではありますが、何とか非感染の入院患者の血液浄化療法は制限をせずに受け入れられるように対応していきたいと思っております。今後も安全な血液浄化療法を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。

(田邊 記)

光学医療診療部

ことし3月、教授退官にあわせて岡田裕之先生が光学医療診療部長を退任されました。岡田先生には長きにわたり光学医療診療部を牽引していただき、スタッフ一同より感謝申し上げます。

また、岡田先生に加えて長らく内視鏡検査に携わった医師の転勤や、複数の看護師の退職・休職もあり、マンパワー不足の状況で4月を迎えましたが、新しい光学医療診療部長に就任された加藤博也先生のもと、一致団結して診療に励み、皆新しい環境に慣れてきたところです。

コロナ禍での内視鏡診療が始まり2年が過ぎ、感染対策に重点をおいた内視鏡検査にスタッフも慣れてきました。実際の新型コロナウイルス感染に対する内視鏡処置も何度か経験しましたが、シミュレーションの効果もあり、大きな問題なく処置を終えることができました。引き続き万全の感染対策を行いながら内視鏡診療に努めて参ります。

内視鏡検査を施行する際の鎮静につきましても、各グループでのプロトコルも固まり、運用が開始されています。確実に遵守することで過鎮静などの有害事象が減少しており、引き続き鎮静による有害事象0を目指して安全第一に日々検査を行います。

これからも安全・安心・確実な内視鏡診療を目指しスタッフ一同精進して参りますので引き続きご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。(松本 記)

周産母子センター

コロナ禍でわが国の周産期医療が逼迫する中、引き続き当センターには県内外から多数の症例をご紹介いただいております。大

変感謝いたしております。

当センターは合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましても、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分泌）とNICU（新生児集中治療室）部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の衛藤英理子が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、早田 桂講師以下周産期専従医ならびに生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医学教授の指導下に、新生児専従医の鷲尾洋介准教授（小児急性疾患学講座）、渡邊宏和、岡村朋香、森本大作、佐藤剛史を中心に運営しております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、NICU 6床、新生児室12床。4階西病棟に産科（母体）4床がそれぞれ配置されています。NICUが常に満床状態であることは喫緊の課題であり、母体搬送依頼をお受けできないなど、地域の先生方に多大なるご迷惑をお掛けしております。今後の安定した周産期医療の供給のため、NICUおよびGCU（回復期治療室）の拡充準備を引き続き進めて参ります。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。（鎌田 記）

腫瘍センター

当センターでは、田端教授にくわえて、2022年6月より久保医師の後任として榎本が赴任、そして消化管外科より香川准教授が赴任され合計3人体制で、COVID-19流行下におきましても患者様が安心・安全にがん治療を行うことができるよう、各部署からのご協力をいただきながら活動しております。

現在腫瘍センターでは28床の病床で延べ900人／月以上の患者様の外来化学療法を行っております。特定の曜日に患者様が集中していたこともあり、1日の利用枠の調整をさせていただき、おかげさまで曜日によるばらつきも少なくなり、待ち時間の短縮にもつながっているようです。ご協力、誠にありがとうございます。引き続き、感染対策にも十分留意しながら治療を行っていきたく思います。

また、当センターでは標準治療が終了となった患者様を対象とした「遺伝子パネル検査による遺伝子プロファイリングに基づく複数の分子標的治療に関する患者申出療養」も引き続き担当しております。国立がん研究センターが中心となって行っている試験ですが、中国・四国地方では当院が唯一の参加施設で

あり、遠方から多くの患者様をご紹介いただいております。患者申出療養のみならず、希少がんや治療抵抗性となった患者様のがん遺伝子パネル検査を含めた治療の相談なども引き続きお受けしておりますので、是非ご紹介頂けましたら幸いです。

今後も、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など他職種からなるチーム医療を実践していきたいと思っております。診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指して活動を充実させていく所存であります。同窓の先生方におかれましては、今後もご支援とご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（榎本 記）

内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロア、西7階病棟を拠点に内分泌外科・内科スタッフ一丸となって、全身多臓器にわたる種々の内分泌疾患に対して院内関連各科との垣根を越えたスムーズな連携により日々の診療にあたっております。同窓の先生方を始め中四国の数多くの医療機関から内分泌疾患の患者様をご紹介頂き、センターカンファレンスなどの場で活発な意見交換を行いながらチームで取り組むとともに、専門医や学生・研修医教育にも尽力しております。

学会活動では、米国内分泌学会、日本外科学会、日本内分泌学会、日本乳癌学会、ヨーロッパ乳癌カンファレンス、日本臨床腫瘍学会、日本内分泌学会中国地方会、中国四国甲状腺外科研究会、岡山内分泌同好会など、国内外の内分泌代謝領域の学会・研究会において数多くの学会発表を行っております。

人事面では、前センター長で当センター外科部門長の乳腺・内分泌外科診療科長 土井原博義 教授が令和4年3月にご退官され、その後任として当センター外科部門長に4月より新乳腺・内分泌外科診療科長 枝園忠彦 准教授が就任しております。

最後になりましたが、今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。（稲垣 記）

臓器移植医療センター

臓器移植医療センターは、岡山大学病院での臓器移植を集中的に管理・運営することを目的として2011年に設立され、センター長の前田嘉信病院長のもと、3人の副センター長（八木孝仁、豊岡伸一、杉本誠一郎）の体制で、移植医療を円滑に遂行すべく日々業務を行っております。コロナ禍のなか、全国の脳死下臓器提供数は徐々に回復してきており、2022年1～7月の診療実績は肺移植5例（生体1例、脳死4例）、肝移植9例（生体9例）、腎移植4例（生体4例）でした。3月には、以前当院で成功した68歳に次ぐ、国内2番目の高齢者（67歳）に対する生体肺移植に成功いたしました。また6月には、泌尿器科として生体・献腎合わせて150例目の生体腎移植を無事に終えております。

人事面では、2022年1月に橋本好平が呼吸器外科助教に着任

し、2年4カ月間の米国セントルイス・ワシントン大学での研究経験を活かして、肺移植に貢献しています。3月には長年、肝移植を支えてきた当センター助教の吉田一博が異動し、後任として4月から藤智和が助教に着任いたしました。また4月より三重大学肝胆膵・移植外科の早崎碧泉が肝移植の臨床協力医として国内留学中です。腎移植とCMVに関する研究論文で学位を取得した吉永香澄も4月に泌尿器科助教に着任し活躍しています。長年、腎移植を支えてきた移植コーディネーターの山下里美が3月に退職し、後任として石上恵美が腎移植チームに加わりました。こうして新たに加わったメンバーと共に、より一層上のレベルを目指し、各チームが一丸となって移植医療に取り組んでおります。

未だコロナ禍の収束は見えませんが、日本屈指の多臓器の移植施設として移植医療の発展に貢献できるよう活動して参る所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。(杉本 記)

超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され、11年目を迎えました。

大塚文男センター長（総合内科学教授）、大西秀樹副センター長（消化器内科）、高谷陽一助教（循環器内科）のもと、関係各位のご支援・ご協力により、循環器領域・消化器領域の他にも血管領域（頸部、下肢、末梢血管等）や体表領域（乳腺、甲状腺、関節等）など広範囲にわたる超音波検査を行っております。

診療面においては、コロナウイルス感染対策として、検査時のマスクとゴーグルの着用に加えて、新しく各検査室や待合スペースに空気清浄器を設置し、さらに留意しながら、日々検査を施行しています。

研究面においては、日本心エコー図学会のみならず、動脈硬化学会においても積極的に研究発表を行っております。

教育面では、以前より携わっていた講演会などの開催が難しくなりましたが、現地やオンラインにて多くの講演会、研究会を開催しています。

また、大西秀樹副センター長（消化器内科）と杜徳尚助教（循環器内科）が日本超音波医学会超音波指導医を取得されました。

現在、超音波専門医2名、超音波検査士5名（消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域、健診領域）が資格を有し検査技術や知識向上に努めています。また、生理検査室と協力し心電図認定技師2名が超音波検査（循環器領域）の習得に励んでおります。

超音波診断の向上に伴い、臨床現場での検査の需要が大変増加しております。患者様のために質の高い検査を行えるようより一層邁進して参ります。(細川 記)

低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年（2012年）の設立か

ら10年が経過しました。現在は、病院の中央診療施設として運営維持されています。

センター長の藤原俊義教授のもと、消化管外科、肝・胆・膵外科、泌尿器科の専任、兼任スタッフが当院での低侵襲外科手術の推進とそれを担う若手外科医の人材育成のために活動しています。

上半期の人事では、香川俊輔准教授が腫瘍センターに移籍となりましたので、4月より講師の寺石文則が副センター長となり、一層の重責を担っております。また、消化管外科の診療を担当する垣内慶彦が当センターの助教に加わりました。

診療においては、COVID-19の影響で減少していた手術件数は、ほぼ完全に回復しております。手術支援ロボット“ダヴィンチ”による手術は、泌尿器科領域をはじめ食道、胃、直腸、膵臓、縦隔、肺、子宮の各領域において積極的に推進しており、さらに令和4年4月より肝切除および結腸悪性腫瘍手術が適応となったため、保険診療に向けて症例集積中です。現在、ダヴィンチXiとSiの2台を運用しておりますが、Xiの追加購入が確定しており、Xi 2台体制での手術件数増加に対応すべく鋭意準備を進めております。

教育では各スタッフが学部学生、大学院生の講義を担当するとともに、関連施設の若手外科医育成のための教育プログラム（セミナーや研究会）をWebにて開催しました。センター設立当初より継続して内視鏡外科技術認定医の養成を推進しておりますが、今年度は当センターのスタッフより新たに1名の合格者を輩出することができました。引き続き、臨床、研究、教育に尽力して参りますので、なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(寺石 記)

糖尿病センター

当センターでは、岡山県からの受託事業である「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局に加え、平成26年度から「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局、平成31年度からは岡山市より受託しました「岡山市糖尿病・肥満対策事業」の事務局も担当しています。岡山大学病院での糖尿病診療では、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、リアルタイム持続血糖測定器の導入、減量・代謝改善手術等の先進糖尿病治療の推進に取り組んでいます。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内の糖尿病診療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めています。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、中止となっていました「おかやま糖尿病サポーター認定研修会」ですが、令和4年より再開しました。令和4年7月現在で315施設の「糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）」が岡山県知事及び岡山県医師会から認定されており、1,475名の多職種からなる「おかやま糖尿病サポーター」と共に、地域密着型の糖尿病診療・連携体制（「おかやまDMネット」）の構築を推進しています。

また、国策として進められている糖尿病性腎症重症化予防対策に関しましては、岡山県では平成30年3月に「岡山県糖尿病

性腎症重症化予防プログラム（岡山方式）」を策定しました。各市町村毎に取り組みを実施しておりますが、令和3年度から可能な部分については県下統一した形で当該プログラムを推進し、県全体の、また、各市町村における本プログラムのアウトカム評価を開始しています。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、新型コロナウイルス感染症の影響で困難な時期が続いておりますが、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願ひ申し上げます。（和田 記）

炎症性腸疾患センター

炎症性腸疾患（IBD）センターはIBDを専門に診療するために消化器内科、消化管外科、小児科、小児外科が中心となって設立されたセンターです。IBDは根治が難しい疾患で、その患者数も増加しつつあります。また難治な患者さん、様々な合併症を有する患者さんもおられることより、多くの科と看護師・栄養士・薬剤師などコメディカルとの連携が必要と考え、IBD診療に特化したセンター部門として2016年に設立となりました。センター設立に尽力いただいた前センター長の岡田裕之は消化器肝臓内科の主任教授退官後、姫路赤十字病院で勤務していますが、その意思をしっかりと受け継ぎ、センター長の平岡佐規子、副センター長の近藤喜太（消化管外科兼任）を中心に運営しています。毎日、専門外来（月曜：平岡／衣笠（内科）、近藤（外科）、塚原／津下（小児科）、火曜：井川（内科）、水曜：井口（内科）／野田（小児外科）、木曜：平岡／原田（内科）、金曜：高原／山崎／川野（内科）；2022年8月時点）を行う一方で、緊急性の高い症例については救急・時間外で対応しており、難病に苦しむIBD患者さんの支えになるべく日夜奮闘しております。岡山市内・県内のみならず、広く中四国のIBD患者さんの積極的な受け入れに努めております。コロナ禍のため、感染トリアージの必要は依然ありますが、初発症例、治療困難症例などのIBD症例だけでなく、診断に至らないIBD類縁腸炎など含め、お困りの患者さんがおられれば、まずはお気軽にご相談ください。また現在、IBD診療の質を担保するため、病状が安定した方は近隣の市中病院、開業医の諸先生方への逆紹介も積極的に行っております。引き続き病病・病診連携についてもよろしくお願ひ致します。最後に、IBD患者さんの「最後の砦」病院として引き続き努力してまいります、ご高配のほど宜しくお願い致します。（井口、平岡 記）

運動器疼痛センター

リウマチ性疾患治療部門では、リウマチ膠原病内科、小児科、整形外科による合同カンファレンスを月1回開催し、診断や治療に困った症例につき検討会を行っております。さらに出産可能年齢の女性（WOCBA）患者さんのよりよい集学的治療を実現するため、本年7月からは産婦人科学教室の増山教授のご高配のもと、衛藤英理子先生にもご参加頂いております。また、八代将登副センター長（小児科学）らのグループは難治性川崎病の治療経過中に新規バイオマーカー HRGが低下しHMGB1が

上昇すると、既存治療が効きにくくなることを発見しました。今回の知見は、より効果的な治療薬の開発やその他の血管炎の病態生理の解明につながることを期待され、研究成果は、国際学術誌「*Modern Rheumatology*」に掲載されました。

慢性疼痛治療部門では、岡山大学病院・岡山赤十字病院・川崎医科大学附属病院・光生病院合同Webカンファレンスを行っております。6/10-7/29には例年通り、岡山大学教養教育科目「痛みの発生メカニズムと医療」の講義を開講し、オムニバス形式で合計15コマの講義を行いました。また、「厚生労働省令和4年度慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業」の一環として本年度の第1回痛みセンター多職種連携研修会を7/15にハイブリッド形式で開催いたしました。鉄永副センター長が「慢性痛の要因に基づくタイプ分類について」と題してK-S要因ツールについての解説を行い、次いで有栖川整形外科・理学療法士 戸村千里先生に「治療から予防へ〜外来クリニックにおける包括的サポートサービスの展開〜」と題してご講演を頂きました。今年度はさらに3回の多職種連携研修会を開催予定です。9/18（日）には伊達久ガイドライン作成委員長をお迎えして慢性疼痛診療ガイドライン研修会を岡山プラザホテルで予定しておりますので、奮ってご参加頂けましたら幸いです。

引き続きのご支援・ご指導のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。（西田 記）

核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査を行っています。令和4年2月から令和4年7月の核医学検査件数は約1,050件となっています。コロナ禍による検査件数減少の影響が残っています。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では、その他に放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。令和3年12月より開始した神経内分泌腫瘍に対するLu-177を用いたペプチド受容体核医学内用療法（peptide receptor radionuclide therapy：PRRT）は順調に症例を積み上げています。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、去勢抵抗性前立腺がんの骨転移に対するRa-223療法も継続して行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願ひ致します。（児島 記）

結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石碎石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道

的内視鏡下手術や経皮的腎結石碎石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石碎石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石碎石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石碎石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。
(荒木 記)

てんかんセンター

岡山大学病院てんかんセンターでは、伊達 勲センター長(脳神経外科)のもと、秋山倫之副センター長(小児神経科)、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が協力し、岡山県指定のてんかん診療支援病院として、高度なてんかん診療を日々行っています。

新型コロナウイルス感染症がなかなか収まらない状況ではありますが、長時間ビデオ脳波同時記録検査を始めとする大学病院ならではの検査は、安全面に配慮しながら積極的に行っております。主にてんかん外科の候補症例を討論する症例カンファレンスも定期的に開催しております。

県内の診療レベル向上策として、月1回の症例検討webカンファレンスを今年度も継続しており、岡山県てんかん診療ネットワーク(県内の診療連携機関が参加)のwebサイトでは、てんかんに関する教育資料の配信を引き続き行っています。

教育・啓発活動に関しては、会場開催での講習会はいづらいい状況が続いておりますが、学校・幼稚園教員を主な対象としたてんかん講習会を8月にweb開催致しました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い致します。
(秋山 記)



下山 敦士

海外への留学者一覧

令和4年10月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4～未定
病 理 学 (免疫病理)	内 野 かおり	令3院	University of Montreal, Canada	2021. 6～2年間
	大 倉 隆 宏	平 21	Massachusetts General Hospital pediatrics, Boston, U.S.A.	2022. 4～2024. 4
疫 学・ 衛 生 学	鈴 木 越 治	平 17	Department of Epidemiology, Harvard T.H. Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2021. 6～
	土 生 裕	大学院生	Social and Behavioral Sciences of Harvard T.H. Chan School of Public Health, U.S.A.	2022. 8～2023. 2
消 化 器・ 肝 臓 内 科 学	中 川 裕	平 1	Columbia University in the City of New York, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
血 液・ 腫 瘍 学 呼 吸 科	梅 村 茂 樹	平 11	Georgetown University, Washington, U.S.A.	2018. 9～
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, U.S.A.	
	池 川 俊 太 郎	令2院	Dana Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A.	2021. 1～
腎・免疫・ 内 分 泌 代 謝 内 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	渡 辺 晴 樹	平 19	The Feinstein Institutes for Medical Research, U.S.A.	2020. 9～2023. 8
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6～
	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1～未定
	林 啓 悟	平 24	Harvard TH Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2021. 1～未定
	福 島 和 彦	令3院	Massachusetts General Hospital, Boston, U.S.A.	2022. 2～
消 化 器 外 科 学	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2019. 2～2023. 3
	梶 原 義 典	大学院生	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2022. 4～2025. 3
	九 十 九 悠 太	平 21	Harvard T.H. Chan School of Public Health, U.S.A.	2022. 6～2024. 6
呼 吸 器・ 乳 腺 内 分 泌 外 科 学	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A.	
	植 村 忠 廣	平 6	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A.	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4～
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12～
	三 浦 章 博	平 23	Center for Human Development, U.S.A.	2020. 10～
	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Canada	2021.4～2023.3(予定)
整 形 学 外 科 学	岡 崎 勇 樹	平 25	Hospital for special surgery, New York, U.S.A.	2022. 4～2年間
	篠 原 健 介	平28院	Rady Children's Hospital San Diego Orthopedics/Scoliosis, U.S.A.	2022. 7～2023. 7
	釜 付 祐 輔	平 22	Oslo Sports Trauma Research Center (Norwegian School of Sport Sciences), Norway	2022. 8～2023. 7
皮 膚 科 学	杉 原 悟	平 27	University of Queensland Diamantina Institute, Australia	2022.5～2024.3(予定)
	光 井 洋 介	令1院	Cleveland Clinic, U.S.A.	2021. 6～未定
泌 尿 器 病 態 学	河 田 達 志	大学院生	Medical University of Vienna, Austria	2021.9～2023.3(予定)
	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
麻 酔 学 蘇 生 学 脳 神 経 学	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2～2022.12
	西 村 義 人	平 27	University of Hawaii Internal Medicine, U.S.A.	2020. 9～
総 合 学 内 科 学	原 田 洸	平 28	Mount Sinai Beth Israel, U.S.A.	2021. 7～
	網 岡 尚 史	平 22	Univeraity of Kentucky, Saha Cardiovascular Research Center, U.S.A.	2021. 5～未定
循 環 器 内 科 学	江 尻 健 太 郎	平31院	Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health, U.S.A.	2021. 9～未定
	市 川 啓 之	平 24	Harbor-UCLA Medical Center, David Geffen School of Medicine, University of California, Los Angeles	2022. 7～未定
	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
心 臓 血 管 外 科 学	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	小 林 泰 幸	平 24	The Hospital for Sick Children, Canada	2021. 7～
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7～
	木 佐 森 永 理	大学院生	Children's National Hospital NW, Washington	2022. 7～

医学部医学資料室がリニューアルオープン

このたび、医学部創立150周年記念事業の一環として行われた、鹿田会館（旧生化学棟）の改修に合わせ、それまで原則非公開だった医学部医学資料室を一般公開いたしました。鹿田会館の1階に常設展示室（52㎡）と企画展示室（26㎡）、収蔵庫（26㎡）を設け、本年3月28日、医学資料室入口看板の除幕式を行いました。その後、5月9日、医学部ホームページにて見学方法等を掲載し、一般公開の体制を整備いたしました。

展示内容は、岡山藩医学館から始まる岡山大学医学部の歩みと江戸時代以降の岡山の医学史を中心に、101件、226点を展示しています。天然痘種痘の接種器具や明治時代の顕微鏡をはじめ、江戸時代の医学書や学生が書いたノート、学生の成績表など、当時の授業の様子がわかるものまで幅広く展示しています。母校へ立ち寄る機会があれば、是非、医学資料室へも足をお運びください。

○見学方法は以下のURLからお申し込みください。

【医学部HP - 医学部医学資料室】

問い合わせ・申込み先

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 Jホール事務室

E-mail j-hall@adm.okayama-u.ac.jp 電話 086-235-6826

<https://oumed.okayama-u.ac.jp/about/anniversary/igakushiryoshitsu/>



看板除幕式

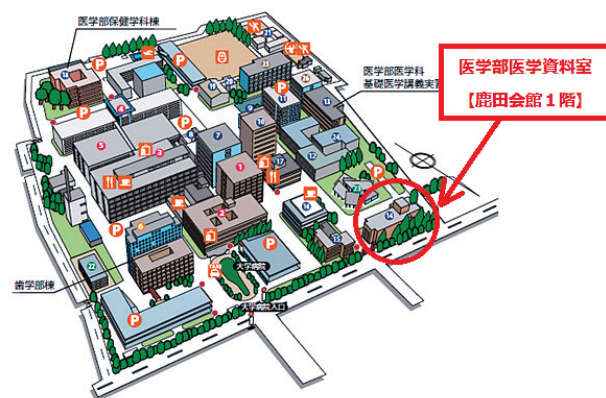


展示室内風景



展示室内風景

鹿田キャンパス



鹿田会館配置図

ご寄贈いただきました

次の方々より、御著書等をご寄贈いただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。

岡田 奏二 先生（昭43）より

「膵臓の顕微鏡的解剖学的構造への貢献」

パウル・ランゲルハンス 著 岡田奏二 訳

「新版 摘膵糖尿病の研究」

オスカー・ミンコウスキー 著 岡田奏二 訳

「BASIC DIABETES EDUCATION AS A MODEL」

岡田奏二 著

（いずれも朝日カルチャーセンター発行）



I 膵臓の顕微鏡的解剖学的構造への貢献

「1つの解剖学的構造の発見が、これほど後の医学の進歩に巨大な影響をおよぼした例は余りない。それがランゲルハンス島の発見ではないかと思う。」と、東京大学大学院医学系研究科糖尿病・生活習慣病予防講座特任教授の門脇孝先生はこの訳書に対して序文を寄せられています。

即ち、上級医学生パウル・ランゲルハンスは医学博士号取得のため、全ての細胞は細胞から生じるという法則を発見したルドルフ・ルートヴィヒ・カール・フィルヒョウ教授が指導するベルリン大学病理学研究所において膵臓の顕微鏡的観察を遂行した。そこで、彼は膵臓の至るところにみられる周辺の細胞とは異なる染まり方をする明るい細胞からなる島について詳しく観察し、これをまとめたものが本書であって、ドイツにおける博士論文の質の高さを窺い知ることのできる貴重な一冊でもある。

II 新版 摘膵糖尿病の研究

「単純かつ明確な研究が科学を飛躍的に進歩させ、科学の将来を大きく方向づけることは稀でない。1889年、偶然とはいえ、摘膵したイヌが重篤な糖尿病をおこすことを示したv. MeringとO. Minkowskiの研究は、それまで成因が全く不明であった糖尿病が膵と深く関係することを明らかにしたばかりでなく、その後インスリンの発見など多くの画期的な業績を促したもので、糖尿病学におけるまさに不滅の金字塔である。

Minkowskiの原著を手にしておぼえた訳者岡田博士の熱い感動と同じ感動を本書は読者に伝えてくれる。新しい科学も科学の歴史の上に創られる。医学・生物学の明日を創造しようとする科学者に是非一読して戴きたいと願ってやまない。」と、東京大学名誉教授でいらっしゃった小坂樹徳先生は力を込めて序文をお書き下さっています。

III BASIC DIABETES EDUCATION AS A MODEL

戦後にみられる食事内容の変化と有酸素運動の減少によって日本人糖尿病は増加しているが、かかる生活内容を元にもどすことができれば、糖尿病は寛解するし、その数も減少するであろう。

そのための望ましい生活を患者自らが実践できるようになるには、適切な教育が付与されることがぜひとも必要である。

そこで編みだされたのが、本書の教育モデルである。実際のところこのモデルでの介入は代謝改善に有用であるばかりかRemissionへの導入に役立っている。しかも、欧米人とは異なってインスリン初期分泌の低下があるにもかかわらず、インスリン基礎分泌が増加するなどによってRemissionへ移行している。

「岡田先生、之はすごいですよ。」と謹呈させていただいた本書を手にながら満面に力を込めた表情で東京大学名誉教授小坂樹徳先生からお心のこもった讃辞を賜りましたことは生涯忘れえぬ出来事となっています。

吉野 正 先生（昭56）より
「吉野 正教授退官記念業績集」



会費納入について（お知らせ）



ご存知ですか？

コンビニエンスストアからの払込みが可能になりました！

お近くのコンビニで、お買物ついでに、帰宅途中や、土日祝でも、ご負担なくお支払いいただけます。手数料もかかりません。

鶴翔会では、総会、会報や会員名簿の発行など同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関する大学行事への協賛、医学インターンシップなどの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動を行っております。こうした活動は会員の皆様からの会費により支えられています。年額3,000円の会費納入にご理解ご協力くださいますようお願い申し上げます。

●会費の納入方法

1. 会報に同封の専用払込用紙（払込手数料は鶴翔会負担）

金額の訂正、通信欄への連絡事項のご記入がある場合はコンビニでは受付できませんので郵便局から払込みください。

*ゆうちょ銀行は、現金を使った払込みにおいて、2022年1月17日から手数料を新設しており、1件ごとに料金110円が払込人にかかります。

2. 自動引落し

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。毎年7月にご指定の口座からお引落しいたします。ご希望の方は手続用紙をお送りいたしますので鶴翔会事務局までご連絡ください。

3. インターネット・モバイルバンキング

ご利用の金融機関でネットバンキングをお申込みされていまして、直接お振込みが可能です。お振込みの際は会員番号及び氏名を必ず入力してください。

【振込銀行 口座名】

・中国銀行 清輝橋支店（チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）

普通預金 1591434

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

・ゆうちょ銀行

※ゆうちょ銀行から振込の場合

記号 15410 番号 38020041

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

※ゆうちょ銀行以外から振込の場合

店名 五四八（ゴヨンハチ）店番548

普通預金 3802004

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

●お得な会費制度もあります

- ・一時に25年間分の会費75,000円を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費請求はございません。振込金額を75,000円に訂正してお振込みください。
- ・満7歳になられたときはお申し出により会費が免除になります。

事務局からのお知らせ

貴重なご提言をいただいて

鶴翔会 事務局

岡山大学医学部同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび、坪井修平先生（昭40）から、鶴翔会会報誌へ、「鶴翔会・鶴翔会報・医学部へ再度のお願い」との貴重なご提言を寄稿いただきました。

また、「ルネッサンス基金」へのご質問等を頂戴いたしました。

まず、ご提言に関してですが、岡山大学医学部を思うがこそのお気持ちとして受け止め、出来るところから、しっかりと取り組んでいきたいと考えております。

また、「ルネッサンス基金」へのご質問等については、会報誌前号でお知らせしたとおり、現在、ルネッサンス基金管理委員会を立ち上げ、積み残した事案等を進めております。創立150周年記念事業の「柱」は、ご指摘のとおり地域に根ざし国際感覚を身につけた高度医療人の育成であります。人材育成計画は、記念事業の人材育成の主旨である「国際感覚を身につけた高度医療人の育成」と県内のある企業から寄付金をいただき、その寄付目的（医学研究のため海外留学助成）の趣旨に沿い、「医学研究留学・先進医療研究助成基金」を設置し、助成をスタートさせるという計画を整備しておりましたが、ここ数年、コロナ禍でまだ実施できていないのが現状です。

旧生化学講堂は、医学部150年の歴史の中で由緒ある歴史的建造物であり、隣接のJホールと併せて、大規模な学会もキャンパス内で開催可能となるべく整備されたものであり、今後の有効活用が期待されると考えています。また、コロナによる経済的困窮学生への支援として、ルネッサンス基金から、岡大医療系学生への奨学一時金事業へ100万円を寄付しております。

以上、概略の説明で恐縮ですが、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

ルネッサンス基金の収支については、積み残し事業も終え、決算について、管理委員会の審議を経た後、ご報告できればと考えています。

今後とも、医学部、鶴翔会へのご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

鶴翔会のホームページをご存じでしょうか

リニューアルした、鶴翔会ホームページをぜひご覧ください。



- ・同窓会報のバックナンバー（前号～過去5年間まで）が閲覧いただけます。
- ・Newsでは、その時々のお知らせを発信していきます。

会員の皆様に、より見やすく親しんでいただけるよう努めてまいりますので、ご活用くださいますようお願いいたします。

■ご勤務先・ご住所などご連絡先の変更がございましたらお知らせください。

鶴翔会ホームページの「事務局より」から、変更届フォーム、または下記QRコードをご利用ください。
メール・FAX・お電話でのお届けも受け付けております。



変更届フォーム

■鶴翔会会報へのご投稿をお待ちしております。

随時、原稿を受け付けておりますので、奮ってご寄稿くださいますようお願いいたします。投稿内規につきましては会報の「岡山より」鶴翔会会報投稿内規、または鶴翔会ホームページの「同窓会報について」でご確認いただき、郵送、またはメールにてご寄稿ください。

お問合せ・ご連絡は

鶴翔会事務局 TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052
E-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp
HP：https://kakushokai.oumed.okayama-u.ac.jp/

学生編集委員と意見交換を行いました

6年生の学生編集委員 武内さん、六車さんにご来局いただき、在学生の立場から、鶴翔会（同窓会）や会報誌への感想・要望など、貴重なご意見をいただきました。

今後の活動、会報の編集に活かしていきたいと思えます。
お忙しい時期にご協力いただき、ありがとうございました。
6年生の皆さんのご健勝をお祈りしています。



令和4年度卒年次別会費納入状況

令和4年8月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	40	56	44	27	61%	10	105	98	41	42%
17	2	0	0	-	41	71	59	31	53%	11	96	89	33	37%
17専	2	0	0	-	42	68	56	29	52%	12	99	92	25	27%
18	4	1	1	100%	43	78	66	38	58%	13	100	96	25	26%
18専	5	1	0	0%	44	74	57	26	46%	14	94	74	24	32%
19	2	0	0	-	45	72	66	37	56%	15	92	74	23	31%
19専	6	2	1	50%	46	84	72	38	53%	16	98	76	23	30%
20	5	1	0	0%	47	79	71	38	54%	17	100	82	24	29%
20専	9	2	2	100%	48	92	86	45	52%	18	98	85	21	25%
21	4	1	0	0%	49	102	88	51	58%	19	98	82	24	29%
22	5	2	0	0%	50	71	66	36	55%	20	91	72	23	32%
23	11	4	2	50%	51	108	99	48	48%	21	104	84	27	32%
23専	10	3	2	67%	52	101	92	41	45%	22	94	83	26	31%
24	5	2	1	50%	53	73	65	33	51%	23	107	86	26	30%
24専	26	11	3	27%	54	119	111	50	45%	24	98	79	18	23%
25	9	4	0	0%	55	112	105	63	60%	25	95	91	32	35%
25専	24	12	2	17%	56	107	97	54	56%	26	105	95	25	26%
26	12	8	3	38%	57	124	112	58	52%	27	105	96	21	22%
26専	16	8	2	25%	58	113	103	54	52%	28	114	106	17	16%
27	16	11	6	55%	59	123	117	52	44%	29	120	110	14	13%
27専	8	5	3	60%	60	112	102	42	41%	30	112	103	18	17%
28	22	11	3	27%	61	112	104	47	45%	31	122	107	7	7%
29	19	11	4	36%	62	118	112	58	52%	令2	119	111	4	4%
30	23	12	3	25%	63	129	123	50	41%	3	110	107	25	23%
31	31	22	8	36%	平1	106	95	44	46%	4	122	119	19	16%
32	29	18	8	44%	2	120	112	52	46%	学部卒計 6,536 5,685 2,175 38%				
33	33	27	13	48%	3	111	97	48	49%	長期滞納者請求 2,454件 納入者 56件 2.3%				
34	45	30	15	50%	4	117	106	56	53%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
35	53	40	19	48%	5	109	103	35	34%	卒年次 会員数 請求者数 納入者数 納入率				
36	47	38	19	50%	6	119	111	46	41%	大学院卒 1,577 1,038 268 26%				
37	42	34	17	50%	7	108	93	32	34%	その他 1,679 1,490 704 47%				
38	51	42	19	45%	8	101	97	41	42%	合計 9,792 8,213 3,147 38%				
39	51	43	18	42%	9	97	95	36	38%					

注：
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

鶴翔会会員名簿（2022年版）の発行について

鶴翔会会員名簿（2022年版）を12月に発行いたします。

住所、勤務先など変更がある会員の方は、鶴翔会事務局までご連絡下さいますようお願いいたします。鶴翔会ホームページ（<https://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp/>）の変更届フォームより変更を行うことができます。メール、FAX、お電話でも可能です。

なお、個々人のデータの掲載についてご要望等ある方は、お申し出頂ければ発行に間に合う範囲で対応させていただきます。発行後におきましてもお申し出頂ければ次号から反映させていただきます。

また、個人情報保護法の主旨を踏まえてデータの管理等には細心の注意を払ってまいります。会員の皆様におかれましても、会員名簿の取り扱い、特に不要になった名簿の廃棄についてご注意下さいますようお願いいたします。処分にお困りの際は、送料ご負担の上鶴翔会事務局までお送り頂ければ当方にて処分いたします。

鶴翔会会員名簿（2022年版）を予約ご希望の向は、1冊7,000円（送料込み）を同封の振込用紙により払込み下さい。

鶴翔会事務局

電話 : 086-235-7060

FAX : 086-235-7052

E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp



鶴翔会ホームページ 会員情報変更届フォーム QRコード

(公財) 岡山医学振興会より 「教育研究を進めるもの2」

代表理事
(昭和54年卒、名誉教授)
山田 雅 夫

燈火親しむべき候、鶴翔会の皆様には、ますますご清栄のことと拝察申し上げます。新型コロナウイルス感染症からの出口を模索する中、皆様の懸命のご尽力に敬意を表します。

岡山医学振興会では、皆様からのご支援をいただき、今年度も教育研究助成の公募・選考を進めております。厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも、岡山の医学振興のため、引き続き、あたたかいご支援を賜りますよう、改めてお願い申し上げます次第です。さて、今回は、ウイルス学の分野で進められている「不要不急」?の取り組みを紹介してみたいと思います。

微生物の種名といえば、細菌学では、以前からリンネの二名法によって、例えばブドウ球菌は *Staphyrococcus aureus* と記載されてきました。一方、ウイルスの種名は、最近まで、主に英語表記を基盤として、二名法のルールを適用しない方式が採用されていました。イタリック体で大文字から記載するもののB型肝炎ウイルスの種名は *Hepatitis B virus* です。

ところが、国際ウイルス分類委員会 (ICTV) は、2021年方針を転換して、二名法の種名に改めていくことを決定し、順次作業が進められています。すでに二名法を適用した例として、風疹ウイルスの種名 *Rubivirus rubellae*、狂犬病ウイルスの種名 *Lyssavirus rabies* があります。また、C型肝炎ウイルスの種名は *Hepacivirus C* で、二名法のルールに従っています。やがて、*Hepatitis B virus* も *Japanese encephalitis virus* もラテン語を模した二名法の種名に変更されることになります。

ここまで聞くと、それだけなら確かに不要不急の話だな、なんで今、と考えるかもしれません。実は、この裏ではウイルス全体 (Viroshere) を網羅する新分類体系の構築という大変革が進行しています。つまり、これまでの、伝統的な5階層 (種、属、亜科、科、目) の分類を基盤として、目の上位に綱 (class)、門 (Phylum)、界 (kingdom)、域 (realm) 等を新設して、総計15階層でウイルスの分類の体系化を目指すということです。

最初に提唱されたりボウイルス域 (Realm *Riboviria*)

を最上位とするRNAウイルスの分類では、RNA依存RNAポリメラーゼとその近縁の逆転写酵素を識別遺伝子と定め、その分子系統樹を基準としています。一方、DNAウイルスについては、RNAウイルスのように単一の域 (realm) ではなく、3つの域 (realm) を最上位の階層としています。

その背景には、ゲノム及びメタゲノム解析プロジェクトに伴う、ほぼ指数関数的なウイルス種増加への対応があります。ヒト以外の動物ウイルス、植物ウイルス等、全てのウイルス種を取り扱うICTVとしては、どうしても決断すべき大変革だったといえます。今後発見される新しいウイルス種の分類・命名をルールに基づいて定めることができるように仕組みと入れ物を用意したといえます。

新分類体系の構築のために、多くの分類階層に命名が新たに追加されました。ヒトパピローマウイルスと子宮頸がんの関連を発見した研究者にちなんで命名されたOrder *Zurhausenvirales* などに交じって、日本語が語源となっているものもあります。万葉集に、世界で初めて植物ウイルスによる病葉を詠んだ称徳天皇にちなんで命名されたkingdom *Shotokuvirae* です。

人と動物の健康と環境の健全性を一つのものと捉えるOne Healthの概念が提唱され、我が国では「ネオウイルス学」のプロジェクトが展開し、本学からは本田教授と倉敷の資源生物科学研究所の鈴木教授が参画しています。Order *Yadokarivirales* は、鈴木教授が発見した真菌のウイルスにちなんで命名です。

岡山の教育・研究・医療の最前線を側方から支援するため、岡山医学振興会へのご寄付を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長（兼研究（医科）担当） 前田 嘉信
 副病院長〔総務運営担当〕 森実 真
 同〔企画・SDGs担当〕 大塚 文男
 同〔診療（医科）・防災担当〕 増山 寿
 同〔教育（医科）担当〕 伊野 英男
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一

令和4年10月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文 男	花 山 宜 久	萩 谷 英 大	小比賀 美賀子	長谷川 功	谷 山 真規子
	消化器内科		平 岡 佐規子	川 野 誠 司	堤 康一郎	衣 笠 秀 明	井 口 俊 博
	血液・腫瘍内科	前 田 嘉 信	松 岡 賢 市	市 原 英 基	浅 田 騰	藤 原 英 晃	横 本 剛
	呼吸器・アレルギー内科	木 浦 勝 行	松 岡 賢 市	市 原 英 基	浅 田 騰	肥 後 寿 夫	横 本 剛
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和 田 淳	江 口 潤	田 邊 克 幸	松 本 佳 則	辻 憲 二	喜 多 村 真 治
	リウマチ・膠原病内科	和 田 淳	松 本 佳 則	田 邊 克 幸	松 本 佳 則	辻 憲 二	喜 多 村 真 治
	循環器内科	伊 藤 浩	中 村 一 文	赤 木 達	三 好 亨	高 谷 陽 一	戸 田 洋 伸
	脳神経内科		山 下 徹	森 原 隆 太	武 本 麻 美	袖 木 太 淳	中 野 由 美子
感染症内科	草 野 展 周						
外 科	消化管外科	藤 原 俊 義	寺 石 文 則	黒 田 新 士	重 安 邦 俊	菊 地 覚 次	前 田 直 見
	肝・胆・膵外科	八 木 孝 仁	榎 田 祐 三	黒 田 新 士	高 木 弘 誠	高 木 弘 誠	藤 智 和
	呼吸器外科	豊 岡 伸 一	杉 本 誠 一 郎	枝 園 忠 彦	岡 崎 幹 生	山 本 寛 斉	三 好 健 太 郎
	乳腺・内分泌外科	枝 園 忠 彦	岩 谷 胤 生	枝 園 忠 彦	高 橋 侑 子	岩 谷 胤 生	高 橋 侑 子
	泌尿器科	荒 木 元 朗		枝 村 康 平	小 林 知 子	西 村 慎 吾	岩 田 健 宏
	心臓血管外科	笠 原 真 悟		小 谷 恭 弘	廣 田 真 規	川 畑 拓 也	小 林 純 子
	小児外科	野 田 卓 男			尾 山 貴 徳	尾 山 貴 徳	尾 山 貴 徳
	小児心臓血管外科	笠 原 真 悟					
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾 崎 敏 文	西 田 圭 一 郎	雑 賀 建 多	藤 原 智 洋	鉄 永 智 紀	齋 藤 太 一
	形成外科	木 股 敬 裕	難 波 祐 三 郎	渡 邊 敏 之	難 波 祐 三 郎	松 本 洋	妹 尾 貴 矢
	皮膚科	森 実 真	川 上 佳 夫	三 宅 智 子	横 山 恵 美	野 村 隼 人	梶 田 藍
	眼 科	森 實 祐 基		塩 出 雄 亮	藤 原 美 幸	細 川 海 音	濱 崎 一 郎
	耳鼻咽喉科	安 藤 瑞 生	假 谷 伸	菅 谷 明 子	檜 垣 貴 哉	牧 野 琢 丸	前 田 幸 英
脳・神経・精神科	精神科神経科	高 木 学	寺 田 整 司	岡 久 祐 子	千 田 真 友 子	竹 之 下 慎 太 郎	藤 原 雅 樹
	脳神経外科	伊 達 勲	安 原 隆 雄	藤 井 謙 太 郎	平 松 匡 文	石 田 穰 治	春 間 純
	麻酔科蘇生科	森 松 博 史		清 水 一 好	松 岡 義 和	金 澤 伴 幸	谷 真 規 子
小児・産科・女性科	小児科	塚 原 宏 一	岡 田 あゆみ	馬 場 健 児	藤 井 智 香 子	栗 田 佳 彦	吉 本 順 子
	小児循環器科	塚 原 宏 一					
	小児神経科	小 林 勝 弘	秋 山 倫 之	秋 山 倫 之	柴 田 敬	土 屋 弘 樹	秋 山 麻 里
	小児血液・腫瘍科	塚 原 宏 一					
	小児麻酔科	岩 崎 達 雄					
	小児放射線科	松 井 裕 輔					
	小児心身医療科	岡 田 あゆみ					
産科婦人科	増 山 寿	中 村 圭 一 郎	中 村 圭 一 郎	早 田 桂	小 川 千 加 子	久 保 光 太 郎	
放射線科	平 木 隆 夫		松 井 裕 輔	児 島 克 英	吉 尾 浩 太 郎	宇 賀 麻 由	
救命救急科	中 尾 篤 典	内 藤 宏 道	内 藤 宏 道	塚 原 紘 平	湯 本 哲 也	小 崎 吉 訓	
病理診断科	柳 井 広 之		西 田 賢 司			西 田 賢 司	
緩和支援医療科	田 端 雅 弘	片 山 英 樹					
臨床遺伝子診療科	平 沢 晃	山 本 英 喜	山 本 英 喜	山 本 英 喜		山 本 英 喜	

鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数（程度）	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部（病院）の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないとと思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
4. 原稿、挿絵はデータ（word、JPEG等）にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052

E-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

編 集 後 記

会報133号をお届けします。

コロナ禍はいつまで続くのでしょうか。第6波が過去最高の感染者数となりましたが重症者数はそれほど多くなく、少しずつ落ち着いてきていました。ところが7月に入って猛烈な勢いでオミクロン株のBA.5が広がり、第7波は再び過去最高の感染者数を記録する状況が続いています。発熱外来への患者の殺到や保健所業務の破綻などから、政府は第7波が落ち着けば新型コロナウイルス感染症の第2類分類を再考することを考えているようですが、どうなるのでしょうか（この原稿は8月上旬に執筆）。

今年の梅雨の期間は極端に短く、その後猛烈な暑さが6月下旬にやってきて、猛暑日が続く異常な状況でした。代わりに7月にはかなり降雨がありましたが、降れば降ったで極端な豪雨となり各地に被害を及ぼしました。ヨーロッパでは40℃を越える日が続き、広範な山火事が報道されています。異常気象も毎年となると、異常なのかどうかはわからなくなってしまいそうです。

鹿田会館の1階にある医学部医学資料室の看板除幕式が行われ、一般の方でも見学できるようになりました。

た。常設展示室、企画展示室、収蔵庫が設けられています。江戸時代のワクチン接種器具や明治時代の顕微鏡、種々の医学資料が展示されていて、医学部150年の歴史の重みをひしひしと感じる事ができます。どうぞ一般の方にも見学をお勧めください。

鶴翔会のホームページがリニューアルされました。「鶴翔会」で検索するとすぐに見つかります。左上の「同窓会報について」をクリックすると右に「同窓会報バックナンバー」があります。岡山医学同窓会報（鶴翔会会報）の近年のバックナンバーや会報目次一覧をPDFファイルで見ることができます。過去の記事をご覧になる際などにお役立てください。医学部生に在学時代から同窓会報に親しんでもらうためにも利用していきたいと思います。

鶴翔会の年会費を納入しやすくするために、コンビニでも会費納入ができるようにいたしました。すでに鶴翔会会報上でお知らせしたので、早速利用された方がかなりいらっしゃると思います。より手軽で便利なコンビニでの会費納入を是非ご利用ください。

（伊達 勲）

発 行 鶴翔会（岡山医学同窓会）
 会報幹事 伊達 勲
 鶴翔会会報編集委員 前田嘉信、
 大橋俊孝、森實祐基、木浦勝行、
 伊達 勲、頼藤貴志、豊岡伸一、
 森実 真、柳井広之、和田 淳、
 川口綾乃
 久保俊英（岡山医療センター）、
 武内恵太（医学科6年生）、
 六車明日香（医学科6年生）
 〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
 電 話 （086）235-7060・7061
 F A X （086）235-7052
 E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp
 http://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp

印 刷 友野印刷株式会社
 電 話 （086）255-1101
 F A X （086）253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。

鶴翔会会員向けサービスのご案内

○ 岡山大学勤務医師賠償責任保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。
鶴翔会ホームページにパンフレットを掲載していますのでご覧ください。

特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入を希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局 TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して



三井住友トラストVISAゴールドカードをご案内しております。

三井住友トラストVISAゴールドカードSなら…

初年度年会費無料！

2年目以降も前年度のご利用金額が10万円以上で ▶▶ 年会費無料が続きます！

前年度のご利用金額が10万円未満でも ▶▶ 年会費 **2,750円** (税込)



今なら！ 最大 **20,000** 円相当 **ポイントプレゼント**

2023年3月31日ご入会まで キャンペーンの詳細は下記のURLにてご確認ください。

※1ポイント1円でポイント交換した場合です。交換内容によっては1ポイント1円にならない場合もございます。

オンライン申込み専用URL <https://www.smtcard.jp/lp/gold-sp.html>

オンライン

★団体コード入力欄には **【72190】** を半角英数字でご入力ください。



弊社公式サイト(<https://www.smtcard.jp/>)などからのお申込みは、上記年会費特典が適用になりませんのでご注意ください。

学生と弊社カードからお切り替えご希望の方は、申込書をご請求願います。(オンラインでは申込みいただけません)

紙のお申込書の請求・お問い合わせは、下記の三井住友トラスト・カード株式会社まで

電話

0120-370-070

受付時間：9:00～17:00
(土・日・祝日・12/30～1/3を除く)

メール

Moushikomi@smtcard.jp



ご請求の際は、右記①～⑤の内容をお伝えください。

- ①郵便番号 ②ご住所 ③お名前(メールの場合：よみがなもお願いします)
- ④お電話番号 ⑤所属団体名：鶴翔会(団体コード **S72190**)

個人情報の取扱いに関する同意文言：私は申込書請求のために提供する個人情報を貴社が次の目的達成のために利用することに同意します。
[弊社は「個人情報の保護に関する法律」に基づき適正な保護を講じたうえで、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。]

※入会審査の結果、ご希望に添えない場合もございますのでご了承ください。

2022_6505

裏表紙の写真

総合教育研究棟

平成15年(2003年)竣工

同研究棟の竣工により、基礎医学系・社会医学系のすべての研究室が新當の建物に移転した。



鶴翔会

岡山医学同窓会報